大夏の瓦解

畢隣陁

州を奪ひしが、更に鋒を西に轉じて條支を侵し、メヂア、スシアナ(Susiana)波斯及バビロニアを略して版圖をエウフラテスの下流に擴張せり。西紀前一六〇年の頃大夏王エウクラチデスの印度より凱旋するや、其子ヘリオクレス(Heliocles)之を途に要擊して自立せしが、是より大夏の國勢漸く傾き、加ふるに北は月氏の侵寇を被ふり西南は地を安息に失ひ其驅域日に縮まる。是に於て大夏は援を條支に求め共に連合して安息を挾擊せんとし、條支王デメトリオス二世ニカートル(Nikator)之に應じて西紀前一四〇年安息に侵入せしに、ミトリダテス迎へ擊て之を破り、デメトリオスを虜にして西方亞細亞の覇權を握れり。時に大夏は其領土全く瓦解し、次で尚ほ高附カブール乾陀羅カンダハル及其他の地方に希臘人の小王國勃興せしも西紀前八〇年に至り悉く大月氏の爲めに併呑せらる。就中最も强盛なりしは西紀前一四〇年頃カブールに都せる畢隣陁ミリンダまたは彌蘭陀ともいふ(Milinda)即ちメナンデル(Menander)王にして、一時王の版圖は北はパロパミソス山より南は印度洋に至り、西はヘラット(Herat)附近より東は恒河の支流ジュムナ(Jumna)河に達せりといふ。

武帝張騫を大月氏に遣る

第九章　漢と匈奴及大月氏　西域の交通

武帝の内政

武帝張騫を大月氏に遣る—大宛と康居—同盟成らず—漢代の四域—南北二道—衛青匈奴を伐つ—霍去病匈奴を伐つ—渾邪王降る—單于の逃走—漢烏孫に通ず—西域始めて漢に通ず—大宛漢に降る—安息漢に通ず—匈奴の遼寇—漢軍漸く振はず—武帝の財政救治策—殿法酷刑—輪臺の詔と馬服令—武帝の晩年

武帝は連年匈奴と兵を交ふるに當り、會〻匈奴の漢に降れるものよりして月氏の匈奴を怨めるを知り、使を通じて與に匈奴を挾擊せんと欲す、而も道必ず匈奴の中を經るを以て能く使するものを募りしに、漢中の人張騫募に應じ、西紀前一三九年漢武帝元二年建堂邑氏の奴甘父等百餘人と倶に隴西より出て匈奴の中を經其捕ふる所となる。單于騫を留むること十餘歲騫漢節を持して失はず、遂に其屬と亡げて月氏に向ひ西走數十日大宛に至る、大宛は當時大月氏の北に國し今の費爾干フェルガナ(Ferghana)地方に當る。是より先き大宛漢の一

大宛と康居

富強を聞き通ぜんと欲して得ず、騫の其國に至るや大に喜び漢の賂遺を得んと欲し、譯を發して騫を送り導て康居に抵る、康居は當時大宛の北にありて今のシール河の北部及西比利亞(Siberia)の吉利吉思(Kirghis)荒原の地を占む、而して康居の東南大宛の東は即ち烏孫にして、更に其東南には疏勒(喀什噶爾)(Khuan-shgar)于闐(Khotan)溫宿(Aksu)龜茲(Kucha)焉耆(Khurashal)姑師(Turfan)樓蘭(後鄯善と稱す、タクラマカン沙漠の東南今のチェルチェン(Cherchen))等大小三十餘國ありて皆匈奴に役屬し、匈奴の西邊日逐王僮僕都尉を置きて之を統監せしむ。張騫康居より傳して大月氏に至り漢と同盟して匈奴を夾擊せんことを說きしも、時に大月氏は既に大夏を臣服し地肥饒に寇少なく逸樂に安んじ、また漢と遠く隔れるを以て同盟して復讐するの念なし。張騫遂に大月氏の要領を得る能はず、大夏に赴き留まること歲餘、漢に歸らんとしてまた匈奴の得る所となりしが、西紀前一二六年(漢武帝元朔三年)軍臣單于死し、其弟右谷蠡王伊稚邪自立して單于となり、軍臣の太子於單を攻破し於單亡げて漢に降り匈奴大に亂るゝや、張騫、堂邑父と俱に亡げて歸る、初め張騫行く時同行するもの百餘人、十三歲を經

同盟成ならず

漢代の西域

て還るを得たるもの唯二人のみ、時に西紀前一二六年なり、是より漢と西域との通路始めて開く。

西域とは支那本部の西北に當れる諸國の總稱にして、漢初は東玉門(甘肅安西州)敦煌(敦煌縣)陽關(敦煌縣西南)より西葱嶺に至る間をいふ、其地初め三十六國ありしが後稍〻分れて五十餘國となる、皆匈奴の西烏孫の南にあり。玉門陽關より西域に通ずる二道あり、敦煌の西北樓蘭より西して且末(精絕二國共に伊犂の南にあたる今タクラマカン沙漠中に沒す)扜彌(克勒底雅)(Kunjip)を經て于闐に出でまた西北して莎車(葉爾羌)(Yarkand)に至るを南道となし、南道より西の方葱嶺を踰ゆれば大月氏、安息に出づ。また樓蘭より北して伊吾(哈密)(Hami)に至り、此より西して車師(吐魯番)(Turfan)に至り焉耆龜茲を經て疏勒に至るを北道となし、北道より西の方葱嶺を踰ゆれば大宛、康居、奄蔡(阿蘭那)(Alani)あり、而して葱嶺の西南は罽賓、烏弋山離(アレクサンドリアなり今のヘラトならん)にして罽賓の東南に身毒、其西に高附あり、更に其西は安息、條支にして以て西の方太秦に接す、太秦は一に犂軒といふ羅馬東領なり。

南北二道

衛青匈奴を伐つ

かくて漢は大月氏との同盟に失敗せしも衛青、霍去病等の諸將は屢〻匈奴

を擊退しぬ。是より先き匈奴は代郡、定襄、上郡等に入寇せしが、西紀前一二四年（漢武帝元朔五年）匈奴の右賢王の數、朔方を侵擾するに及んで、帝衛青を遣り六將軍に將として之を擊たしむ、時に衛青は三萬騎に將として高闕（奚娑武の西北陰山の西に出で、蘇建、李沮、公孫賀、李蔡は朔方に出で、李息、張次公は右北平に出で俱に右賢王を擊破して還れり。明年（漢武帝元朔六年）衛青、公孫敖、公孫賀、趙信、蘇建李廣、李沮の六將軍を率ゐ、再び定襄（山西歸化城南）に出で匈奴を擊破せしが、趙信敗れて匈奴に降り、蘇建は盡く其軍を亡ひ身を脱して歸る、趙信はもと匈奴の小王なり。後衛青の甥霍去病（霍去病匈奴を伐つ）もまた西紀前一二一年（漢武帝元狩二年）萬騎に將として隴西に出て匈奴を擊ち、轉戰六日焉支山（甘肅甘州府丹縣東南）を過ぎ匈奴の屬王休屠王（其故地は甘肅涼州府なり）の祭天金人を得、次でまた公孫敖と數萬騎に將として俱に北地に出て深く匈奴の地に入り、居延澤（甘肅肅州高台縣東北或はいふ流沙）を踰え祈連山に至りて還る。會、單于、渾邪王（其故地は甘肅甘州府なり）休屠王の西方に居りて數、漢軍の爲めに破らるゝを怒り召して之を誅せんとするや、二王恐れて漢に降らんことを謀りしが後休屠王悔ゆるに及び、渾邪王遂に之を殺し其衆を併せて降る、漢乃ち五屬國を置きて其衆を處らしむ。西紀前一一九年（漢武帝元狩四年）衛青、霍去病各、五萬騎に將として匈奴を擊ち、衛青は定襄より出で霍去病は代郡より出づ。衛青既に塞を出で捕虜の言によりて單于の居る所を知り、之を圍みしに單于六騎に乘じて遁れ去る、衛青追うて遂に寘顏山趙信城（俱喀爾喀にあり城は趙信の築く所なるを以て名く）に至り其積粟を燒て還る、此役老將軍李廣また軍に從ひ道を失うて自刎じぬ。霍去病は代、右北平より出て大漠を繞り、匈奴の左方を擊破して王將相等八十餘人を得、狼居胥山（喀爾喀邪の山名）に禪し瀚海（蘇尼特の北喀爾喀の南にあり其四は伊犂に接す）に登臨して還る。此時漢の殺虜する所の匈奴合して八九萬、漢の士卒の物故したるものもまた數萬に及びしが、是より後匈奴遠く遁れて漢南に王庭（匈奴の都するところを庭といふ）なく、漢は河を渡りて朔方より以西令居（甘肅涼州府西寧縣に）に至るまで、往々渠を通じ田官を置き稍匈奴以北を蠶食せり。漢

（單于の遁走）

（漢烏孫に通ず）

匈奴既に遠く漢北に遁れて鹽澤（羅布泊 Lobnor）より以東匈奴の隻影を見ざるに及び、張騫帝に勸めて烏孫と通じ之を渾邪王の故地に招き居らしめ、以て匈

奴の右臂を絶たんと謀り、自ら烏孫に使して昆莫に說き、更に副使を分遣して大宛、康居、大月氏、大夏、安息、身毒、于闐及其他の諸旁國に說かしむ。西紀前一一五年漢武帝元鼎二年張騫、烏孫の使者を隨へて還り、後歲餘にして副使等また諸國の人と俱に來る、是に於て西域始めて漢に通ず。然れども烏孫王遂に肯て東に還らず、漢乃ち渾邪の故地に酒泉郡甘肅州府高台縣を置き民を徙して之を充實し、また武威郡甘肅涼州府武威縣を置きて匈奴と羌との通路を絶ち、後更に武威、酒泉の地を分ちて張掖甘肅甘州府張掖縣敦煌二郡を置けり。既にして樓蘭、姑師車師同じの漢使を攻劫し、また數〻匈奴に通じて其耳目となるや、西紀前一〇八年漢武帝元封三年帝、趙破奴、王恢を遣り先づ擊て樓蘭王を虜にし遂に姑師を破り、因て兵威を示して烏孫、大宛等の諸國を動かさしむ。會〻烏孫の使者漢の廣大なるを見歸て其國に報ぜるより、烏孫益〻漢を重んずるに至り匈奴怒て之を擊たんとせしに、烏孫恐れて使を遣はし漢の公主を尙し昆弟たらんと請ふ、帝乃ち江都王建の女細君を公主となして昆莫に妻はせしが、後幾許ならず昆莫死して孫岑陬立て昆彌となる、昆彌は烏孫の王號なり。次て帝大宛

四域始めて漢に通ず

大宛漢に降る

が善馬を貢せず、また漢使を殺したるを名とし李廣利を遣り之を伐たしむ、西紀前一〇四年漢武帝太初元年李廣利兵を率ゐて西行せしが、大宛の東邊に至り敗れて敦煌に還りしかば、帝大に兵を發し敦煌に出て李廣利に從ひ西行せしむ、李廣利遂に大宛の都貳師城を圍むこと四十餘日、其貴人相與に謀て王母寡を殺し出て降る、漢軍乃ち其の善馬數十匹中馬以下三千餘匹を取り新王昧蔡を擁立す、時に任文もまた命を受けて樓蘭を伐ち其王を捕へて還る、實に西紀前一〇二年漢武帝太初三年なり。是より先き漢使西葱嶺を踰え安息に至るや、安息使を發して大鳥卵及黎軒大秦の眩人を漢に献じ、諸小國もまた漢使に從て献見するに至れり、然れども西域諸國皆匈奴に近きを以て常に其使を畏れ之を待つこと漢使より過ぎたりといふ。

安息漢に通ず

匈奴の逼窘

匈奴は伊稚邪單于の死後烏維單于を經て烏斯盧單于に及び、益〻遠く西北に徙り士馬を休養し射獵を習うてまた漢に入寇すること希なりしが、時に烏斯盧單于年少にして殺伐を好み國人安んぜず、左大都尉遂に漢に通じ單于を殺して降らんと謀るや、西紀前一〇四年公孫敖を遣り塞外に受降城四山

漢軍漸く振はす

酒泉北城を築きて之に應ぜしめ、次で趙破奴を遣り二萬騎に將として遠く浚稽山（喀爾喀土喇河及鄂爾渾河の間にあり）に至らしむ、然るに單于之を覺りて左大都尉を誅し八萬騎を發して趙破奴を圍み遂に其全軍を獲たり。既にして烏斯盧單于死し、其季父右賢王呴犁湖立て單于となりしが幾許ならずして死し、其弟且鞮侯單于立ちて漢の襲擊を恐れ、路充國等漢使の降らざるものを盡く幽し、使を遣はし來て漢に献ず。帝單于の義を嘉みし西紀前一〇〇年（漢武帝元年）天蘇武を遣はし匈奴の使の留て漢にあるものを送らしむ、會匈奴に内訌起り蘇武坐して囚はれ單于之を降さんとせしも屈せず、匈奴に留まること十九年昭帝の時を以て歸れり。而して武帝の晩年漢威昔日のごとくならず、北征常に利あらざりしが、帝は尚ほ匈奴を苦しめんと欲し、西紀前九九年（漢武帝天漢二年）李廣利等を遣り酒泉より出て之を擊破せしめ、歸途匈奴の圍む所となり漸く脱するを得しが、李廣の孫李陵戰敗れて遂に匈奴に降りぬ。後幾許ならず且鞮侯單于死して狐鹿姑單于立ち屢五原、酒泉に入寇するや、西紀前九〇年（漢武帝征和三年）李廣利塞を出て匈奴の兵を夫羊句山（漢北にあり）に破り、勝に乘

武帝の財政救治策

じて范夫人城（喀爾喀にあり）に至り、更に北進して郅居水（喀爾喀にあり）上に戰ひ、遂て燕然山（喀爾喀の抗愛山是なり）に至り單于の軍に會し戰敗れて遂に降る、是より帝また匈奴を伐たず。

帝頻年外征を事として四夷を服屬し、また深く神仙の說を信じて無益の土木を起し巡遊封禪を事とせしを以て、遂に財政の困難を來せるは自然の勢なり、是に於て是が救治策として先づ買官を設け、名けて武功爵といひ民に功無くして之を買はしめ、また白鹿皮を以て皮幣を爲り銀錫を雜造して白金となし、次で孔僅、桑弘羊等理財に巧なるものを擧げ、或は鹽鐵官を置きて民の私に鐵器を鑄、鹽を煮るを禁じ、或は緡錢舟車を算して悉く稅を課し、或は均輸法を設け遠方をして各、其饒餘の產物を賦となさしめ、官自ら之を其乏しき地に賣り、また平準官を京師に置き價賤しければ買ひ、貴ければ賣り以て商賈の利を奪ひ、或は民の酤釀を禁じて官業となし之を榷酤といひ、或は錢を納れて死罪を贖ふを得せしむる等利を興し經費を佐くる方一として講ぜざるなきに至り、百姓疲弊して盜賊四方に起り吏民の法を犯すも

殿法峻刑

の愈〻多し。帝乃ち張湯、趙禹、義縱、王溫舒、杜周等の酷吏を任用し峻刻嚴刑を以て之を威壓し、また東方に盜賊起るや使者を遣り繡衣を着け、斧を持し兵を發して之を擊たしめ、到る處多く史民を誅殺す、加之丞相田蚡は太后の弟なるを以て權勢を弄し、公孫弘の後丞相また連りに誅死し甚しきは泣きて丞相を拜せざるに至れり。既にして西紀前九一年漢武帝征和二年京師に巫蠱の亂起り、衛皇后及戾太子據は寃を以て死し、次て州郡には盜賊滋〻起りて海內騷擾するに及んで帝漸く百姓の愁苦するを知り、西紀前八九年漢武帝征和四年輪臺甘肅迪化州界內の屯田を議するを罷め、詔を下して深く既往の悔を陳し苛暴を禁じ擅賦を止め、本農を力め馬復令馬を養ふものは徭賦を免ずるなかれを脩めて武備に乏しきことなからしむるに至り、漢室稍〻安きを得たりき。

輪臺の詔と馬復令

武帝の晩年

帝已に戾太子を喪ひ少子弗陵の多智を愛して之を立てんと欲し、霍去病の異母弟霍光の忠厚にして大事に任ずべきを察し、周公、成王を負ひ諸侯を朝する圖を賜ひ、また將來の亂因を防がんが爲め弗陵の母鉤弋夫人に罪無くして死を賜へり。次て帝病篤きに及び弗陵を立て太子となし、霍光、金日磾、上官傑に命じ遺詔を受けて小主を輔けしむ、既にして帝死し太子立つ之を孝昭帝となす、時に西紀前八七年漢武帝後元二年なり。

霍光の攝政

第十章　霍光の攝政　宣帝の中興

霍光の攝政——燕王旦及上官傑等の謀反——烏桓と鮮卑——權謀の服屬——霍光の廢立——宣帝——霍氏の專橫——霍氏の誅滅——宣帝の治績——名相龍吏の輩出——功臣の優待

昭帝即位の時年僅に八歲、大司馬大將軍霍光遺詔を受けて政をなし、首として民の疾苦を問ひ貧民を賑貸し、權酷官を罷め賦役を輕くして大に民を休息し以て文景二帝の治績に復しぬ。會〻帝の兄燕王旦長にして立つを得ざるを怨み謀反せしが、至親なるを以て之を赦し其黨與を誅せり。時に金日磾既に死し、帝の姉鄂邑長公主、左將軍上官傑、傑の子車騎將軍安、御史大夫桑弘羊等霍光を忌みて之を除かんと欲し、燕王旦と謀を通じ人をして詐りて燕王の上書と稱し霍光の專權自恣を言はしむ、帝時に年十四なりしも聰

燕王旦及上官傑等の謀叛

明にして惑はず其詐を覩破し急に上書せるものを捕へしむ、後傑の黨與光を譖するものありしに帝怒て譖者を罪せんとせしかば傑等長公主の家に置酒して光を請はしめ、兵を伏せて之を搭殺し因て帝を廢して旦を立てんと謀り、安また旦を誘ひ之を殺して傑を立てんと謀りしが事覺はれ、傑、安、弘羊等皆宗族を幷せて盡く誅せられ長公主燕王は自殺しぬ、時に西紀前八〇年漢昭帝元鳳元年なり。

烏桓と鮮卑

初め匈奴の冒頓單于の東胡を破るや、餘衆散じて烏桓（山名また烏丸とも、内蒙古阿祿科爾沁西北烏珠穆山ならん）及鮮卑（山名内蒙古喀爾沁右翼西）を保て二族となり匈奴に役屬せしが、武帝匈奴の左地を擊破するに及び、烏桓を上谷、漁陽、右北平、遼東の塞外に徙して匈奴の動靜を偵察せしめしに、後烏桓の部衆漸く強く屢〻漢塞を侵せしかば西紀前七八年漢昭帝元鳳三年霍光、范明友を拜して度遼將軍となし、二萬騎に將として遼東を出て之を擊破せしめ、また郡國の徒を募りて玄菟城を築き以て東邊に備へぬ。是より先き樓蘭王死し、匈奴先づ其質子安歸を還へし立て王たらしむるや、遂に漢の詔に背きて入朝を辭しまた數〻漢使を遮殺す、霍光乃

樓蘭の服屬

霍光の廢立

ち傅介子を遣り金幣を齎らして外國に賞賜すと揚言せしめ、樓蘭に至り安歸を誘うて之を刺殺し、其弟の漢にあるもの尉屠耆を送て王となし、更に其國名を鄯善と改め、また吏士を遣り伊循城（鄯善の地名）に屯田して之を鎮撫せしめき。

上官傑等の敗後霍光は張安世、杜延年等と力を協せて政を輔けしが、昭帝在位十三年にして死し嗣なし而して皇后上官氏は安、霍光の女を娶りて生む所にして、安等の敗後后は光の外孫たるを以て廢せられざるを得たり、是に於て光遂に后の命を承けて武帝の孫昌邑王賀を迎立し后を尊んで太后となす。昌邑王既に立て淫戲度なし、光乃ち群臣を率ゐ太后に奏して之を廢し、更に武帝の曾孫病己を迎へ立つ。初め戾太子巫蠱の事を以て死するや、男女妻妾皆害に遭ひ獨り孫病己存し、生まれて數月また獄に繫がれしが、丙吉獄を治め死を免かるゝを得、長ずるに及んで高材學を好み、遊俠を喜び具さに閭里の姦邪吏治の得失を知る、是に至て丙吉霍光に勸めて迎立せしむ之を中宗孝宣帝となす、時に西紀前七四年なり。

宣帝即位の初め霍光年老ひしを以て政を還さんことを請ひしに、聽されず反つて霍光に關白せしめて諸事を奏せしむるに至る。此時に當て霍氏の一族顯貴に列して櫛内外を傾けんとするの勢あり、會、許氏立て皇后となるや、霍光の夫人顯之を惡み陰かに醫をして毒殺せしめ、其少女成君を納れて皇后となす。然るに霍光は西紀前六八年（漢宣帝地節二年）を以て病で死せしかば、霍氏の權稍衰ふると同時に帝もまた許后毒殺の事を覺り、大に霍氏を疎外せんとし、張安世を大司馬車騎將軍に、魏相を丞相に、丙吉を御史大夫に任ぜしが、霍氏が尚ほ放縱にして朝威を蔑視するを以て、帝は更に其兵權を收め張安世を衛將軍となして諸軍を領せしめしかば、霍氏は大に懼れて遂に反を謀り帝を廢して霍禹を擁立せんとせしが、謀漏れて一族悉く誅夷せられ、霍后また廢せられぬ。

霍氏の專横

霍氏の誅滅

宣帝

宣帝幼にして祖父戾太子の巫蠱の難に遇ひ、民間に伏在して具さに辛酸を嘗め、能く民情に通ぜしかば其政はすべて節儉仁慈を尚び、霍光の死後帝の親ら政を執るや勵精治を謀り、賞罰を明かにし、常平倉を置きて農民の利

宣帝の治績

を計り、屢、田租を免じて百姓を勞し、能吏を用ゐて能く其職を盡さしめ、常に曰く民の田里に安んじ歎息愁恨の聲なき所以は政平に訟理るを以てなり、我と之を共にするは唯二千石かと、二千石は漢時太守の秩祿なり、故に二千石にして治績功驗あれば璽書を賜ひて奬勵し、或は爵秩を授け或は金帛を賜ひ、公卿の缺くる時は次を以て任用する等頗る意を民政に留めしかば、名相能吏彬々として輩出せり。丞相には魏相、丙吉、黄霸、于定國あり、魏相は易に明に、政事に通じ、賢臣の所言、便宜の行事を條して之を施行し、丙吉は魏相を助けて政をなせしが相の死後丞相となり、深厚にして善に伐らず、禮讓を守り寛大を主とし、大體に通じて小事を親らせず、黄霸は潁川の太守より身を起し、歴進して丞相に上り頗る民治に長じ、于定國は嘗て廷尉となり張釋之と並び稱せられしが、丞相となりて能く人に下る。能吏には趙廣漢、朱邑、龔遂、尹翁歸、韓延壽の徒あり、趙廣漢は京兆尹となりて奸徒を摘發するに長じ、朱邑は大司農となりて民を愍み治績あり、尹翁歸は右扶風となりて廉直にして法に明に、龔遂は水衡都尉となりて民を風化するに長じ、韓延壽は西

名相能吏の輩出

功臣の優待

域都護となりて西域を服屬せり。帝また功臣の優待に心を傾け、西紀前五一年（漢宣帝甘露三年）霍光、張安世、韓増、趙充國、魏相、丙吉、杜延年、劉德、梁丘賀、蕭望之、蘇武等十一人の功臣の像を麒麟閣に畫て其名を當世に顯はさしむ。然るに帝は是等の名臣を任用して中興の令主と稱せられしに似ず、法を刻にし微罪を以て名吏を誅し其終を全ふせしめざると、太子が甞て文法の吏形を以て下を繩すを恐れ、儒生を用ゐんとを請へるを排して儒道を賤め、武帝の故事に倣ひ齋祀を謹み神祠を増置し神仙を好めるとは頗る惜むべし。

第十一章　匈奴の衰微　西域及西羌の服屬

漢烏孫と匈奴を夾撃す——匈奴の衰微——日逐王漢に降る——鄭吉車師を撃破す——漢威西域に振ふ——西域都護——匈奴亂る——五單于の分爭——呼韓邪單于漢に降る——致支單于北に徙る——康居王郅支單于を迎ふ——陳湯甘延壽致支單于を襲殺す——馮奉世西域に使す——莎車漢に叛く——馮奉世四域を鎮定す——西羌——先零羌叛く——趙充國羌を平ぐ——漢青海地方を并す

匈奴烏孫を攻む

初め武帝武を耀かしてより塞外の諸國皆漢の威を畏れしが、宣帝の初年に至り匈奴連りに烏孫を撃ち烏孫救を漢に請ふや、西紀前七二年（漢宣帝本始二年）帝は田廣明、趙充國、田順、范明友、韓増の五將軍を遣はし、十六萬騎を率ゐ道を分て並び出て、烏孫の兵と與に匈奴を夾撃せしめしに、明年に至り匈奴は漢の兵大に出てたるを聞きて奔遁し、烏孫の昆彌は五萬騎に將として常惠と與に西方より入り、匈奴の名王騎將以下四萬級、馬牛羊驢七十餘萬頭を獲たり。既にして單于また數萬騎に將として烏孫を撃ちしも、大雪に會して人畜凍死し還るもの什の一なる能はず、是に於て外蒙古の西北境を占領せる北狄の別種丁零は匈奴の虚弱に乘じて其北を攻め、烏桓は其東に侵入し、烏孫は其西を撃ちて殺す所數萬級に及び、加るに匈奴大に飢えて餓死の人民什の三、畜産什の五を失ひ、諸國の羈屬せる者皆瓦解し匈奴の勢威是より全く衰ふ。後幾許ならず匈奴の屬王にして西邊に居り西域諸國を領せる日逐王先賢撣（旦糜侯單于の孫）は握衍朐鞮單于（烏維單于の曾孫）と隙を生じ、西紀前六〇年（漢宣

漢烏孫と匈奴を夾撃す

匈奴の衰微

日逐王漢に降る

鄭吉車師を擊破す

帝神爵二年　遂に其衆を帥ゐて漢に降る。是より先き鄭吉車師を擊て之を破り吏卒をして其地に田せしめしに、匈奴厭兵を遣はし田者を擾せしかば、鄭吉上言して田卒を益さんことを願ひ、帝もまた匈奴の衰弱により其右地を擊て復西域を擾さゞらしめんと欲せしも、魏相の諫に聽きて之を止め鄭吉をして還て渠犂（哈喇沙爾附近の地）に屯せしめしが、是に於て鄭吉、渠犂、龜茲（庫車Kuchi）諸國の兵五萬人を發して日逐王を迎へ率ゐて長安に至りしかば、帝日逐王を封じて歸德侯となす。鄭吉初め南道の諸國を護せしが、既に車師を破り今や日逐王を降して威西域に振ふに及び、また北道諸國の車師以西にあるものを幷せ護して都護と號し、幕府を龜茲の東方烏壘城（天山南路特爾）に立て康居、烏孫等の三十六國を督察す、是に至りて漢の威令西域に班く、西域都護實に吉より始まる。

漢威西域に振ふ

西域都護

匈奴亂る

會、匈奴の握衍朐鞮單于暴虐にして殺を好む左地の貴人等乃ち稽侯狦を立て呼韓邪單于となし、兵を發して西握衍朐鞮を擊ち、握衍朐鞮遂に敗走して自殺す。是に於て、其弟右賢王は日逐王薄胥堂を立て屠耆單于となし、呼

五單于の分爭

揭王は自立して呼揭單于となり、右奥鞬王は車犂單于と號し、烏籍都尉もまた自立して烏籍單于と稱し五單于互に分爭せしが、屠耆單于遂に車犂、烏籍を擊破するに及んで二單于西北に走りて呼揭單于と合し、呼揭、烏籍は單于の號を去り與に力を幷せて車犂を尊び輔く。然るに車犂は復屠耆單于に擊破せられて走り、既にして屠耆もまた呼韓邪單于の襲ふ所となり敗走して自殺し、車犂遂に呼韓邪に降れり。時に屠耆單于の弟休旬王自立して閏振單于となり、呼韓邪の兄右賢王呼屠吾斯もまた自立して郅支骨都侯單于と稱し、閏振の來り擊つや郅支迎へ戰て之れを殺し遂に進んで呼韓邪を攻む、韓呼邪單于敗れて其衆を引いて南し遂に五原の塞に至りて漢に降り、臣と稱して西紀前五一年（漢宣帝甘露三年）入朝し、還て五原の塞下に居り受降城を保つ。是に於て匈奴全く分崩し烏孫以西安息に至るの諸國匈奴に近きものは皆咸く漢を尊ぶに至り、漢は西紀前四八年（漢元帝初元元年）始めて戊己校尉を置き車師の故地に屯田す。西紀前四九年（漢宣帝黄龍元年）呼韓邪單于復來朝す、時に郅支單于は漢の呼韓邪を助くるを聞き、擊て烏孫を破り北堅昆（北狄の別種阿爾泰山地

呼韓邪單于漢に降る

郅支單于北に徙る

康居王郅支單于を迎ふ

陳湯甘延壽郅支單于を襲殺す

方に居る今の吉利吉思族の祖を幷せ徙て之に都せしが、漢の呼韓邪單于を擁護して己を助けざるを怨み、漢の使者江乃始を困辱し尋で谷吉を殺す、而して郅支自ら漢に負けるを知りまた呼韓邪の益〻強盛なるを聞きて襲撃せらるゝを恐る。會〻康居王使を遣はして郅支を迎へ與に兵を合て烏孫を取らんとせるを機とし、遂に兵を引いて西するや、康居王其女を以て之に妻はし其威に倚りて諸國を脅かさんと謀る。是より郅支數〻康居の兵を借りて烏孫を擊ち、深く其都赤谷城（伊犂南境克斯河南）に入りて烏孫の西邊を奪ひ、勝に乘じ驕て康居王を禮せず、また數〻漢使を困辱せしかば、西紀前三六年（漢元帝建昭三年）西域副校尉陳湯、都護甘延壽と郅支を襲はんことを謀りしに、會〻延壽病み湯獨り制を矯めて諸國の兵及屯田の吏士四萬餘人を發し、軍を引き進んで康居の城下に薄り擊て郅支を斬り、首を傳して長安に至り藁街に懸く。是に於て呼韓邪單于且つ喜び且つ懼れ、西紀前三三年（漢元帝竟寧元年）入朝して漢の婿たらんと請ふ、元帝乃ち宮女王昭君を以て之に妻はす、匈奴の後裔世〻漢の甥と稱するは實に是に基づく。

馮奉世西域に使す

莎車漢に叛く

馮奉世西域を鎮定す

西羌

是より先き宣帝數〻使を西域に出せしも命を辱かしむるもの多きを憂ひ馮奉世を擧げて衛侯となし節を持して諸國に至らしむ、西紀前六五年（漢宣帝元康元年）奉世進んで鄯善に至りしに、會〻莎車（葉爾羌 Yarkand）王の弟呼屠徵、隣國と與に攻めて其王萬年及漢の使者を殺し、自立して王となり北道の諸國已に匈奴に屬すと揚言し、攻めて南道を刼し漢に叛かしめ、鄯善より以西皆絶ちて通ぜず。時に奉世鄯善の伊循城にあり、早く之を擊たざれば莎車の勢日に驅くして制し難く、必らず西域を危くするを知り、節を以て諸國に諭告し其兵を發して進んで莎車を擊ち攻めて其城を拔く、莎車王自殺し奉世更に他の昆弟の子を立て王となし、更に西して大宛に至る、大宛其莎車王を斬るを聞き之を敬すること他使に異なる、奉世遂に其名馬象龍を得て還り漢の威西域に振ふ。

初め武帝河西の四郡を開きて圖伯特族なる羌と匈奴と相通ずる路を隔絶し、諸羌を斥逐して湟中（湟水は甘肅西寧塞外より出て東流し浩亹水を合せ隴州に至て黃河に入る湟中は湟水の流域なる）に居らしめず、後宣帝の時に及んで義渠安國を遣はして諸羌を行らしめ

先零羌叛く

趙充國羌を平ぐ

漢青海地方を幷す

しに、安國羌中に至り先零（青海に居る）の地の諸豪中尤も傑黠なるものを召して之を斬り、兵を縱ち擊て羌民を殺戮せしかば、歸義羌侯楊玉等怨怒して諸羌と叛き金城（甘肅蘭州）四寧二府を侵す、安國車重兵器を失亡する甚だ多く遂に引き還る、時に西紀前六一年（漢宣帝神爵元年）なり。帝乃ち後將軍趙充國を遣はし之を擊たしむ、充國時に年七十、先づ金城に至りて方畧を上り、羌は計を以て破り易く兵を以て碎き難きが故に之を擊つは便ならず、因て騎兵を罷め步兵萬餘を留めて屯田せんと請ふ、帝之に從ひ明年充國振旅して還りしが、後幾許ならず先零羌等遂に楊玉を斬り四千餘人を帥ゐて降る、漢始めて金城屬國を置きて降羌を處らしめ、青海地方悉く平ぐ。

第十二章　宦官の弄權と王氏の專政

前漢の滅亡

元帝――宣官――恭顯事を用ゆ――成帝――外戚宣官に代はる――政王氏に歸す――王莽――成帝の淫荒――漢衆衰ふ――哀帝――丁傅事を用ゆ――王莽平帝を擁立す――宰衡――孺子嬰――王莽假皇帝と稱す――前漢亡ぶ

元帝

宣官

恭顯事を用ゆ

宣帝在位二十五年西紀前四九年（漢宣帝黃龍元年）を以て死せしかば、太子奭立ちて帝位を嗣ぐ是を孝元帝といふ、帝は故の許皇后微時の出にして、許后毒殺に遇ひしも幸に免れて廢せざるを得たり。帝位に即くや宣帝の祖母の兄の子車騎將軍史高、遺命を以て政を補け尙書の事を錄す、然るに太傅前將軍蕭望之、小傅光祿大夫周堪、共に之に副とし、舊恩によりて頗る親信せられ、且つ侍中劉向、侍中金敞と四人同心謀議して史高をして政に與らしめず、爲めに嫌隙を生ずるに至れり。時に宦官に中書令弘恭、僕射石顯あり政事に參與して權勢ありしが、史高と志を通じて蕭望之等を傾けんとす、宦官は初め宮刑に處せられしものをして、內廷に出入して專ら女官を讒せしむるに出でしが、後漸く男色を以て寵幸を蒙むるに至り、未だ一種甄弄的の具に過ぎざりしも、武帝が內宴を好みて宦者を寵するの餘、寢〻政事に參與するの權を與へ、次て宣帝もまた弘恭、石顯を寵用して樞機に任じ、元帝に至りて多病事を視るに懶く、顯等が宦者にして外黨なきを以てまた委するに政事を以てせしより、貴幸朝を傾くるに至れるなり。是に於て蕭望之等は史高の放縱

を患ひ、且つ石顯、弘恭等の中人を以て專權なるを惡みて、中書は政の本にして國家の樞機なれば、公正の士を用ゐて宦者を用ゆべからずと建言せしかば、元帝逡巡の裡に石顯、弘恭等之を覺りて大に怒り、貲戚を譏毀し權を專らにすと誣ひて蕭望之、周堪、劉向等を獄に下せしが、後赦されて蕭望之が相たらんとするや、また讒を構へて獄に下さんとし、兵を遣はして其第を圍みしに、蕭望之は藥を飲みて自殺せり。次で弘恭死して石顯中書令となり權勢當るべからず、其徒少府五鹿充宗、中書僕射牢梁等と結托して奸をなす。是に於て劉向上書して中人を斥けんことを請ひ、京房また諷諭する所ありしも帝用ゆる能はざりき。帝頻りに儒生を徵用して頗る前朝の政を改め、韋玄成、匡衡等の名相に任ぜしも、優柔不斷にして宦者の害を除くこと能はず、漢業是に至て始めて衰ふるに至れり。西紀前三三年（漢元帝寛寧元年）帝死し太子

成帝

外戚宦官に代はる

蕭立ちて孝成帝となる。

成帝立つや母后王氏を尊んで皇太后となし、太后の弟陽平（山東東昌府莘縣）侯王鳳を大司馬大將軍に任じ尚書の事を錄せしむ、是に於て宦者の勢忽ち衰へ、

石顯は罪を以て免ぜられ鄉里に歸り途にして憂死し、其徒黨悉く廢黜せられ一旦中人の禍を除きしも、一害除きて一難また起り外戚專權の端を開くに至れり。既にして王鳳の弟崇は安成（河南寧海府城東南）侯に封ぜられ、尋で其五弟王譚、王商、王立、王根、王逢時、皆同時に列侯に封ぜらる、世に之を五侯といふ、是より王氏の一族旺盛にして顯官に列し、國郡の官吏其與黨ならざるはなく、王鳳益、權を恃みて專横なるに至り、儒者谷永、杜欽等是が耳目となりて王氏を扶け、京兆尹王章成帝に見えて鳳を退けんことを勸めて却て殺されしより、擧朝目を側て鳳を視敢て之を非議するものなし。嘗きに宦者廢黜を上奏せる光祿大夫劉向は之を見て慷慨措く能はず、王氏、劉氏と勢並び立たずと稱して封事を上り極諫せしも、帝は向を召し見て悲歎するのみにして用ゆること能はざりき。西紀前二二年（漢成帝鴻嘉三年）王鳳死し從弟王音大司馬大將軍となる、王音は王氏中の忠節なるものにして能く子弟を率ゐしと雖も、其死後王商、王根相次て大司馬を領して政柄を執り權威益盛なり。此時王鳳の次弟（鳳の弟七人あり曼、譚、崇、商、立、根、逢時曼、）曼の子王莽は父曼早く死して侯たらざり

改王氏に歸す

王莽

成帝の淫荒

しを以て顯位に上らず、然れども夙に大志を抱き、恭儉己を持し、博く學を習ひ、英俊と交を結びて諸父に禮を盡くし、他の五侯の子弟の侈靡を極め聲色に耽り佚遊相高ぶるに倣はず名聲甚だ盛なりしかば、西紀前一六年（漢成帝永始元年）新都（四川成都府）侯に封ぜられて侍中となりしも、益〻謙遜して名譽を高め諸父を傾くるの勢あり。而して成帝は政權を全く外家に委して顧みず、酒色に荒みて日に逸遊し、帝の舊師特進張禹は帝意に阿り王氏を懼れ、吏民の上書して王氏の專政をいふを敢て聞せず、會〻魯國の奇士朱雲帝に見え、尚方斬馬の劍を得て佞臣張禹の頭を斬りて其餘を勵まさんといひ、殿檻に攀ぢて叩頭之を爭ふありと雖も、檻を治して直臣を旌するに止まり、漢業愈〻衰微に傾けり。

漢業衰ふ

哀帝

西紀前八年（漢成帝綏和三年）王根退き王莽代て大司馬となり、翌年成帝在位二十六年にして暴に死するや、嗣子なきを以て其姪定陶王欣を擁立して孝哀帝となし、皇太后を尊んで太皇太后といひ、生父定陶恭王を追尊して恭皇となす。而して王莽は帝の外家丁、傅二氏を避け、太后の意を含みて一時罷めて

丁傅事を用ゆ

國に就きしかば、傅喜、丁明、傅晏等相次ぎて大司馬となり專ら事を用ゐしが、侍中董賢帝の寵幸を被ふりて其勢漢廷を動かすに至り、在廷諸臣の讒死構陷極まりなく、王氏去りて後士民却つて王氏を思ふに至りぬ。

王莽平帝を擁立す

西紀前一年（漢哀帝元壽二年）哀帝死するや、太皇太后は漢室の式微を恢復せんと欲し、使を馳せて王莽を招致し再び大司馬となして尚書の事を錄せしめしかば、傅、丁二氏皆官を免ぜられて國に就き董賢遂に自殺せり。王莽乃ち大后と議して元帝の庶孫中山王箕子の九歳なるを迎立して孝平帝となし、太后親ら朝に臨みて王莽政を執り百官を統率しぬ。西紀一年（漢平帝元始元年）王音の子舜を太保となし、孔子十三世の孫孔光を太師となし、王莽は太傅となりて安漢公と號し、西紀四年（漢平帝元始四年）更に伊尹周公の稱號を取りて宰衡となり、己の女を納れて皇后となし、長子宇が己を諫めしを怒りて獄死せしめ、中山王の后家以下己を非議せるものを羅殺し、周公の遺制に倣ふと稱して敎化を出す明堂、雲氣を望む靈臺、大射養老の禮を行ふ辟雍を起し、博士の員を增し、樂經を立て通經異能の士を徵し、孔光、張禹等の名儒皆王莽に心服する

宰衡

に至れり。是に於て王莽の奸計を曉らず莽の名聲日に喧しく、其德周公に讓らずと稱し、四十八萬人の吏民は上書して莽の德を頌するに至り、遂に策命を受けて輿馬、衣服、樂則、朱戸、納陛、虎賁、弓矢、鈇鉞、秬鬯の九錫を加へらる、九錫はもと周の侯伯に命ぜし盛禮なり。西紀五年漢平帝元始五年王莽遂に帝を毒殺し、宣帝の玄孫嬰を迎へて皇太子となし號を孺子嬰といひ、自から假皇帝と稱し攝に居りて祚を踐み、襲日の謹愼正直は是に至りて始めて其の本性を顯はし、安衆侯劉崇及東郡の大守翟義等相次で兵を起して反抗せるを平らげ、西紀八年遂に漢室を簒ひて皇帝の位に即き國を新と號し、改元して初始といひ、其姑漢の太皇太后を新室の文母太皇太后と尊ぶに至れり、前漢は高祖より是に至るまで十三世二百九年にして亡びぬ。

孺子嬰

王莽假皇帝と稱す

前漢亡ぶ

第十三章　王莽の簒立　群雄の興起

新――井田法を行ふ――市司と錢府――六筦の令と六貨の鑄造――地方制度の更定と五服――匈奴の侵寇――四域の離叛――群盜蜂起す――赤眉の兵起る――新市下江平林の兵起る――劉縯劉秀兵を起す――更始帝――王莽漢軍を伐つ――昆陽の戰――綠林競ひ起る――更始劉演を殺す――隗囂天水に據る――漢軍長安に迫まる――王莽亡ぶ

新

井田法を行ふ

市司と錢府

六筦の令と六貨の鑄造

王莽既に志を達して漢室に代るや、孺子嬰を貶して、定安公となし、漢の諸侯王は皆公に降し後更に爵を奪うて民となし、虞周の制に倣ふと稱して典謨に倣うて官爵を更定し、四輔三公四將を置き、悉く王氏の子弟を封じて侯伯子男となす。當時貧富懸隔して豪民益〻兼併し、奴婢は牛馬と同じく賣買せらるゝの弊あり、王莽因て周初の井田法を用ゐ男の口數八人に足らざるは、一井を割き餘田を分て九族鄉里に予へしめ、民田を王田と稱し奴婢を私屬といひ、其賣買を禁ぜしも行はれざるを以て許すに至る、また屢〻地名疆界を變更して長安を常安と稱し、甚しきは一郡にして五たび名を易て其故に復するに至れり。また市司を置きて四時の仲月を以て市をなし、名を古制に託して五均の官を置きて民物の售れざるを沽ひ、錢府の官を設けて人民に商賈の資を貸して毎月三分の資を收め、鹽、酒、鐵、名山大澤、五均、賒貸、銅冶等六筦の令を發して民利を奪ひ、酒酤を榷し弩鎧を挾むを禁じ、金銀龜貝錢布

地方制度の更定と五服

の六貨を作りて屢〻其價を增減し、民の私鑄して罪に抵るもの頗る多く、其他禮を制し樂を作り、六經を講合して論議盡きず、公卿旦暮頭を鳩めて決せず、制度定まらず行政澁滯して上下壅塞し、吏因て姦をなし制する能はず、加之周制に基きて地方に卒正、連率、大尹、屬令、屬長、州牧を置き、六卿、六尉、六隊を分ち、九州を惟城、惟寧、惟幹、惟屏、惟恒の五服となして其外を惟藩となす。王莽更に府庫の强を恃みて威を匈奴に示さんと欲し、諸將に命じて北征し、匈奴單于を降奴服于と改めしかば呼韓邪の子單于知者の怒を招き、屢〻怨を含みて北邊に寇するに至り、遂に匈奴を恭奴、單于を善于と改め、其和親を得んとせしも、匈奴益〻怒りて寇盜止まず、尋て蠻夷の諸王を改めて侯となし其待遇の道を失ひしかば西南夷句町（雲南臨安府）先づ叛き、次て西紀一三年（王莽始建國五年）には焉耆（喀喇沙爾Khalasher）等の西域諸國一時に離畔して王莽と相絶つに至れり。

匈奴の侵寇

四城の離畔

かくて王莽は漸く漢室を簒ひ周制を布演して其抱負を行ふに至りしも、內に法令煩苛賦斂重積叛亂を想ふ怨嗟の民あり、外に威信墜落志を傾けざるの諸國ありて、世は早く既に騷亂紛起の狀態となれり。王莽已に外は兵

群盜蜂起す

を發して匈奴を擊ちて克たず、內は荆、楊、青、徐の間盜賊蜂起して制する能はず、因て五石の銅を以て北斗の形を鑄て威斗と名づけ、以て衆賊を厭勝せんとするに至りぬ。西紀一八年（王莽天鳳五年）青州に眉を赤く染めたる赤眉の兵起り鄒瑯の樊崇其魁たり、太師王匡、更始將軍廉丹等掃討に力めしも官兵却つて放縱暴橫東人之が爲めに「寧逢赤眉不逢太師、太師尙可、更始殺我」といふに至り、已に王莽の威信地に落ちたり。是より先き荆州の王匡、王鳳等兵を綠林（山名湖北安陸府當陽縣）に起し新市（湖北安陸府京山縣）の兵と稱せしが、西紀二二年（王莽地皇三年）に至り分れて西は南郡（湖北荆州宜昌府武昌等）に入り下江（楊子江の下流）の兵と稱し、北は南陽（河南南陽府湖北襄陽府）に入りて新市の兵となり、また平林（湖北德安府隨州）の兵は荆州の陳牧を首として起りて之れに應じ、荆州を席捲して勢頗る猖獗なり。會〻漢の宗室劉縯（景帝の子長沙定王發五世の孫）もまた弟劉秀と舂陵（湖北襄陽府棗陽縣）に起りて漢室を恢復せんとす、劉縯字は伯升慷慨大節あり、身を傾けて產を破り四方の雄俊に交る、劉秀字は文叔隆準日角あり、縯の兵を起すや舂陵の子弟皆恐懼亡匿せしが、秀の縫衣大冠せるを見て謹厚なるものもまた之をなすかと皆應ずるに至

赤眉の兵起る

新市下江平林の兵起る

劉縯劉秀兵を起す

れりといふ。時に劉縯等新市平林下江の兵と相合して衆十餘萬に及びしも、統率者を欠けるを以て號令の出づる所を知らず、下江の將王常等縯を立て帝となさんとせしに、新市、平林の將帥等は縯の威明を恐れ、遂に其同族更始將軍劉玄の怯懦なるを利用して立て漢の皇帝となし、縯を以て大司徒となし秀を大常偏將軍となす、劉玄群臣の朝するを見て羞愧汗を流し能く言ふ能はず諸豪望を失ふ、時に西紀二三年なり。既にして劉秀昆陽（河南南陽府葉縣南）定陵（南陽府舞陽縣）郾（河南許州郾城縣）を徇へ下し、劉縯宛（湖北南陽府南陽縣）を拔き更始宛に入て都す。王莽更始の立つを聞き一舉して之を掃蕩せんと欲し、司徒王尋、司空王邑を遣はし兵四十二萬を率ゐて、虎豹犀象等の猛獸を驅りて威武を助け、旌旗百餘里輜重陸續として其勢甚だ盛なり、漢軍望見して大に恐れ、走りて昆陽に入る兵僅に八九千、王尋、王邑之に乘じて兵を縱ち重圍を築く、劉秀乃ち李軼と出でゝ郾、定陵に至り、諸營の兵を發して千餘人を得自ら前鋒となる、時に新軍は地道を穿ち衝輒を用ゐ鼓噪して攻めしが、劉秀の突擊に逢ひて敗走し、尋て劉秀敢死者三千人を率ゐ敵の中堅を衝き、城中また之に應ずる

更始帝

王莽漢軍を伐つ

昆陽の戰

に及び新軍大に亂れて王尋は殺され、大雷雨の爲めに猛獸慴伏して用をなさず、加ふるに滍川盛溢して溺死者數万新軍一時に盡く、是を昆陽の戰となす實に西紀二三年なり。

是に於て關中震駭し海内の豪傑響のごとく應じ、漢の年號を用ゆるもの續々として生じ、各〻其牧守を殺して漢命を待つに至れり。是より劉縯劉秀兄弟の威名頓に揚がり、歸服せざるものなきに至りしかば更始帝忌みて遂に縯を謀殺す、秀禍を思うて陽に喪に服せず飲食談笑異ならず、唯夜間竊に涕泣するのみ、また昆陽の戰功を矜らず務めて謙遜を守りしかば、更始帝の信任を得て破虜將軍となり武信侯に封ぜられたり。曾、隗囂成紀（甘肅秦州秦安縣）に起りて天水（甘肅鞏昌府東北）に據り、隴西（甘肅隴州府南境）武都、金城、武威、張掖、酒泉、敦煌諸郡を徇下して漢に應じ、公孫述は成都（四川成都府）に起りて輔漢將軍益州牧と稱す。時に漢軍益〻振ひ其の將申屠建、李松は武關を攻め、王匡は洛陽に向ふ、王莽大に驚き九將に命じて兵九萬を率ゐて東伐せしめしも、悉く漢軍の擊破する所となり漢軍長驅して長安に入る、城中の少年相應じて門を燒き漢軍

豪傑蹶ひ起る

更始劉縯を殺す

隗囂天水に據る

公孫述成都に起る

漢軍長安に迫まる

王莽亡ぶ

城に入りしに莽斗柄に隨て坐し、天德を予に生ぜり漢兵予を如何せんといひしも、明日遂に衆兵の爲に斬殺せられ、其身は節解せられ首は宛に傳へらる、此時漢の平帝の后王氏は焚死し洛陽また陷り王氏遂に滅ぶ、莽帝と稱せしより是に至るまで十五年實に西紀二三年なり。

第十四章　後漢光武帝の創業　群雄の平定

更始長安に遷る

王郎邯鄲に據る

更始長安に遷る——王郎邯鄲に據る——劉秀河北を徇ふ——劉秀南走す——王郎を平ぐ——銅馬諸賊を降す——劉秀帝位に即く——後漢の光武帝——方望劉盆子を擁立す——赤眉劉盆子を擁立す——更始の敗滅——鄧禹馮異赤眉を伐つ——馮異赤眉を擊破す——赤眉降る——群雄割據——劉永彭寵の叛平——隗囂自立の策をなす——竇融漢に通ず——秦豐張步の降伏——李憲董憲——龐萌の斬獲——隗囂を伐つ——公孫述を討滅す——海内の一統

王莽已に亡びて更始帝劉玄は都を洛陽に遷せしが、西紀二四年更に長安に遷り大に宗室功臣を封じて王となし、群小膳夫また官爵を授け遙に隗囂を拜して右將軍となす。是より先き邯鄲（直隸廣平府邯鄲縣）の卜者王郎詐て漢の成帝の子子輿と稱して帝位に即き、景帝八世の孫劉林を將として幽、冀諸州を徇下し北東の諸郡風を望んで響應す、時に劉秀大司馬となりて河北を徇へ、到る處王莽の苛政を除き、官吏を考察し、能否を黜陟し、大に人心を收めしが、會、鄧禹南陽より來りて更始帝の常才と、部下諸將の庸人なる到底帝王の業をなすに足らざるを說き、英雄を收攬し民心を悅服せしめて高祖の業を立つべきを勸むるに及んで、劉秀竊に期する所あり鄧禹を留めて與に計議を凝らせしが、進んで薊（直隸順天府大興縣）を徇ふるに當り薊中忽ち反して王郎に降るに至り、劉秀止まる能はず直に駕を命じて城を出で、晨夜南走して蕪蔞亭（直隸深州饒陽縣東北）に至り豆粥に飢を凌ぎ、或は滹沱河を渡りて大風雨に遇ひ、衣袂共に濕ひて民舍に煖を取り、或は飢に迫りて麥飯を喫する等苦心いふべからず、下博城（直隸深州直南州）に至る頃は州郡殆んど王郎に應じ唯信都（直隸冀州）の太守任光、和戎（直隸正定府晉州）の太守邳彤のみ固守して劉秀に應じ其到るを待つ。劉秀乃ち信都に入り漸く兵を聚めて廣阿（直隸趙州隆平縣）を拔きしが、會、薊城の長史耿弇の薊を復して來り授ふあり、大に勢を得て益〻旁近の兵を募り檄を移して邯

劉秀河北を徇ふ

劉秀南走す

王郎を平ぐ

銅馬諸賊を降す

鄗を衝き、西紀二四年遂に王郎を斬りて之を平らげたり。是に於て更始帝劉秀を立て蕭王となし兵を罷めて長安に還へらしむ、然るに秀、耿弇の言に從ひ河北未だ平定せざるを口實として徵に應ぜず、尋て銅馬、太形、鐵脛、青犢等の諸賊を擊て之を降し、赤心を推して降者を懷け、更に南して河内（河南懷府）を徇下し、鄧禹の勸によりて寇恂を太守として、餱糧器械を調治せしめ、赤眉の兵が潁川（河南禹州府）より長安に向ふを利用し、劉禹に命じ兵を率ゐて關中を略せしめ、劉秀自ら兵を引て北燕趙を徇へ、尤來、大槍等の諸賊を擊ちて盡く之を破る。時に諸將尊號を上りしも許さず、會、儒生疆華赤伏符を奉じて來り諸將復固く請ふに及び、西紀二五年劉秀遂に帝位に鄗南（直隸趙州高邑縣）に即き建武と建元す、尋で朱鮪洛陽を以て降るに及び入て都す、後漢の世祖光武帝是なり。

劉秀帝位に即く

後漢の光武帝

方望劉嬰を擁立す

是より先き更始帝の隗囂を徵すや、方望更始の必ず敗るゝを度り隗囂を止めしも聽かれざりしかば辭して去り、前の定安公劉嬰を立て帝と稱し臨涇（甘肅平涼府鎮原縣）に據り、更始の將李松の爲めに殺されしが、是に至りて赤眉の樊

赤眉劉盆子を擁立す

崇等もまた漢の疎族劉盆子を立て長安に迫るに及び更始支ふる能はず、會、諸將背きて長安亂れ申屠建等斬られ、王匡等攻めて更始を逐ひしも、幾許ならずして敗走し更始復長安に入りしが、既にして赤眉の兵來り迫まるや遁れて高陵（陝西西安府高陵縣）に至る、光武帝憐んで更始を封じて淮陽王となせしも、遂に赤眉に降りて殺さる。時に鄧禹は河を渡りて遠近を徇下し、士民を懷從せしめて威名關西に震ひしも、赤眉の猖獗にして輙く克ち難きを以て、暫く栒邑（陝西邠州三水縣）に屯して時機を窺ひしが、西紀二六年（後漢光武帝建武二年）に至り赤眉大に奪掠を逞うして宮室を燒き、長安を棄て西し安定（甘肅平涼府固原州）北地（甘肅慶陽寧夏二府及鄜州）に至りしかば、鄧禹直ちに長安に入りしが既にして赤眉隗囂に破られて長安に還り、鄧禹拒戰して利あらず長安復赤眉の手に落つ。帝乃ち馮異を遣はして鄧禹に代りて功を收めしむ、然るに鄧禹功なきを愧ぢ、馮異と力を合せて赤眉を攻め却つて大敗し、鄧禹遁れ還りしが馮異屈せず、散卒を收め計を定めて遂に崤山（河南河南府永寧縣北）の下に赤眉を擊破し其衆八萬を降す、帝之を聞き宜陽（河南河南府宜陽縣）に要して其餘衆を破りしかば、樊崇窮蹙し劉盆子及丞相

鄧禹馮異赤眉を伐つ

馮異赤眉を擊破す

更始の敗滅

赤眉降る

徐宣等と肉袒して降る、帝因て之に田宅を給して恩を施し、悉く關中を平定しぬ、時に西紀二七年（後漢光武帝建武三年）なり。

群雄割據

是時に當て海内未だ光武帝に服せざるもの多く、公孫述は蜀に自立し帝と稱して成家と號し、隗囂は天水にありて西州上將軍と稱し、竇融は河西に據りて金城、武威、酒泉、敦煌、張液の五郡大將軍と稱し、其他廬江（安徽廬州府舒城縣）の李憲は淮南王と稱し、黎丘（湖北襄陽府宜城北）の秦豐は楚の黎王と稱し、梁王劉永は帝と稱して睢陽（河南歸德府商邱縣）に據り、海西（江蘇海州南）の董賢、瑯邪の張步等其下に屬し、漁陽の太守彭寵は燕王と稱して光武帝に叛き、安定の盧芳は匈奴に迎へられて漢帝と稱し、其他所在漢命を奉ぜざるもの頗る多し。光武帝鋭意是が掃蕩に從事し、先づ將軍吳漢等をして東伐せしめ、將軍耿弇等をして北伐せしめしに、劉永の將蘇茂、永を斬て降り、彭寵また其下の爲めに殺さるゝに至りて東北稍〻平らぎ、耿弇進んで張步を攻む。此時隗囂心安からず馬援をして公孫述の擧動を探らしむ、馬援述と舊ありしが其陳衞嚴然禮甚が盛んなるを見て走り歸り、公孫述は井底の蛙共に謀るに足らずと稱し、更に光武帝

劉永彭寵の討平

隗囂自立の策をなす

實融漢に通ず

に詣り其恢廓大度を見て大に服し、漢に服事せんことを勸めしも隗囂聽かず、其臣班彪また漢に通ずるの利を說きしも用ゐず、却つて辯士を遣はして河西の竇融に自立の策を謀れり。班彪乃ち去て河西に赴き竇融に說きて漢に通ぜしめしかば、帝融を以て涼州牧となし璽書を賜ひしに隗囂もまた漢の威を懼れ、其子をして入侍せしめ一時屏息しぬ。此間東方には將軍朱祐は

秦豐張步の降伏

黎丘を攻めて秦豐を降し、耿弇は連りに齊を破りて張步を降し、帝は親征して董賢及叛將龐明を擊ち、將軍馬成等舒（安徽廬州府廬江縣）を擊ちて李憲を獲、吳漢等帝に應援して董賢、龐明を斬るに至りて江淮山東悉く平定せり。然るに西方には隗囂遂に公孫述に臣事して朔寧王に封ぜられ漢に反意を示せしかば、

李憲董賢龐明の斬獲

隗囂を伐つ

西紀三二年（後漢光武帝建武八年）帝親征して囂を討ち、囂の降將馬援の計に從て軍を進め、竇融また五郡の太守及羌虜、小月氏を率ゐて來會し、囂を西城（甘肅秦州）に走らす、既にして吳漢進んで西城を圍み、公孫述兵を遣りて囂を援ひしが、會〻囂病で死し其子純立て王と稱せしも、來歙、略陽（甘肅秦州秦安縣）を取りて來り力を合せて西城を攻むるに及んで純遂に由て降り隴右全く平らぐ。時に公孫述

公孫述を討滅す

猶未だ降らず、帝乃ち西紀三五年（後漢光武帝建武十一年）呉漢を遣はし征南大將軍岑彭と共に蜀を伐たしむ、公孫述賊たりして岑彭を刺殺せしも漢軍全力を盡して進み、呉漢舟師を率ゐて成都に逼まり、西紀三六年（後漢光武帝建武十二年）述防ぎ戰ひて傷き死し、其將岑延城を以て降り蜀全く平定せり。而して盧芳は是より先き匈奴烏桓と兵を連ねて邊に寇せしが、其將隨昱の芳を脅かして漢に降らんとするや、西紀三七年（後漢光武帝建武十三年）亡げて匈奴に入り、後四年入て高柳（山西大同府陽高縣）に居り、一旦漢に降り代王となりしも自ら疑懼して復匈奴に奔りて病死し、海内是に至りて一統せり。

盧芳匈奴に入る

海内の一統

第十五章　交阯の征服及匈奴の分裂　光武帝の諸政と明帝章帝の治

交阯の叛亂——馬援交阯を征定す——馬援武陵蠻を伐つ——四域の形勢——莎車の強盛——莎車王賢四域を併呑せんとす——四域諸國復匈奴に附く——匈奴の内訌——日逐王比漢に降る——匈奴南北に分裂す——光武帝の内政——儒學の奬勵——讖緯の學起る——明帝——儒學の奬勵と功臣の優待——明帝の治績——章帝の治績——儒術文學の奬勵——後漢の極盛時代

交阯の叛亂

光武帝既に群雄を平定して海内を一統せるも邊陲甚だ穩かならず、對外縮少主義の帝をして遂に南征の已むを得ざるに至らしめたり。初め交阯の麊冷（安南峯州縣）の女子徵側勇力あり、交阯の太守蘇定が法を以て之を繩さんとせるを怒りて其妹徵貳と共に反くや、九眞、日南、合浦蠻俚等皆之に應じ凡六十五城を畧し、徵側遂に自立して王となり麊冷に都し寇亂連年已まず。

馬援交阯を征定す

是に於て西紀四二年（後漢光武帝建武十八年）帝馬援を伏波將軍となし扶樂侯劉隆を副たらしめて之を伐たしむ、援乃ち海に緣り山に隨ひ木を刊りて進み、遂に浪泊（安南交州府東關縣にあり一名四湖）に至りて徵側等と戰ひ大に之を破り、明年徵側徵貳を斬り進んで餘黨を擊ちて之を降し、悉く嶺南を平げて還る。既にして匈奴天水、扶風、上黨に寇するや、援自ら擊たんことを請ひ出て襄國（直隸順德府邢臺縣）に屯せしが、西紀四八年（後漢光武建武二十四年）武陵蠻（臨沅湖南常德府）に寇し漢兵之を討て敗れしかば、援復請うて之を征し明年軍中に死す、時に漢の士卒疫死するもの大半、蠻また饑困し遂に降を請ひ南方全く平定せり。

馬援武陵蠻を伐つ

四域の形勢

莎車の強盛

莎車王賢四域を併呑せんとす

四域諸國復匈奴に附く

是より先き西域諸國匈奴の重斂に苦しみ、皆漢に屬し復都護を置かんことを請ひしも、光武帝は中國新に定まれるを以て許さゞりしが、此時莎車最も強く、其王延幷に延の弟康は共に匈奴に抗して漢に向ひ、康の弟賢は鄯善王安と葱嶺以東を風靡し、再び使を遣はして都護を請ふ、帝乃ち賢に西域都護の印綬を與へしも、敦煌の太守裴遵の言によりて都護の印綬を收還し、更に與ふるに漢の大將軍の印綬を以てせしかば賢是より漢を恨み、猶ほ詐て大都護と稱し書を諸國に移して悉く服屬せしめ、遂に西域を兼幷せんと欲し、數諸國を攻め賦稅を重くするに及んで諸國愁懼し、西紀四五年（後漢光武建武二十一年）車師前王、鄯善、焉耆等の十八國俱に子を遣はして入侍せしめ、都護を得んことを請ひしに、帝は中國既に定まれるも北邊未だ服せざるを以て厚く之に賜ひて其侍子を還しぬ。是に於て莎車王賢都護の至らざるを知り、鄯善を擊破し龜茲王を攻殺するに及び、鄯善王安、漢に書を送り復子を遣はして入侍するを願ひ、更に都護を請ひしも帝また許さゞりしかば、鄯善、車師復匈奴に附くに至れり。

匈奴の内訌

日逐王比漢に降る

匈奴南北に分裂す

時に匈奴は呼韓邪單于の遺言によりて其諸子兄弟次を以て立ちしが、呼都尸單于興に至り位を其子に傳へんと欲し弟右谷蠡王知牙師を殺すや、故烏珠留單于の子にして匈奴の南邊八部を領する日逐王比は單于が呼韓邪の遺言に背けるを怒り且つ怨みて、若し父子相繼がんには我は前單于の長子理當に立つべきなりといひ、猜懼を懷きて庭會せず。西紀四六年（後漢光武帝建武二十二年）單于死して子蒲奴立つに及び比は益〻怨望し、密に漢人郭衡を遣はし匈奴の地圖を奉じて西河の太守に詣り內附を求む、單于之を知りて比を誅せんとせしに、比の弟斬將王、單于の帳下にありて之を聞き馳せて之を報ぜしかば、比遂に八部の兵四五萬を聚めて之に備へ、單于萬騎を遣はし之を擊たしめしも比の衆盛なるを見て敢て進まずして還りぬ。八部の大人乃ち共に比を立て呼韓邪單于となし漢に服屬せんと議し、西紀四八年（後漢光武帝建武二十四年）比遂に自立して南單于となり、使を遣はし臣と稱して漢の北藩となる、是より匈奴遂に南北に分裂す。既にして南單于庭を南に徙して西河の美稷（鄂爾多斯左翼中旗）に居り、諸部の王を列置し部衆を領して漢の邊戍を助け、朔方、五原、

雲中、定襄、鴈門、代郡を扞禦せしむ。北匈奴之を見て恐懼しまた漢に和親を求めしが、太子莊、南匈奴の二心を懷かんことを恐れ帝に勸めて許さしめざりしも、西紀五二年（後漢光武帝建武二十八年）北匈奴復使を遣はして和親を請ひ、且つ西域諸國の胡客を率ゐて俱に獻見せんと求むるや、帝遂に班彪の議に聽きて之を許せしかば、是より南北匈奴俱に漢に服するに至れり。

光武帝の内政

初め光武帝征伐を以て大業を遂げしと雖も、國定まるや兵を偃せて用ゐず、臧宮馬武等匈奴の衰微に乘じて討滅せんことを勸めしも聽かず、玉門關（甘肅安西州敦煌縣西四）を閉て西域と交通を絶ち、專ら意を內治に傾け、王莽の苛政を除き、武臣を退けて文吏を用ゐ、功臣のごときは兵權を收めて列侯となし、第に就きて其身を保全せしむ。而して最も心を政治に用ゐ、王命の出納、萬機の敷陳は尙書に專任して三公のごときは用をなさしめず、法を用ゆる明察にして刺史を用ゐて三府の政權を殺ぎ、吏員を削減し、國縣を並省し田制を復舊し、墾田戶口を檢覆せり。また自ら儒學に心を用ゐ諸功臣に命じて儒書を讀ましめ、大學を起し、禮學を修め、古典を稽式し、晩年には辟雍、明堂、靈臺を

儒學の奬勵

起して學を弘め、孔子の後を封じて聖人の德を明にし、以て大に學術の興起を計れり。是より先き前漢の末天文歴數を附會して後事を豫言する纖緯の學起り、王莽甚だ之を尙びしかば時人爭うて讖文を作り、符名と號し莽の逆を助けしが、帝もまた讖緯の學を信じて人を用ゆる多く符命を以て決し、泰山梁陰に封禪し、讖書を國中に宣布し、會、其非を說くものあれば之を斬らんとするに及び、遂に纖緯の學は儒學と幷び行はるゝに至りぬ。然れども耆儒卓茂のごときは之を拔擢して太傅となし、處士周黨、嚴光、王良の徒を優遇して節義を奬勵せしかば、淸節の士是より彬々として輩出せり。帝は二十八歲にして兵を起し、三十一歲にして帝位に即き、四十二歲にして群雄を平定し、西紀五七年（後漢光武帝建武中元二年）六十二歲にして死す在位三十三年なり、太子莊立つ之を孝明帝となす。

纖緯の學起る

明帝

明帝位に即き光武帝の遺旨によりまた盛に文學を奬勵し、東平獻王の議を用ゐて南北郊、冠冕、車服の制度幷に光武廟の樂舞を定め、親ら辟雍に臨みて諸儒を問難し、鄧禹、吳漢、夏侯、耿弇、寇恂、岑彭、馮異、朱祐、祭遵等三十二人の功

儒學の奬勵と功臣の優待

明帝の治績

臣の像を南宮の雲臺に畫きて群下を奬勵せり。然れども帝性偏察にして公卿大臣屢〻廢黜せられ、近臣尚書等提曳せられ寃濫甚だ衆かりしが、后妃の家を封侯となさず、公主の子を郎たらしめざる等其器に非ずんば用ゐず、また力めて民庶の利便を計りしかば、吏其人を得て民其業に安んじ、戶口滋殖し府庫充實し、外夷悉く畏服せり。帝の世最も顯著なる事蹟は佛敎の傳來と外國征伐とにして、王景を任用し卒數十萬を發して汴河の決潰を治し、滎陽より東の方千乘海口に至る百六十里餘の築隄を成効せるもまた其一大事業といふべし。帝在位十八年にして西紀七五年（後漢明帝永平十八年）死し、太子炟嗣ぐ孝章帝是なり。

章帝の治績

儒術文學の奬勵

章帝前朝察々の後を受けて益〻政治の實を擧げ、即位の初めより首として直言極諫の士を擢用し、刑獄を輕減し、徭賦を省除し、農桑を勸め、貢舉法を定め、專ら苛政を除くを以て主となし、すべて寛厚の治に從ひ民をして其業に安堵せしめたり。帝も復儒學を好み、親ら魯に幸して孔子を闕里（山東兗州府曲阜縣城中）に祭祀し、黃帝、唐、虞、夏、商、周六代の樂を作り、侍中曹褒に命じて叔孫通の舊典

後漢の極盛時代

によりて漢禮を撰ばしめ、諸王大臣の子弟に經を授け、學を南宮に建て四姓小侯と號し、五經博士を置きて外戚樊、郭、陰、馬諸氏をして專ら學に就かしめ、また匈奴の子弟を來學せしめ、羽林をして孝經を誦せしむる等其學問奬勵の功頗る多し、而して特に帝が後世を裨益せしは、前漢の宣帝が石渠閣に五經を考定せし遺事に倣ひて、班固、賈逵等の諸儒を白虎觀に集めて白虎通を作らしめしこと是なり。帝年三十一にして西紀八八年（後漢章帝章和二年）死し、在位僅に十三年なりしも其事業歴々として觀るに足るもの多し、光武帝より是に至るまで六十年、實に海內無事紀綱大に張ると共に漢室の勢威隆々として外に揚るに至れり。

第十六章　北匈奴の衰耗　西域の叛服

明帝北匈奴を伐つ——漢の諸將北匈奴を擊破す——班超四域に使す——莎車と于寘——于寘莎車を併す——于寘鄯善南道に雄視す——班超鄯善を服す——班超于寘を服す——班超疏勒龜茲を服屬せしむ——竇固車師を擊つ——四城都護戊己校尉の復置——北匈奴四域を亂す——班超疏勒于寘を安

んず――章帝班超をして北道を取らしむ――班超疏勒を伐つ――班超莎車を破り龜茲の兵を却く――北匈奴の衰耗――竇憲北匈奴を擊破す――北匈奴亡ぶ――漢北匈奴の餘衆を滅ぼす――鮮卑隆盛に赴く――班超四城都護となる――四城五十餘國漢に內屬す――班超甘英を太秦に遣る――太秦――支那國號の起源――印度人波斯人及アルメニア人の稱呼――希臘人及羅馬人の稱呼――セレス及セリカの起源――支那の絹絲歐洲に入る――安息人甘英を阻遏す――太秦王安敦漢に通ず――班超四城より還る――任尙邊和を失す――四城漢に叛く――北匈奴の餘衆北道を亂る――鄧太后班勇を四城に遣る――班勇四城を恢復す――四城の交通廢絕す

匈奴既に南北に分れて兵勢寖〻衰へたりと雖も、北匈奴猶ほ盛にして數〻邊に寇し南匈奴中また之に通ずるものありしかば、明帝は先づ度遼營を置き五原に屯せしめて南北匈奴の交通を防ぎ、次て耿秉の上言に從ひ意を決して西紀七三年（後漢明帝永平十六年）祭彤、竇固、耿秉、秦彭、耿忠、來苗等の諸將を遣はし、涼州（甘肅寧夏昌府秦州清水縣）に屯し南匈奴の衆を併せて北伐せしむ。諸將乃ち四道に分れて塞を出で北匈奴を伐つ、竇固は酒泉より出で呼衍王を天山に破り追うて蒲類海（甘肅鎭西府北巴爾庫勒海）に至り、伊吾廬（天山南路哈密）の地を取り兵を留めて之に屯

明帝北匈奴を伐つ

漢の諸將北匈奴を擊破す

せしめ、耿秉は居延より出て匈林王を擊ち漢を絕る百餘里にして還り、來苗は平城より出て獲る所なく、祭彤は高闕より出て南匈奴の左賢王信と期して琢邪山（外喀部喀爾）に至らんとし敵を見ずして還れり。此時竇固獨り功あり、更に西域に通じて北匈奴の右臂を絕たんと欲し、班彪の次子班超をして郭恂と俱に西域に使せしむ。

班超西域に使す

莎車と于寘

是より先き西域は莎車王賢兵威を以て于寘、大宛、嬀塞王國（アムー河畔の塞王國）を逼奪し其將をして之を守らしめしに、于寘人守將を殺して其大人休莫霸を立て王となす、賢諸國の兵を率ゐて之を擊ち却つて休莫霸の爲めに破られて還り、休莫霸進んで莎車を圍み流矢に中て死す、于寘人復其兄の子廣德を立て王となし其弟仁をして莎車を攻めしむ、賢遂に女を以て廣德に妻はし和親を結びしが、既にして于寘王諸國の兵を率ゐて莎車を攻め、遂に賢を誘殺して其國を幷す、會〻北匈奴兵を發して于寘を圍み、廣德を降し賢の子不居徵を立て莎車王となせしに、廣德また之を攻殺し更に其弟齊黎を立て莎車王となし（西紀六一年後漢明帝永平四年）、匈奴の援軍を斥けて精絕（今論沒して沙漠中にあり）

于寘莎車を併す

鄯善于寘南道に雄視す

より西北疏勒に至る十三國を屈服し、鄯善と共に南道に雄視せり。

班超鄯善を服す

西紀七三年（後漢明帝永平十六年）班超一行三十六人と先づ南山に沿うて鄯善に至り、鄯善王廣が北匈奴の使を憚りて禮を缺けるを探知し、一行と夜襲うて匈奴の使を斬り首を王に示して漢の威德を告げ、以後復匈奴と通ぜざるを誓ひ且つ質子を納れしめて還る。是に於て竇固大に喜び、具に超の功を上り更に許を得て復于寘に使せしむ。班超次で于寘に至り、國王廣德の尊崇せる巫を誅し國相私來比を執へしかば、廣德大に恐れ匈奴の使者を殺して降れり。是より先き龜茲王建匈奴の立つる所となり、其威を恃んで北道を

班超于寘を降す

班超疏勒龜茲を服屬せしむ

據有し、疏勒王を攻殺し其臣兜題を立て王となせしが、既にして班超間道より疏勒に至り兜題を執へて吏民に龜茲の無道を說き、故王の兄の子忠を立て王となし漢に服屬せしめしかば、西域諸國皆子を遣はして入侍す、王莽の時西域漢と絶ちてより六十五歲是に至りて復通ず、時に西紀七四年（後漢明帝永平十七年）なり。此年竇固、耿秉、劉張、敦煌の昆侖塞（甘肅安西州敦煌縣）より出て白山虜を蒲類海上に擊破し、更に進んで車師を擊ち先づ後王を降せしかば、前王恐れて

西域復漢に通ず

竇固車師を擊つ

また降り遂に車師を定む。固乃ち奏請して復西域都護及戊己校尉を置き、陳睦を都護となし耿恭を戊校尉となして後王部の金蒲城（甘肅庭州蒲類縣）に屯し、關寵を己校尉となして前王部の柳中城（哈密の東百數十里）に屯せしむ。然るに西紀七五年（後漢明帝永平十八年）竇固等の兵を罷めて還るや、北匈奴兵を遣はして車師を擊ち、後王安得を殺して金蒲城を圍み、耿恭の破る所となりて遂に解き去りしが、既にして焉耆、龜茲叛きて俱に都護陳睦を攻殺し、北匈奴復關寵を柳中城に圍む。會、明帝死して救兵至らず、車師復叛きて匈奴と共に耿恭を攻め、關寵上書して救を求めしかば、章帝乃ち耿秉に命じて酒泉に屯し、更に酒泉の太守段彭をして兵を率ゐて之を救はしむ。西紀七八年（後漢章帝建初三年）段彭等の兵柳中に會して車師を擊ち、北匈奴の兵を走らし車師復降りしが、時に關寵は已に敗死せしを以て、漢軍更に北進して疏勒に至り恭を迎へて還れり。漢因て悉く戊己校尉及都護の官を罷め班超を徵し還せしに、疏勒、于寘皆超の去るを欲せず途に要して留まらんことを請ひ、超もまた其本志を遂げんと欲し乃ち更に疏勒に還り、擊て其叛者を斬り尉頭（烏什）を擊破せしか

四域都護戊己校尉の復設

北匈奴西域を亂す

班超疏勒于寘を安んず

章帝班超を遣して北道を取らしむ

班超疏勒を伐つ

班超莎車を破り龜茲の兵を却く

北匈奴の衰耗

ば疏勒復安んず。超遂に西域を平げんと欲し、西紀八〇年（後漢章帝建初五年）上疏して兵を請ふや、帝其功の成るべきを知りて兵を給し、西紀八三年（後漢章帝建初八年）超を拜して將兵長史となす。是に於て超進んで北道の諸國を歸服せしめんとし、遂に龜茲との交渉起る。

是より先き莎車は漢兵の出てざるを察し龜茲に降りしかば、班超上言して烏孫と龜茲を夾擊せんことを請ひ、西紀八四年帝遂に和恭等を遣はして超を援けしむるや、超は疏勒、于寘の兵を發して莎車を擊ちしに、莎車賂を以て疏勒王忠を誘ひ忠遂に反して之に從ふ、超乃ち更に其府丞成大を立て疏勒王となし、悉く其反せざるものを發し忠を討て之を斬るに及び、南道遂に通ぜり。是に於て西紀八七年（後漢章帝和元年）超、于寘等諸國の兵を發して莎車を擊つや、龜茲王乃ち溫宿（阿克蘇）姑墨（阿克蘇の東）尉頭の兵を發して之を救ひしも、超先づ莎車の兵を破りて之を降せしかば、龜茲等の兵各退散し是より超の威西域に震ふ。

此間北匈奴大に衰耗し、部衆離叛して漢及南匈奴に降るもの多く、加ふる

竇憲北匈奴を擊破す

に南部は其前を改め、丁零は其後に寇し、鮮卑は其左を擊ち、西域其右を侵せしかば、遂に自立すること能はず遠く北に引き去りしが、西紀八七年（後漢章帝和元年）鮮卑復擊て大に之を破り、優留單于を斬るに及んで北匈奴大に亂れ、屠蘭儲等五十部相率ゐて雲中五原、朔方、北地に詣り漢に降りぬ。既にして章帝死し、太子肇立て孝和帝となり幼なるを以て竇太后朝に臨むや、太后の兄竇憲事を以て宗室都鄉侯劉暢を殺し、誅を懼れて自ら匈奴を擊ち以て死を贖はんことを求め、太后の許を得て西紀八九年（後漢和帝永元元年）耿秉と共に朔方の塞より出で、南單于の兵と涿邪山に會して北單于と稽落山（外蒙古喀爾喀內部）に戰て大に之を破り、單于を走らし前後八十一部二十餘萬人を降して燕然山（外蒙古賽因諾顏部內愛山）に至り、班固に命じて石に刻し功を勒し漢の威德を記して還り、尋で閻鞏を遣はし兵に將として北匈奴の伊吾を守るものを掩擊して復其地を取れり。時に北單于大に恐れ使を遣して臣と稱し入朝せんことを求む竇憲乃ち班固に命じて之を迎へんとせしに、會、南單于上書して北庭を滅ばさんことを求めしかば、憲復耿譚を遣はし騎を率ゐて南匈奴の兵と共に北單

北匈奴亡ぶ

漢北匈奴の餘衆を滅ぼす

鮮卑隆盛に赴く

班超西域都護となる

于を襲撃せしむ、單于創を被ふりて僅に免かれ、漢軍閼氏及男女五人斬首虜一萬餘を獲て還る。是に於て竇憲北匈奴の微弱に乘じて之を滅ぼさんと欲し、西紀九一年（後漢和帝永元三年）耿夔、任尚等を遣り居延の塞より出て北單于を金微山（外蒙古界内）に圍んで大に之を破り、其母閼氏名王已下五千餘級を獲しが、北單于逃走して所在を知らず、漢軍塞を出づる千餘里にして還る、漢の師を出してより未だ嘗て至らざる所なり。北單于既に亡び、其弟右谷蠡王於除鞬自立して單于となり、衆數千人を將ゐて蒲類海に止まり使を漢に遣はすや、竇憲請うて北單于となせしが、西紀九三年（後漢和帝永元五年）憲の誅せらるるに及び、於除鞬畔きて北庭に遁れ還りしかば、王輔を遣り任尚と共に追討して其衆を破滅しぬ。而して是より先き耿夔等の北匈奴を破るや、鮮卑遂に徙て其地に據りしが、今復於除鞬の敗死するに及んで匈奴の餘種留まるもの十餘萬落、皆自ら鮮卑と號す、鮮卑是より漸く盛なり。

時に西域に於ては班超月氏の兵を破て貢を約さしめ、次で龜茲、姑墨、溫宿等の諸國を降せしかば、西紀九一年（後漢和帝永元三年）漢は復西域都護、騎都尉、戊己校

西域五十餘國漢に内屬す

班超甘英を大秦に遣る

太秦

支那國號の起源

印度人波斯人及アルメニア人の稱呼

尉の官を置き、班超を以て都護に任じ徐幹を長史となし、龜茲の侍子白覇を送りて王となす、超乃ち龜茲王尤利多を廢して白覇を立て自ら龜茲の它乾城に居り徐幹は疏勒に屯す。然るに焉耆危須、尉犂（共に喀喇沙爾にあり）は曩に都護を沒したるを以て猶ほ二心を懷きて服屬せざりしかば、西紀九四年（後漢和帝永元六年）超遂に龜茲、鄯善等八國の兵を發して焉耆を討ち、焉耆王廣、尉犂王汎を斬るに及び、西域五十餘國裏海の濱に至るまで悉く質を納れて内屬せり。是に於て班超漢の勢威を更に西方に擴張せんと欲し、西紀九七年（後漢和帝永元九年）甘英を遣はし安息を經て大秦、條支に使せしむ、太秦は羅馬東領なり、後漢書に曰く「其人民皆長大平正、有類中國、故謂之太秦」魏畧に曰く「其俗、人長大平正、似中國人而胡服、自云本中國一別也」と、蓋し支那は秦の始皇勢威を四境に振ひしより、附近の人民遂に其地を呼んで秦といひたりとの臆說果して信ずべくんば、太秦の起源に關する二書の說明も容易に解決するを得ん、而して印度人は支那をチナスターナ（Chinastâna）（支那國の義）と呼び、波斯人はチニスタン（Tzinistan）といひ、アルメニア人はジェナスダン（Jenasdan）に轉訛し、希臘人及羅

希臘人及羅馬人の稱呼

セレス及セリカの起源

支那の絹綵歐洲に入る

安息人甘英を阻遏す

馬人は人民をシネー（*Sinae*, Sinae）其都府をチーネー（*Tinae*, Thinae）紅海航行記或はチートナ（*Thina*, Thina）アトレマイオス氏地理書と稱し、更に支那の佛徒が印度人等より聞きたる自國の名稱は震旦、振旦、眞丹、至那、脂那、莫訶至那、摩訶支那（英訶、摩訶は大の義）等にして皆其語源を同くするものなり。是より先き支那は絹布繒綵の產地として遠く西方に知られ、希臘人及羅馬人は其人民をセレス（*Seres*）プトレマイオス（Ptolemaios）及ストラボー（Strabo）氏等ポムポニウス、メラ（Pomponius Mela）及プリニウス（Plinius）氏等其國をセリケ（*Serica*）プトレマイオス及ストラボー氏等或はセリカ（Serica）ポムポニウス、メラ及プリニウス氏等と稱せり、蓋し繒見の漢音より轉訛せるならん、而して支那の絹布繒綵は夙に印度波斯を經て遙に歐洲に輸入せられ、西羅馬人の珍重する所となり黃金と重量を比して相易ふるに至りしかば、羅馬は其國と使聘を通ぜんと欲するも其東境常に安息との交渉絶えず、安息もまた中間にありて東貨交市の利を壟斷し、故らに遮遏して達するを得ざらしめしを以て、甘英の西するや安息の西境に達して條支に入り波斯灣頭に至れるも、安息の船人英に「海水廣大、往來者逢善風三月乃得度、若遇遲風亦有二歲者、故入海人皆齎三歲糧、海中善使人思土戀慕數有死亡者」と告ぐるに及んで英遂に渡らずして還る、而かも英が前世未だ至らざる所を跋渉して其風土を備へ、珍怪を傳へたる功は實に大なりとなす。然るに後六十餘年を經て太秦王安敦の安息を破りて其西境を畧するや、使を遣はし海路印度洋を經て漢に聘せしめ、西紀一六六年（後漢桓帝延熹九年）日南に詣りしが、後幾許ならず安息の再び波斯灣頭の地を恢復せると、支那に騷亂起れるとを以て其交通復絶ゆるに至れり、安敦は蓋し羅馬帝マルクス、アウレリウス、アントニヌス（Marcus Aurelius Antoninus）ならん。

大秦王安敦漢に通ず

班超西域より還る

任尚逸和を失す

班超西域にあること三十年功を以て定遠侯に封ぜられしが、年老ひて思郷の念禁じ難く、且つ胸脅の病を得しかば少子勇を馳せて塞に入り、此時安息上る所の大雀、獅子を献じ、上書して生きて玉門關に入らんと請ふ、次て超の妹昭（即ち曹大家）もまた上書して哀を求めしかば、和帝其言に感じて超を徵し還す、西紀一〇二年（後漢和帝永元十四年）超洛陽に還りて僅に一月遂に死す時に年七十一。班超の徵さるゝや戊己校尉任尚代りて都護となる、尚性嚴急なり故に超、尚を戒めて蕩佚簡易小過を寛べ大綱を總ぶべきを以てせしに、尚其言

四域漢に叛く

の平凡にして奇策なきを笑ひしが、後果して竟に邊和を失せり。西紀一〇六年（後漢殤帝延平元年）西域諸國叛きて任尚徴し還され、段禧都護となり龜茲、溫宿、姑墨等の叛を平げしが、既にして諸國復叛き段禧等龜茲を保ち難く、道路阻塞して檄書通せざるに及び、西紀一〇七年（後漢安帝永初元年）竟に西域都護を罷め、兵を遣りて禧等及伊吾盧、柳中の屯田吏士を迎へ還らしめたり。

北匈奴の餘衆北道を亂す

西域諸國既に漢に絶つや、北匈奴の餘衆復兵威を以て之を役屬し共に邊寇をなす、敦煌の太守曹宗之を患ひ上奏して索班を遣り、兵に將として伊吾に屯し之を招撫するに及び、車師前王及鄯善復來り降りしが、西紀一二〇年（後漢安帝永寧元年）に至り北匈奴車師後王軍就を率ゐて索班等を攻殺し、遂に擊て其前王を走らし北道を畧有せしかば、鄯善急を告げて援を曹宗に求む、曹宗乃ち兵を出して匈奴を擊ち以て索班等の耻に報ひ、因て復西域を取らんと請ひしに、漢の公卿多くは玉門關を閉ぢて西域に絶たんといひしも、鄧太后、班超の子勇が父の風あるを聞き召して計を問ひ、遂に勇の議に從ひ營兵を復し副校尉を置き、敦煌に居り西域を羈縻せしめしが、屯田を出す能はざりしを以て匈奴數〻車師と河西に入寇し、議者復玉門陽關を閉ぢて其患を絶たんとするや、西紀一二三年（後漢安帝延光二年）帝復班勇を以て西域長史となし、兵に將として出て柳中に屯せしむ。明年勇、鄯善に至り龜茲王白英を始め姑墨、溫宿等を服し、次で其兵を發して車師前王の庭に至り擊て匈奴の伊蠡王を走らせしかば、車師前王部遂に復開通し勇は還て柳中に屯田せしが、後擊て車師後王軍就及匈奴の使者を斬れり。西紀一二六年（後漢順帝永建元年）勇遂に諸國の兵を發して匈奴の呼衍王を擊破せしかば、是より後車師に匈奴の跡なく、西域皆漢に服せしが唯焉耆王元孟未だ降らず、勇乃ち之を攻めんと請ひ明年漢張朗を遣り勇と與に兩道より之を擊たしめしに、朗期に先ちて焉耆に入り元孟の降を受けて還り、勇は期に後れたるを以て徴されて獄に下て免じ、朗もまた官を免ぜらる、而して勇去てより後漢の威令復西域に行はれず、加之諸國互に相攻伐して復漢に服さず、漢もまた後幾許ならず國威遂に衰へて騷亂起るに及び、西域の交通全く廢絶するに至れり。

班勇西域を恢復す

西域の交通廢絶す

第十七章　印度及安息の形勢　大月氏の强盛と佛教の東流

摩揭陀國の形勢——スンガ朝——塞種の諸王——スンガ朝の滅亡と案茶羅朝の興起——安息の形勢——安息と塞種——條支の滅亡——安息太秦の交渉——貴霜王丘就却大月氏を一統す——閻膏珍——迦膩色迦——大月氏の最大版圖——サカ暦——北方佛教の興隆——迦膩色迦の崇佛——大結集と北方佛教の大成——師子國の布教——南方佛教の興隆——南方佛典の結集と其大成——大乘教と小乘教——佛教東流に關する諸傳說——其一——其二——其三——佛教東流の先驅——東流の好機——後漢の明帝佛教を四域に求む——佛教始めて支那に入る

摩揭陀國の形勢

スンガ朝

印度の摩揭陀國は阿輸迦王の後七代にしてブリハドラタ(Brihadratha)王に至り、西紀前一七八年其將弗沙密多羅の奪ふ所となりて摩利耶朝此に亡び、スンガ王朝建設せられしが、弗沙密多羅王位にあること三十六年(或は六十年と)ふもい吠陀宗教を信奉して佛教徒を迫害し、また其子アグニミトラ王(Agnimitra)は佛教の信者なりし西北印度地方の希臘人と戰を交へたりといふ、而して大月氏が西遷して塞種を逐ひ、次で再び移りてソグディアナを占領せるは實に此頃のことに屬す。此時塞種は逃れて罽賓(セイスタン)(Seistan)迦濕彌羅等の地方に入り、次で其王マウエス(Maues)(モアス)(Moas)或はモガ(Moga)ともいふは西紀前一〇〇年の頃パンジャブに侵入して希臘人の諸王國を幷せ、遂に信度河の流域を畧し其勢力甚だ盛にして、アゼス(Azes)アジリセス(Azilises)ヴノネス(Vonones)スパリリセス(Spalirises)スパラホレス(Spalahores)スパリリス(Spalyris)スパラガダメス(Spalagadames)等の子孫及アゼスの將アスパヴルマ(Aspavarma)等相次でサカステネ(Sakastene)(セイスタン)(Seistan)乾陀羅、信度及パンジアブに分立し、就中アゼス及アジリセスは西紀前七〇年の頃咀叉始羅に都せるがごとし、而して漢の元帝の使を因へたる塞王陰末赴は蓋しミアウス(Miaüs)或はヘラウス(Heraüs)ならん。

塞種の諸王

スンガ朝の滅亡と案茶羅朝の興起

此間摩揭陀のスンガ朝は國勢大に衰へ、弗沙密多羅の即位後百十二年を經て第十代の君デヴブーチ(Devabhūti)王に至り、西紀前六六年其臣ヴースデヴ(Vāsdeva)の爲めに弑せられて亡び、ヴースデヴ遂に國を簒ひてカーンヴ

(Kanva)朝の始祖となり、王統位にあること僅に四代四十五年にして、西紀前二二年南方印度の隆運を負うて北上せし、案茶羅(Andhrabhritya)朝の始祖シプラカ(Sipraka)王の併呑する所となれり。

安息の形勢

安息はミトリダテス一世パルチア帝國の基礎を鞏固ならしめてより國勢頓に興隆し、西紀前一三六年其子フラーテス二世立ちて條支王アンチオコス七世シデテス(Sidetes)の來り侵せるを迎へて之を撃殺し、次て塞種の侵寇を却け一旦マルギアナ(Margiana)を恢復せしが、後幾許ならず其破る所となりて戰歿し、西紀前一二七年其叔父アルタバノス(Artabanos)代はり立ちしも、また

安息と塞種

バクトリアの塞種と戰て傷き死し、西紀前一二四年其子ミトリダテス二世大王位に即くや、塞種を撃破して東北境を綏んぜしが、後アルメニア王チグラネス(Tigranes)と釁を生じて西境の地を失へり。時に條支は東は安息の侵暴を被ふり、北は地をアルメニアに失ひ、西は太秦の壓迫を受けて國勢衰頽し、遂に西紀前六五年に至りて太秦の滅ぼす所となり其版圖悉く之に沒す、るに及び、此に安息太秦の交渉を惹起しぬ。安息はミトリダテス二世の後

條支の滅亡

安息大秦の交渉

數世にしてオロデス一世(Orodes)に至り、西紀前四〇年其子パコロス(Pakoros)を遣はしてシリア、フォエニキア、パレスチナを畧し、更に小亞細亞に侵入してカリア(Caria)に至る南方の海岸を占領せしも、後幾許ならずして悉く之を失ひ、エウフラテス以東に退却せり。會、大月氏に丘就却王出て國勢頓に興隆するに及び安息は東境また一強敵を生ずるに至れり。

貴霜王丘就却大月氏を一統す

是より先き大月氏は五翕侯の分領する所となりしが、西紀前三〇年の頃貴霜(Kushana)翕侯丘就却(Kozulo Kadphises)攻めて四翕侯を滅ぼし、貴霜王(Kushana-Yavugo)と稱して西は安息を侵し、南は高附(Kabul)の地を取り、濮達(撲桃とも古市附近にあり)ペアス(Beas)河の西方大唐西域記の至那僕底(パッチ(Patti)の國寶)ならん を滅ぼし、また西紀前二五年の頃北印度に於ける最後の希臘王ヘルマイオス(Hermaios)を撃破して其地を奪ひ、西紀一〇年の頃八十歳にして死し其子閻膏珍(ヒーモ、カドフィセス(Hooëmo Kadphises)王ならん。王また頻りに其領土を擴張して悉く北西印度を併せて遂に大國となる、迦膩色迦(Kanishka)フシカ(Hushka)或はフビシカ(Jushka)の兄弟は實に其後嗣なり。迦膩色迦もまた安息

閻膏珍

迦膩色迦

大月氏の最大版圖

を破り更に南方諸國を併呑せしかば、大月氏の勢威は此時を以て絶頂に達し、其版圖北はカブリスタン (Kabulistan) より南はマッラ (Mathurā) に達して、罽賓、高附、パンジャブ、ラジャプタナ、グジェラト、信度を併有しぬ、而して迦膩色迦王が刱めたるサカ (Saka) 暦は實に西紀七八年三月三日より起れり。

サカ暦

北方佛教の興隆

曩にスンガ朝の迫害以來勢を中印度に失墜せし佛教は北西印度の方面に布教傳道の道を開きて希臘人の諸王國に入り、次で塞種の諸王もまた之を尊崇せしが、今や大月氏の興隆に伴ひて遂に北方佛教の大成を見るに至れり。初め大月氏は丘就却王以來ゾロアストル (Zoroaster) 教即ち拜火教の信者なりしが、北西印度を併領するに及んで遂に佛教に歸依し、次で迦膩色迦王に至り中印度を侵伐して佛鉢を得、また高僧阿濕縛婆沙 (Asuvaghosha) 即ち馬鳴を伴ひ歸りてより佛教を篤信し、西紀八〇年の頃闍烏達羅 (Jâlandhara) パンジャブの一部ジアランダル (Jalandhar) に上座部の高僧五百人を會して大結集を催す、波栗濕縛 (Pars'va) 即ち脅尊者、及伐蘇密多羅 (Vasumitra) 即ち世友之が頭領たり、馬鳴及達摩多羅 (Dharmatrûta) 即ち法救等の諸高僧扶けて之を大成せり。而して阿

迦膩色迦の崇佛

大結集と北方佛教の大成

輸迦の第三結集以後發達組織せられし佛教上座の正統宗義は實に是に至りて完全に編成せられ、北方佛教文學の基礎此に始めて確立す、而かも是等の佛典は皆梵語 (Sanskrit) を以て記錄せられしより、梵語は遂に北方佛教の聖語となり、師子國錫蘭及中印度に行はれたる南方佛教の聖語パーリ語 (Pâli) と相對するに至りぬ。

師子國の布教

師子國即ち錫蘭の佛教は西紀前二四一年阿輸迦王の子摩訶因陀羅の齎らす所にして、王子は師子國王天愛帝須 (Devanampiya Tissa) を誘化し、次で六ケ月にして全島を風靡して佛教の國となせり。帝須王は此後十四年位にありて眉伽園 (Meghavana) に大寺を建立し、摩訶因陀羅は王の死後八年を經て死せしも佛教愈〻興隆しぬ。然るに西紀八八年無畏ヴッタガミニ (Abhaya Vattagamini) 王位に即くや、無畏山寺 (Abhayagiri) を建立せしより大寺と共に二本山を生じ、經典に關する異議は端なくも二寺の對立を見るに至り、是に於て從來唯口唱によりて傳へたる三藏を筆錄一定するの必要を感ぜしめ、西紀前八〇年大寺に結集を開けり、是れ蓋しパーリ三藏結集の嚆矢にして南

南方佛教の興隆

南方佛典の結集と其大成

大乘教と小乘教

方佛典大成の濫觴をなせるものならん。

かくて南北の佛教は漸次大成して北方佛教は所謂大乘佛教となり、南方佛教は是に對して小乘佛教と稱せらるゝに至りしが、殊に西紀一世紀の頃大月氏の領土廣大にして東西亞細亞の通衢に當れるを以て、北方佛教は東の方葱嶺を超えて天山南路に傳はり、更に東流して支那に入れり。

佛教東流に關する諸傳說　其一

佛教東流の始源を古くせんとするものは、既に秦の始皇の時外國の沙門釋利防等才八人佛經を齎持し、來て始皇を化せんとせりとの傳說を以て、秦漢以前支那に佛教あるを說くも、全く信憑すべき史實の證左あるなく、また漢の武帝の世霍去病が匈奴を伐て休屠王の祭天金人を獲たるを以て佛教東流の緒となし、更に西域の交通と蜀の物貨が印度を价して大夏に入れるとを以て、是が事實を確めんとするものありと雖も、當時大月氏すら未だ佛教を信奉したる形跡なく、況や張騫が西域使聘の報告中一も之に及べるものなきを見れば、休屠王の發天金人は偶〻北方印度より西域を經て匈奴の西邊に齎らされたる一個の佛像に過ぎざるべく、是を以て佛教既に支那の西

其二

北邊に流通せりとなすは大早計の判斷たるを免かれざらん、而して蜀印度の交通のことは漢使が前後失敗して遂に成効せざりしに見るも、未だ遽に佛教東漸の事實を信憑する能はざるべし。後百餘年を經て西紀前二年（漢哀帝元年）漢の哀帝博士弟子秦景憲をして大月氏に往かしめ、因て浮圖經を師して還れりとの傳說果して事實ならば、當時大月氏は閣膏珍王の治世に當りて其領土罽賓、高附、バンジアア等の如き佛教流行の地方を包括せるが故に、是を以て佛教東流の先驅となすことを得ん、然れども是れ唯に一部人士の間に行はれたるに過ぎず、其特に支那に入りて尊崇せらるゝに至りしは實に後漢の明帝永平八年即ち西紀六五年にあり。初め明帝連りに匈奴を伐ち漢威爲めに西域に振ひしが、恰も此時大月氏の迦膩色迦王其父閣膏珍王の後を嗣ぎ、興隆の勢に乘じて悉く即度の北邊を併せ、勢威遠く中亞細亞より葱嶺以東に及べる頃なれば、北方佛教の東流せるは自然の勢なり。明帝遂に西域に佛教の行はるゝを聞き、郎中蔡愔等を遣はして之を求めしむ、愔等大月氏に至りて佛像經論を得、仍て迦葉摩騰（カーシヤパ、マーダンガ　Kāsyapa Mātanga）竺法蘭（ダルマラクシヤ　ダルマラクシヤ）

佛教東流の先驅

東流の好機

後漢の明帝佛教を西域に求む

佛教始めて支那に入る

(Dharmarakcha, Gobharana) の二沙門を伴ひ西紀六七年洛陽に還りしかば、帝爲めに白馬寺を洛陽雍關の西に立て、摩騰、法蘭は共に四十二章經を初め其他五種の梵筴を譯せり。是より佛教漸く支那に行はれ、帝の弟楚王英のごときは率先して之に歸依し、次て漢の諸帝もまた之を信奉するもの多く、更に漢末より三國兩晉に及んで譯經傳道盛に行はれ、遂に南北朝及隋唐に於ける佛教の興隆を見るに至れり。

第十八章　後漢の衰微　外戚宦官の禍　黨錮の獄

後漢衰微の原因——光武外戚を抑損す——外戚專横の端——和帝——竇氏の專横——竇氏の滅亡と宦官專横の端——殤帝——安帝——鄧氏及宦官の專恣——鄧氏亡びて閻氏興る——閻氏と宦官——北鄉侯——宦官閻氏を滅ぼす——順帝——梁氏の專横——質帝——桓帝——梁氏の滅亡——政宦官に歸す——名節の奬勵——漢室滅亡の源因——黨人の議起る——黨人宦官の衝突起る——宦官黨人を陷る——黨錮の獄——靈帝——竇武陳蕃宦官を除かんと謀る——宦官の全勝

後漢衰頽の源因

光武外戚を抑損す

外戚專權の端

和帝

竇氏の專横

前漢の衰弊は宦者外戚の專横に源因せしが、後漢も復此二者の爲めに亡滅を招くに至れり、蓋し後漢の君主は殆ど短命にして幼主常に其統を嗣ぎしかば母后の臨朝を來し、從て外戚の專權を招き延いて宦官の跋扈を生ぜしなり。初め光武帝前漢外戚專權の覆轍に鑒み、親ら大權を總攬して最も任使を愼み、また明帝の皇后馬氏は賢明にして謙讓なるのみならず内助の功多く、明帝また能く内を治め、章帝立て馬后を尊んで太后と稱し、馬氏の一族太后の命を奉じて抑損せしも、章帝の皇后竇氏を寵するに及んで始めて外戚專權の端を開きぬ。竇后遂に立太子に干渉し、太子慶を廢黜して其母を殺し、梁貴人の子肇を立て貴人及其父を殺し、章帝の死後肇の十歳なるを推立して孝和帝となし、自ら太后となりて朝に臨めり。是に於て其兄竇憲は侍中となりて專ら事を用ゐ、其弟篤は虎賁中郎將となり、更に其二弟景と瓌とは中常侍となりて一族の權勢頗る盛なり。然るに竇憲は宗室を殺し誅を懼れて竇后に請ひ、自ら匈奴を擊ち功を以て贖はんとし、北伐して大功を建て還て大將軍に任ぜられ、專横益〻甚だしく放恣極りなく、其父子兄弟並

び て卿校となりて朝廷に充滿し奸惡至らざるなし、而して耿夔、任尚、鄧疊、郭璜、班固の徒皆其爪牙股肱となりて之を助け、賄賂公行し收斂甚しく、郭璜の子郭舉は私に太后に通じて遂に共謀して大逆を企つるに至れり。時に和帝既に長じて十四歳となり、其逆謀を覺りて憤扼措かず、中常侍なる宦者鄭衆と合議し、兵を勒して竇憲の印綬を奪ひ迫て自殺せしめ、郭璜父子を捕殺し其黨與を廢黜しぬ、時に西紀九二年（後漢和帝永元四年）なり。是に於て一時外戚專權の禍を絶ちしも、帝は鄭衆の功を賞して大長秋に任じ、後鄭鄉侯に封ぜしかば、また宦官の權を重くするに至れり。

竇氏の滅亡と宦官專政の端

初め和帝自ら竇后の出なりと信じて疑はざりしが、太后死するに及んで始めて其實を知り、梁貴人を追尊して恭懷太后と稱せり。是より先き帝は皇后陰氏を廢して故の鄧禹の孫女綬を立てしが、帝在位十八年、齡僅に二十七歳にして西紀一〇五年（後漢和帝元興元年）に至り死するや、鄧后子なきを以て帝の庶子隆を擁立せしが、生れて僅かに百餘日なりしかば、鄧后親ら太后と稱し朝に臨みて政を聽く。然るに隆漸く八ヶ月にして死す、孝殤帝是なり。太

殤帝

安帝

鄧氏及宦官の專恣

后乃ち其兄鄧騭と謀り、西紀一〇七年故の廢太子清河王慶の子祜の十三歳なるを迎立す、之を孝安帝となす。

時に鄧太后復朝に臨み騭を大將軍となして權を統べしめ、太后親ら制を稱して公卿に接せず、宦官鄭衆、蔡倫等を任用して政事を掌らしめたるを以て宦官の權益〻重し。是に於て司空周章數々直言を上りしも用ゐられざりしが、遂に鄧氏の一族を滅ぼし、鄭衆、蔡倫等を誅鋤し太后並に帝を廢せんと謀り、事成らずして自殺せり。然るに太后英姿あり、郎中虞詡を用ゐて諸羌を擊破せしめ、班勇を西域に遣りて再び漢の威を示し、流亡を招還し、百姓の水旱に困獘するを救ひて頗る人心を收めしかば、宦官等の怨恨するもの漸く多く、加ふるに安帝の乳母王聖は帝が不德多くして太后と不和なるを以て、太后の帝を廢せんとする意あるを疑ひ、宦官李閏、江京と共に太后を帝に毀短す。西紀一二一年（後漢安帝建光元年）太后死するや、宮人また太后兄弟の異謀あるを誣告するに及び、帝大に怒りて悉く諸鄧を黜けしかば、鄧騭は憂憤食はずして死し、其兄弟悝、弘、閶等皆誅せられて鄧氏遂に滅べり。是に於て皇后

鄧氏亡びて閻氏興る

閻氏の兄弟用ゐられて卿校となり、江京、李閏等は列侯となり、乳母王聖及其女伯榮等と志を通じて專ら事を用ゐ、威を內外に振うて奸利を貪ぼり、競うて侈虐をなし、鄧氏亡びて三年を出でずして內廷また紛亂せしかば、太尉楊震上疏して極諫せしも聽かれず、却て群小の爲めに譖せられて印綬を奪はれ憤懣の餘鴆を仰て死せり。時に帝の嫡母耿貴人の兄耿寶大將軍となりて兵を領せしに、江京等また讒して之を却け、次で太子たる帝の庶子保を濟陰王に廢黜して后の歡心を迎ふるに至り、閻氏の徒黨勢益〻盛んなり。西紀一二五年（後漢安帝延光四年）安帝死するや、閻后政權を專らにせんと欲し、自ら太后となり、兄閻顯を車騎將軍儀同三司となし、共に計策を定めて安帝の從弟北鄉侯懿を迎立し、大將軍耿寶を貶死せしめ、王聖及泊榮を雁門に徙し、諸弟を任用して樞機を統べしめ、閻族の威勢甚だ隆盛を極む。然るに懿僅に七ヶ月にして病んで死するや忽ち宦官の反動を生じ、中常侍孫程等衣を截ちて盟ひ、夜に乘じて江京を襲うて之を殺し、安帝の廢太子濟陰王保を擁立して孝順帝となし、閻太后を離宮に遷し閻氏の一族を收めて之を誅戮し、孫程等十

北鄉侯

宦官閻氏を滅ぼす

順帝

九人功によりて列侯に封ぜらる、是より宦官の勢力愈〻強大となり遂に漢廷を左右するに至れり。

梁氏の專橫

順帝位に即き梁貴人を立て皇后となし、其父梁商を大將軍となせしが、六年にして商死し其子冀大將軍となり、また外戚の權を恃みて暴橫自恣を極め、一族朝に滿ちて勢內外を傾く。會〻張綱、梁氏君を無するの心十五事を劾奏し、其他梁氏及宦官の弊を言ふもの多かりしも、帝は其實を知りて用ゆる能はず、在位十九年にして西紀一四四年（後漢順帝建康元年）死し、太子炳立ちて孝冲帝となりしが、年僅に二歲なりしかば、梁后は例に依り朝に臨みて太后と稱し、翌年帝死するに及び章帝の玄孫纘を樂安（山東青州府高苑縣）に迎へ立つ、之を孝質帝となす。然るに帝年僅に八歲なるも聰慧明智なり、嘗て朝會に於て冀を目し跋扈將軍といひしより、冀の憎惡する所となり在位一年にして遂に毒弑に遇へり。時に太尉李固、大鴻臚杜喬等章帝の玄孫清河王蒜を立てんとせしに、梁冀、太后に白して之を排し、清河王を貶して侯となし、固、喬を獄死せしめて章帝の曾孫蠡吾侯志の年十五なるを迎立す、孝桓帝是なり。是に於て

質帝

桓帝

梁氏の滅亡

梁冀また定策の功によりて封祿を增し、其の子弟は悉く顯要に列し、凶恣日に甚しく威柄を內外に振ひ、帝は手を拱きて其制を受くること十九年、遂に其專恣に耐ふること能はず、西紀一五九年（後漢桓帝延熹二年）に至り、中常侍單超、唐衡、徐璜、左悺、具瑗等と謀を定め、兵千餘人を勒して冀の印授を收め之を捕斬せんとせしかば、冀は計策盡きて自殺し梁氏の一族悉く棄市せられ、其徒黨三百餘人皆免黜を被ふれり、而して梁氏の財貨を收めて斥賣せしに價三十餘萬錢を得しかば、國用に充て其年稅租の半を補へりといふ、以て如何に梁氏の收斂に力めしことを知るに足る。是に於て單超等五人列侯となりて五侯と稱せられ、小黃門劉普、趙忠等八人卿侯となり、外戚の弊僅に止みて宦官の專權日を逐うて甚だしく、西紀一六〇年（後漢桓帝延熹三年）單超車騎將軍を以て死するや、唐衡等の四侯は更に橫恣を極めて刑殺を事とし、一族を州郡に派して貪虐を行ひ、宦官の權勢に阿附するの徒は自ら宮して榮達を圖るに至れり、而して帝もまた聲色に耽りて政を顧みず、黃瓊、楊秉のごとき名臣ありと雖もまた如何ともする能はず、漢室の綱紀全く頽敗しぬ。

宦官に歸す

名節の奬勵

光武帝節士を優遇し大に名節を奬勵せしより、後漢の世は淸名の士彬々として起りしが、宦官跋扈するに至りて之を惡むこと仇讎も啻ならず、盛んに時政を評論せしかば大に宦官の忌避する所となり、激烈なる軋轢を惹起して遂に漢室滅亡の禍を招くに至れり。

漢室滅亡の源因

桓帝の世陳蕃、楊秉に代りて大尉となり李膺また司隸校尉となりしが、二人共に淸節の名士たりしかば宦官最も之を畏れ敢て宮省を出でざりき。

黨人の議起る

初め帝の蠡吾侯たる時甘陵（山東東昌府淸平縣南）の周福に學びしかば、位に卽くに及んで周福を以て尙書となせしに、同く甘陵の學者に房植あり、鄉人は天下の規矩は房伯武、師たるによりて印を獲しは周仲進と稱するに至り、二家の書生等互に其短を誹譏して隙を構へ、此に始めて黨人の議起れり。時に汝南の太守宗資は范滂を以て功曹となし、南陽の太守成瑨は岑晊を以て功曹となし、皆之をして善を褒し惡を糾さしめ、心を悉して政を聽き、頗る令名あり、また太學の諸生三萬餘人は郭泰及賈彪其冠となりて李膺、陳蕃、王暢と更々相褒重す、故に學中相語て天下の模楷は李元禮、强禦を畏れざるは陳仲擧、天下の俊秀は王叔茂と稱するに至り、

黨人宦官の衝突起る

中外其風化を受け互に其臧否を以て相尚び朝臣悉く其口頭に上るを畏懼す。會〻成瑨及太原の太守劉瓆、赦後に宦官の黨を殺し、宦官侯覽の爲めに謫せられて獄に下され、山陽の太守翟超、宦官の家宅を破壞し、東海の相黄浮、宦官の族人を殺し、宦官の訴によりて復獄に下され、陳蕃其寃を爭ふも用ゐられず各〻獄中に死し、李膺もまた赦後に宦官の黨張成を案殺するに及んで宦官益〻怒り、成の子弟を嗾して李膺等太學の遊士と共に黨を結び朝廷を誹譏し風俗を疑亂すと上書せしめしかば、帝激怒して令を發し黨人を逮捕せしめんとせしに、陳蕃之を沮みしより愈〻帝の怒を增し、李膺等遂に北寺の獄に繫がるゝに至れり。時に太僕杜密、陳寔、范滂等二百餘人また其連類と目せられ、或は遁逃して獲ず追捕益〻急となり、陳蕃復再三上書して極諫せしを以て官を免ぜられ、在廷一人として黨人の爲めに救解するものなく、唯難を恐れて震慄するのみ。是に於て賈彪、洛陽に入り、后の父にして竇融の玄孫たる竇武に急を說きて上疏救解を求めしかば帝の意稍〻解け、李膺等また宦官の子弟を連引せしかば宦官懼れて帝に白し、黨人始めて釋され二百餘人

宦官黨人を陷る

黨錮の獄

各〻鄉里に還りて終身の禁錮に處せらる、實に西紀一六七年（後漢桓帝永康元年）なり、之を後漢黨錮の獄といふ。然れども宦官を惡むもの朝野に滿ち、李膺等が無辜にして罪を得たると其清節の士たるとによりて黨人の名聲益〻揚がり、海內其風を渴仰して稱號を爲つて標榜するに至る、乃ち竇武、陳蕃、劉淑を一世の宗なりとて三君と稱し、李膺、荀昱、杜密、王暢、劉祐、魏朗、趙典、朱寓を人の英なりとて八俊と稱し、范滂、郭泰、宗慈、巴肅、夏馥、尹勳、蔡衍、羊涉を德行ありとて八顧と稱し、張儉、岑晊、劉表、陳翔、孔昱、范康、檀敷、翟超を能く人を導くとて八及と稱し、度尙、張邈、王考、劉儒、胡母班、秦周、蕃嚮、王章は財を以て人を救ふとて八廚と稱せり。

靈帝

西紀一六七年桓帝在位二十一年三十六歲にして死し、嗣なきを以て竇后朝に臨みて太后と稱し、父竇武と謀りて章帝の玄孫宏の十二歲なるを迎立す、之を孝靈帝となす。是に於て竇武は大將軍に、陳蕃は大傅に任ぜられ協同して力を政治の改良に用ゐ、大に前朝の弊を除かんとして盛んに名士を徵し、李膺、杜密、尹勳、劉瑜等を擢用して海內また治まる。然るに竇武等宦官

竇武陳蕃宦官を除かんと謀る

宦官の全勝

掃蕩を急にせんとして中常侍曹節、王甫等を殺さんと謀り、却て宦官の知る所となりて帝に誣告せられ、陳蕃は捕へられて北寺の獄に死し、竇武は圍まれて自殺し、其姻戚は悉く捕殺せられ、太后もまた遂に南宮に遷され、尹勳、劉瑜、巴肅、魏朗等皆殺され、宦官曹節、王甫等六人侯に列せらる、時に西紀一六八年（後漢靈帝建寧元年）なり。翌年に至り宦官復李膺、杜密、范滂等を誣告し悉く獄に下して考死せしめ、其妻子を邊境に徙し、次て宦官と不和なるもの六百餘人を黨人と稱して廢禁に處し、更に延いて黨人の親戚舊故に及べり、是に於て宦官の專横其極に達し、天下騒然として禍亂將に起らんとす。

第十九章　海内の騒亂　後漢の滅亡

海内漸く亂る——黄巾の賊起る——八關に都尉官を置く——皇甫嵩曹操等賊を討つ——所在群盜起る——帝辨——袁紹何進と宦官を除かんと謀る——袁紹悉く宦官を捕斬す——董卓廢立を行ふ——獻帝——山東の諸將兵を起す——董卓都を長安に遷す——孫堅洛陽に入る——董卓暴威を振ふ——關東の形勢——董卓亡ぶ——曹操の威名大に揚る——劉備興る——孫策江東に據る——關中亂る——曹操都を許に遷す——劉備曹操に歸す——曹操呂布を攻殺す——袁紹公孫瓚を滅ぼす——袁術亡ぶ——劉備曹操と絶つ——諸侯の形勢——袁紹官渡に敗る——袁氏亂る——曹操烏桓を擊つ——袁氏亡ふ——劉琮曹操に降る——劉備諸葛亮を得——劉備夏口に走る——曹操江東を圍る——赤壁の戰——劉備益州を取る——孫權劉備と荆州を爭ふ——荆州の分割——曹操魏王となる——劉備漢中王と稱す——關羽の威大に振ふ——三國の分立——曹丕漢を簒ふ——後漢亡ぶ

海内漸く亂る

黄巾の賊起る

宦官内に跋扈して人々亂を想ふの時に當りて靈帝は少しも之を匡正するの念なく、賣官の制を起し、畢圭靈昆苑を作り、列肆を後宮に設け、飲宴に耽りて政治を顧みず、然るに是より先き西紀一七二年（後漢靈帝熹平元年）許生既に會稽に起り、陽明皇帝と稱して騒亂の先驅をなし幾許もなくして平ぎしが、西紀一八四年（後漢靈帝中平元年）に至りて鉅鹿の張角起るに及んで四方遂に亂れ、漢室復起すべからざるに至れり。

會稽の賊は其衆僅かに一万人に過ぎざりしかば、二年の後吳郡の司馬孫堅に討滅せられしも、張角に至りては其勢侮るべからず、初め張角黄老の學に附會して妖術を修め咒符水を以て治療し、自ら太平道と號して四方を誘

惑し、十數年間に數十萬人を妖化し、三十六方を建て各、渠帥を置く、其他蜀中の張魯、巴郡の張修等皆左道を以て人民を煽動せしが、西紀一八四年に至りて一時に蜂起して亂をなし、張角は天公と稱して二弟張寶、張梁を地公、人公と號せしめ、全黨皆黄巾を著けて所在を燔却す、故に黄巾の賊といふ、張白騎、雷公、干氐根等の諸賊並び起りて之に應じ、旬月にして諸州郡響應し漢廷震駭す。是に至りて帝始めて愕き、急に黨人を赦して內應の虞を除き、皇后何氏の兄何進を大將軍に任じ、函谷（河南新安縣東北）太谷（河南府洛陽縣東）廣成（河南汝州西）伊闕（河南府洛陽縣南）轘轅（河南府偃師縣東南）旋門（河南開封府汜水縣西南）孟津（河南懷慶府孟縣）の八關に都尉を置きて黄巾の賊に備へ、盧植、皇甫嵩、朱儁等をして兵を率ゐて妖賊を征討せしむ。

八關に都尉官を置く

皇甫嵩曹操等賊を討つ

然るに盧植は張角を廣宗（直隸廣平府威縣）に圍みて將に之を拔かんとせしも、讒に遭うて罷められ、皇甫嵩、朱儁は騎都尉曹操と共に潁川の賊を討平せり、會、張角病死し皇甫嵩は其二弟寶、梁を擊殺し、朱儁は其餘黨を宛城（河南南陽府南陽縣）に破りぬ。曹操は沛國譙の人字を孟德といふ、少壯より機敏にして權略あり、大志を抱きて生業を營まず、汝南の許劭嘗て評して治世の能臣、亂世の姦雄といへり。

黄巾の賊起れるより之を機として所在盜賊横行せしかば、漢廷は之を鎮壓せんとして諸州に牧伯を置きしが却て州牧の强大を致し、宦官は內にありて益、權勢を振ひ、漢室の危きこと累卵も啻ならず。西紀一八九年（後漢靈帝中平六年）靈帝在位二十二年にして死し、皇子辨立ち年僅に十四なるを以て何太后朝に臨み、后の兄何進尚書の事を錄して共に朝政を執る、會、司徒袁安の玄孫袁紹、名族の胄を以てし加ふるに威容ありて衆望を負ひ、深く宦官の弊害を悟り、竇氏が覆徹に鑒み何進に勸むるに宦者掩殺の事を以てし、何進諾するも太后聽さゞるを以て猶豫して決せず、袁紹乃ち將軍董卓及四方の猛將を招て太后を脅かし何進を動かす、然るに逡巡の間宦官張讓等の知る處となり、何進其術中に陷りて殺さるゝに至りしかば、袁紹直ちに兵を勒して詔を矯め、諸宦官少長となく二千餘人を捕へて悉く之を斬り、始めて宦官の禍根を絶てり。既にして河東より董卓至り忽ち暴横を振うて自ら司空となり、帝辨の怯弱を悔りて廢立を謀り、袁紹の抗議を排して之を冀州に逐ひ、遂に

所在群盜起る

帝辨

袁紹何進と宦官を除かんと謀る

袁紹悉く宦官を捕斬す

董卓廢立を行ふ

献帝

帝弑を廢して弘農王、となし、また何太后を鴆殺し、帝の弟陳留王協を擁立す是を獻帝となす、時に年九歳なり。是に於て董卓自ら相國となりて政を專らにし權勢を振ひしかば、山東の州郡兵を興して董卓を討ち、袁紹を推して盟主となす、其從弟袁術また俠氣あり袁紹と俱に起りて卓を討ち、冀、豫、兗、陳留、廣陵、河内、山陽、東郡の諸州郡皆之に應じ、袁紹は王匡と共に河内に屯し、韓馥は鄴（河南彰德府臨漳縣）に留まりて其軍糧を給し、孔伷は潁川に屯し、曹操は劉岱、張邈、橋瑁等と共に酸棗（河南衛輝府延津縣）に屯し、袁術は魯陽（河南汝州魯山縣）に屯せり、而して曩に許生を討平したる長沙の太守孫堅もまた起りて卓を討たんとす。董卓關東の兵盛なるを見て其鋒を避けんとし、洛陽の宮廟民舍を燒き、陵墓を發し、富民を殺して其財貨を奪ひ、餘民數百萬を驅つて西長安に遷都す。然るに關東の諸將は兼并を事として自己の強大を計り、袁紹、袁術また互に相軋るに至り進んで董卓に向ふものなし、曹操乃ち獨り憤慨して兵を勒し、西して卓の將徐榮と汴水に戰て敗られ、孫堅は袁術と合同して南陽に據りしが、西紀一九一年（後漢獻帝初平二年）洛陽に攻め入り、諸陵を脩め傳國璽を得て還りし

山東の諸將兵を起す

董卓都を長安に遷す

孫堅洛陽に入る

董卓暴威を振ふ

もまた終に長安に向はず。董卓諸將の能く爲すなきを見て凶暴益、甚しく、自ら太師となり、車馬服御天子に擬し、一族を顯要に据え、金銀財寶を蓄積して、事成らば天下に雄據せん成らざれば此を以て老いんと稱するに至る。

關東の形勢

時に關東の諸將遂に分裂して相雄視するに至り、袁紹は冀州を奪ひて之に據り、曹操は東郡の太守となりて山東を占め、公孫度は遼東を取りて威を振ひ、公孫瓚は幽州を領して勢强く、劉表は荆州を扼して雄飛の勢を示し、袁術は南陽を有して收斂度なく、孫堅また豫州を領して大志あり、而して公孫瓚、孫堅、袁術と、袁紹、劉表とは互に氣脈を通じて相攻伐しぬ、故を以て董卓は意充ち氣驕り、また東方を顧みず益、威權を振ひしかば、西紀一九二年（後漢獻帝初平三年）司徒王允等密に卓を誅戮せんとし、卓の中郎將呂布が卓を怨めるを以て共に誅て卓を殺し、尸を長安の市中に棄つ、是に於て吏士は萬歳を連呼し、百姓道に歌舞せり、王允乃ち卓の一族を夷せしが、忽ち卓の遺將李傕、郭汜の襲ふ所となりて殺され、呂布は走りて袁術に歸し次で袁紹に投ぜり。

董卓亡ぶ

曹操の威名大に揚る

此時に當て曹操は兗州に據りて竊かに天下の形勢を觀望せしが、袁術が

劉備興る

孫策江東に據る

關中亂る

劉表に追はれて北に向ふを擊て壽春（安徽鳳陽府壽州）に走らし、更に徐州の牧陶謙を擊て十餘城を下し、西紀一九五年（後漢獻帝興平二年）呂布が袁紹を辭し操の虚に乘じて兗州を亂し、濮陽（直隸大名府開州）を取りて勢盛なるを擊破し威名大に揚る。是より先き琢郡の劉備もまた漸く倔起して河東の關羽、涿郡の張飛と親交を結び、同學の緣により公孫瓚の助を得て平原（山東濟南府四北及武定府四）の相となりしが、陶謙が曹操に破らるゝに及んで往て之を救ひ、謙病沒するや代つて徐州を領し衆望あり、呂布が曹操に敗られて來り投ずるを容れて勢悔るべからざるに至る、備字は元德自ら稱して漢の景帝の後といふ。此間孫堅の子孫策もまた江東に據りて勢を振ふ、初め孫堅袁術の命を受けて劉表を擊ち、表の軍に射殺せられしかば、其子策謀臣周瑜と謀りて百姓を撫恤し、軍士を奬勵し、後年三國鼎立の基を開けり。

時に董卓の餘黨李傕、郭汜等關中を亂して獻帝は安邑に逃れしが、張楊、董承等の助により西紀一九六年（後漢獻帝建安元年）洛陽に還幸しぬ。是より先き沮授袁紹に說き、天子を挾んで天下に號令することを勸めしも用ゐざりしが、潁

曹操許を都に遷す

劉備曹操に歸す

曹操呂布を殺す

袁紹公孫瓚を滅ぼす

川の荀彧（孫淑）の曹操に說きて主上を奉じ大順を輸し、公義を乘り以て英俊を致さば、四方逆節ありと雖も何ぞ恤るに足らんやといひ、因て晉の文公、漢の高祖の例を引きて勸めしかば、曹操乃ち兵を將ゐて入朝し、帝を許（河南開封府許州）に遷して雄飛の根底を作り、元を建て建安といひ、自ら大將軍となり武平侯に封ぜられ、荀彧を侍中尚書令に、荀攸を軍師に、郭嘉を祭酒となし遙に袁紹に授くるに太尉を以てす。會、劉備は呂布の爲めに敗られて曹操に歸し、豫州の牧となりて沛に屯し、袁術は讖言を信じて吳の孫策の諫を聽かず、其傳國璽を奪ひて自ら帝と稱し、呂布が約に背くを怒りて之を攻めしも却て破らる、時に西紀一九七年（後漢獻帝建安二年）なり。翌年劉備再び呂布の破る所となりて復曹操に歸するや、曹操直に呂布を擊ちて之を下邳（江蘇徐州府邳州）に圍み、沂泗の水を引て之を苦しめ、其困迫して降れるを殺し備を許に留めて禮遇せり、是に於て曹操の威勢頗る盛にして大權殆んど其手に歸せんとす。是より先き袁紹は曹操の下に屈するを恥ぢて太尉を拜せず、曹操懼れて自ら司空となり請うて大將軍を紹に讓る、紹乃ち冀青幽幷四州を督して連りに公孫

瓊と攻爭せしが、西紀一九九年（後漢獻帝建安四年）に至り遂に瓊を易（直隸保定府雄縣）に圍みて之を殺し、將に曹操と雌雄を決せんとし、劉備もまた曹操の威名を恐れ車騎將軍董承と密詔に託して曹操を誅せんと謀る。時に袁術は淫虐に耽り資財盡きて自立する能はざるに至り、走て袁紹に投ぜんとせしに劉備、曹操の命を受け、之を途に扼して徐州を取りしかば、袁術は進むこと能はず走り還て血を嘔て死し、傳國璽は復漢室に歸せり。然るに幾許ならずして劉備等の密謀漏れ、董承は斬られ劉備は走て袁紹に歸し關羽は擒にせられ、曹劉二雄の連和此に始めて破れぬ。

袁術亡ぶ

劉備曹操と絶つ

睹侯の形勢

今や海内の英雄は殆んど敗滅に歸し、荆州の劉表は既に當世に意なくして境内の保安、學術の奬勵、士民の愛撫に餘念なく、唯曹操に對する袁紹、劉備の連合是と輸贏を決するのみなりしに、江東の孫策漸く勢を强めて曹操の虛を衝き帝を奪はんとするの形勢あり、海内三分の形勢漸く成らんとす。會、孫策は出獵して怨家の爲めに射殺せられ、西紀二〇〇年（後漢獻帝建安五年）其弟權代りて衆を領せしが終に國家を爭ふの器にあらず、世は乃ち曹袁二雄の舞臺となれり。是より先き袁紹は許を攻めんとして沮授の諫を聽かず、曹操と官渡（河南開封府中牟縣東北）に相持せしが、劉備の來り投ずるに及んで顏良を遣りて白馬（河南衛輝府滑縣）を攻めしめて利あらず、會、關羽また脫して來り歸するや、袁紹氣益〻驕りて西紀二〇〇年遂に曹操を官渡に攻め、大に敗れて其輜重を破られ、全軍潰散して冀州に還れり、劉備時に汝南にありしが、翌年曹操來り擊つに逢ひ奔て荆州の劉表に投ず。表紹敗軍を悉ぢて憂僭遣る能はず、西紀二〇二年（後漢獻帝建安七年）遂に病を發し血を嘔て死し、二子譚、尙後を爭ひ相鬩ぎて內訌起りしかば、曹操其釁に乘じて之を破り、西紀二〇四年（後漢獻帝建安九年）遂に攻めて鄴を取り自ら冀州の牧を領し、袁紹の墓を祀りて其靈を慰め、翌年譚を南皮（直隸天津府南皮縣）に攻めて之を斬る、時に尙走て幽州にありしが其將吏の逐ふ所となりて遼西に奔り烏桓に依れり。此時烏桓は蹋頓其衆を領して頗る强く、袁尙を容れて曹操を拒ぎしかば、西紀二〇七年（後漢獻帝建安十二年）曹操遂に烏桓を擊ち、田疇の嚮導により進て白狼山（直隸承德府建昌縣にあり）に戰て蹋頓を斬り、其衆二十餘萬を降せしかば、尙また東遼東に奔りしに遼東の大守公孫康、尙を殺

袁紹官渡に敗る

袁氏亂る

曹操烏桓を擊つ

袁氏亡ぶ

劉琮曹操に降る

して首を曹操に送り袁氏全く滅ぶ、公孫康は公孫度の子なり。翌年曹操更に南に向つて劉表を討ちしに會、表死して其子琮、荆州を擧げて降る。是に於て曹操功を以て丞相に任ぜられしが、是れ全く形式の虚譽に過ぎずして大勢今や已に其隻手に歸するに至れり。

劉備諸葛亮を得

劉備曹操に汝南より來りて劉表の許にあり、曹操北征の虚を衝かんとせしも、劉表許さず空しく髀肉の歎を發せしが、偶、儒生司馬徽の家に宿りて、俊傑の士諸葛亮字は孔明あるを知り、三たび駕を襄陽の隆中湖北襄陽府襄陽縣四に枉げて見ることを得、其策を聽きて大に悅び、聘して軍師となし陰に時運を待ちしが、曹操來り討ち劉表死して琮降るに及んで、遂に江陵湖北荆州府治より夏口湖北武昌府城に走る。

劉備夏口に走る

曹操江東を圖る

關羽止まりて曹操を當陽湖北安陸府當陽縣に拒ぎ、諸葛亮、張飛、趙雲等皆從ふ。曹操勢に乘じて江陵に至り、楊子江を下りて東方を席捲せんとし、書を江東の孫權に遺り、水軍八十萬衆を治めて呉に會獵せんといひ、呉の群臣驚愕爲す所を知らず、皆曹操を迎へんとす。時に諸葛亮往いて呉にあり、具さに曹操の恐るゝに足らざるを說き、合同して之に當らんと請ふ、魯肅また周

孫權曹操を禦ぐ

赤壁の戰

瑜を勸めて必ず之を破らんことを保す、孫權乃ち迎へ戰ふに決し、周瑜は精兵三萬人を督し劉備と軍を合して曹操を赤壁山湖北武昌府嘉魚縣東北下に邀ふ。曹操北岸に次し呉軍南岸にあり、周瑜乃ち部將黄蓋の計を用ゐて數十の蒙衝鬪艦に燥荻枯柴を積み、油を灌ぎ幕を以て之を掩ひ、走舸を其尾に繫ぎ詐りて降を請ひ、東南風に乘じて火を發す、火勢猛烈船走ること矢のごとく、直に北岸の船を燒盡し死者甚だ衆く、南軍雷鼓して奮擊し大に北軍を破り、曹操狼狽僅かに身を脫して還る、是よりまた兵を呉に加ふること能はず、是を赤壁の戰といふ、實に西紀二〇八年後漢獻帝建安十三年なり。會、劉備、荆州江南四郡武陵、長沙、桂陽、零陵を徇下せしが周瑜は劉備の大志あるを察し、之を呉に留めて出さゞらしめんとせしも孫權用ゐず、西紀二一〇年後漢獻帝建安十五年周瑜死して魯肅代はるに及び、孫權其勸に從ひ荆州江北を劉備に貸し、共に曹操の來襲を拒がんとす。時に漢の宗室劉焉の子劉璋益州に據りて富强なりしが、劉備は謀士龐統の言に聽きて益州を取らんと欲し、西紀二一一年後漢獻帝建安十六年關羽を荆州に留めて自ら江を泝り涪城四川綿州府に屯し、二年の後遂に成都を取りて

劉備益州を取る

孫權劉備と荊州を爭ふ

劉璋を降し、自ら益州の牧を領せり。吳は前年孫權、石頭城を秣陵（江蘇江寧府）に築き、建業と號して治を徙し頗る國政に心を用ゐしが、是に至り劉備に荊州の返還を求めしも劉備聽かず、遂に爭端を開く。然るに劉備、曹操の來侵を聞き、和を孫權に求めて荊州の分割を講じ、西紀二一五年（後漢獻帝建安二十年）に至り湘水を以て界となす、孫權乃ち魯肅を以て陸口に屯せしめ、肅死して呂蒙之に代はる。

荊州の分割

曹操魏王となる

劉備漢中王と稱す

關羽の威大に振ふ

此間曹操許にありて天子を擁し、銅雀臺を作りて好樂を助け、九錫を加へて魏公となり、漢室を奪ふの計已に成りしかば、荀彧は頻りに之を諫めしが用ゐられずして毒を飲で死し、曹操は伏皇后及二皇子を弑して其女を皇后に進め、西紀二一六年（後漢獻帝建安二十一年）爵を進めて王となり、車服天子に擬し出入警蹕するに至る。時に劉備は成都にあり、張飛等をして曹操の軍と漢中の地を爭はしめしが、二一九年（後漢獻帝建安二十四年）に至り親ら兵を率ゐて魏の將夏侯淵を殺し、曹操を破りて漢中を取り沔陽（陝西漢中府沔縣）に自立して漢中王と稱す。會、關羽荊州にありて威名盛んにして、樊城（湖北襄陽府襄陽縣北）襄陽（湖北襄陽府襄陽縣）を攻取

三國の分立

曹丕漢を簒ふ

後漢亡ぶ

し許に迫らんとするの勢あり、曹操大に恐れ人をして孫權に說くに利害を以てせしめ、呂蒙また權に勸めしかば、吳は背より江陵を取り魏は前より樊城を攻めて關羽を走らし、遂に羽を捕て漳鄉（湖北安陸府當陽縣東北）に斬り、孫權は臣を魏に稱して荊州を得たり。是に於て支那は三國に分割せられ、劉備は成都に、孫權は建業に、曹操は許に根據を占めしも、劉備の地は西方に偏在して版圖狹く、孫權は江東利便の地に據るも已に魏に臣事するを以て、獨り曹操の勢力吳蜀を壓して中原に雄飛せり。然れども曹操は未だ帝位を簒するに至らずして死し、其子丕嗣ぎて立ちしが、幾許ならず圖讖に託して獻帝を廢して山陽公となし、遂に皇帝の位に即く、實に西紀二二〇年（後漢獻帝建安二十五年）なり、後漢は光武帝より是に至るまで十二帝百九十六年にして亡ぶ。

第二十章　南匈奴及鮮卑の盛衰

諸羌の叛服

南匈奴の形勢——南匈奴の內訌——南匈奴の叛服——句龍王吾斯反す——南

匈奴の衰微――鮮卑隆盛に赴く――鮮卑の叛服――鮮卑南匈奴を侵す――檀石槐――鮮卑の最大版圖――檀石槐漢軍を破る――鮮卑の離散――諸羌の形勢――後漢と四羌との交渉起る――燒當羌の叛服――鄧訓諸羌を服屬す――羌寇漸く龍む――羌寇再び起る――邊郡羌寇に苦む――任尚羌寇を平ぐ――羌寇漸く衰ふ――段熲東西諸羌を平ぐ――後漢滅亡の一因

南匈奴の形勢

南匈奴は單于比の後邱浮尤鞮單于（比の第名は莫）伊伐於慮鞮單于（莫の第名は汗）醯僮尸逐候鞮單于（比の子名は適）邱除車林鞮單于（莫の子名は蘇）湖邪尸逐候鞮單于（適の第名は長）伊屠於閭鞮單于（汗の子名は宣）休蘭尸逐候鞮單于（長の第名は屯屠何）相次で立ち、常に漢に服屬して北匈奴を擊ち遂に衰亡に至らしめしが、西紀九三年（後漢和帝永元五年）單于屯屠何死して單于宣の弟左賢王安國立つや、單于適の子右谷蠡王師子轉じて左賢王となる、師子もと勇黠多知前單于及屯屠何皆其氣決を愛す、數〻兵に將として北庭を掩擊し還て賞賜を受け、和帝また殊異を加へしかば國人盡く師子を敬して安國に附かず、安國因て師子を殺さんと欲し、新降の諸胡中嘗て塞外にありて師子の爲めに驅掠せられ、之を怨めるものあるを知り、遂に與に謀りて師子を除かんとせしに師子其謀を覺り、五原の界に別居し病と稱して

南匈奴の內訌

庭會せず、度遼將軍皇甫稜もまた之を知り擁護して遣らざりしかば、西紀九四年（後漢和帝永元六年）單于遂に兵を起して畔き、師子を曼柏城（內蒙古吳喇河北黃河北）に圍み下す能はず、兵を引て五原に屯するに及び、中郎將杜崇、度遼將軍朱徽諸部の騎を發して之を追ひしに、安國の舅喜爲等併せ誅せらるゝを恐れ、安國を殺して師子を立て亭獨尸逐候鞮單于となす。然るに幾許ならずして降胡十五部二十餘萬人皆叛き前單于屯屠何の子逢侯を脅し立て單于となし塞を出づ、和帝乃ち將軍鄧鴻等を遣り之を擊たしめしに、逢侯遠く遁れ漢兵追ふ能はずして還りぬ。西紀九八年（後漢和帝永元十年）單于師子死し、單于長の子檀立て萬氏尸逐鞮單于となり、西紀一〇九年（後漢安帝永初三年）漢人韓琮を隨へて入朝し、還て韓琮の言に聽き叛きしかば、安帝何熙、龐雄、耿夔、梁慬等を遣はし連りに匈奴の兵を破る、單于大に恐れ翌年遂に使を遣はして降を乞うて許されたり。

南匈奴の叛服

次で烏稽侯尸逐鞮單于（檀の第名は拔）を經て去特若尸逐鞮就單于の時に至り、西紀一四〇年（後漢順帝永和五年）句龍王吾斯、車紐等反きて西河に寇し、次で右賢王を招誘し兵を合せて美稷を圍む、順帝乃ち馬續に命じ邊兵を發して之を擊破し、使を

句龍王吾斯、反す

南匈奴の衰微

鮮卑隆盛に赴く

遣はし單于を責讓せしめしに、會、單于自殺し降者更に狐疑して動搖せしかば、帝は王商の言に從ひ馬續に命じて降虜を招降せしむ。是に於て右賢王部抑鞮等皆續に降りしも、句龍王吾斯等車紐を立て單于となし、東は烏桓を引き西は羌胡等數萬人を收めて幷凉幽冀の四州を寇掠せしかば、帝張耽を遣はし車紐等を馬邑に擊破して之を降す、然るに吾斯猶ほ其部曲を率ゐ烏桓と與に寇鈔せしが、後中郎將馬實人を遣りて之を刺殺せり。此間漢は南匈奴の守義王兜樓儲を立て呼蘭若尸逐就單于となし、其死後伊陵尸逐就單于車兒立ちしが單于の勢威既に衰へ、西紀一五八年（後漢桓帝延熹元年）南匈奴の諸部並び叛きて烏桓、鮮卑と與に緣邊九郡に寇するも制する能はず、桓帝乃ち陳龜を度遼將軍となして之を鎮禦せしめ、次で張奐を北中郎將となして之を擊たしむ、張奐潛に烏桓の使を誘ひ匈奴の別種屠各の渠帥を斬り、其衆を襲破せしかば諸胡悉く降る、時に單于車兒國事を統理する能はず南匈奴益〻衰ふ。

是より先き鮮卑は匈奴の故地に據りて勢漸く隆盛に赴き、安帝の永初中

鮮卑の叛服

鮮卑南匈奴を侵す

檀石槐

鮮卑の最大版圖

其大人燕荔陽、漢に入朝するや、鄧太后命じて烏桓校尉の治所寧城（直隸宣化府宣化縣）の下に居らしめ、因て南北兩部の質館を築きしより鮮卑の邑落百二十部各〻質を入れて內屬せしが、此後叛服常ならず漢は時に尅獲あるも其費す所を償はず、邊民歲每に其害に苦しむ、而して鮮卑また更に烏桓、匈奴と相攻擊し數〻南匈奴を侵せしかば、西紀一二六年（後漢順帝永建元年）單于憂恐して書を漢に上り、朔方以西の障塞を修復せんことを乞ふに及び、順帝命じて兵を中山（直隸保定府唐縣）の北界に屯し、また緣邊の諸郡に令して步兵を增置し、塞下に列屯して戰射を敎習せしめ、以て南匈奴に聲援して其侵寇を防かしむるに至れり。桓帝の世鮮卑に檀石槐出づるや勇健にして智略あり、遂に推されて大人となり庭を彈汗山（察哈爾左翼黃旗諸山）・歡仇水（張河口外柳溝河）上に建て、悉く東西部の大人を歸服せしめ、因て南は漢の緣邊を抄掠し北は丁零を拒ぎ、東は夫餘を却け西は烏孫を擊て悉く匈奴の故地を幷せ、東西二千餘里南北千餘里に亘り、三部に分ちて東夫餘、濊貊に接する二十餘邑を東部となし、右北平より以西上谷に至る十餘邑を中部となし、上谷より以西敦煌に至りて烏孫に接する廿餘邑

を西部となし、各〻大人を置て之を領せしめ、兵勢甚だ盛にして漢の印綬封冊を却け、西紀一五六年（後漢桓帝永壽二年）以來頻りに幽并涼三州の緣邊を寇掠せしかば、西紀一七七年（後漢靈帝熹平六年）靈帝遂に夏育、田晏、臧文等を遣はし、高柳、雲中、雁門より各〻萬騎に將として塞を出でしめしに、檀石槐三部の大人に命じて迎へ戰ひ大に漢軍を破る、育等其節傳輜重を喪ひ各〻數十騎を以て犇り還り、死者什の七八に及べり。是より鮮卑の入寇連年息まず、酒泉幽并等の緣邊其害を被らざるものなかりしが、西紀一八一年（後漢靈帝光和四年）檀石槐死して子和連代はり立ち、才力父に及ばず貪淫にして部衆叛くもの多し、後和連出て北地を攻めて射殺せられ、其子騫曼尚ほ幼なるを以て兄の子魁頭立ちしが、騫曼長ずるに及んで魁頭と國を爭ひ其衆遂に離散せり。

檀石槐漢軍を破る

鮮卑の離散

諸羌の形勢

羌族は前漢の宣帝、趙充國をして先零羌を服屬せしめ、次で元帝の時馮奉世其三姐七種を降せしより以後數十年また塞を侵さゞりしが、王莽の亂より塞に入りて金城の屬縣に居るもの多く、隗囂討つ能はず之を慰納し其衆を發して漢と相拒ぎしが、後漢の初め光武帝班彪の言により西紀三三年（後漢光武帝建武九年）護羌校尉を復して警備せしめ、是より西羌との交渉頻繁となれり。

後漢と西羌との交渉起る

既にして先零羌諸種と金城、隴西に寇し次で臨洮に寇ずるや、來歙馬援大に之を擊破し降羌を徙して天水、隴西、扶風に置く。是より先き燒當羌の豪酋燒當羌滇良、先零を破り其地を奪うて之に據りしが、滇良の死後子滇吾立ち附落轉〻盛にして遂に雄を諸羌中に稱し、漢塞を侵さんとするものに方略を授け自ら渠帥を以て居り、西紀五七年（後漢光武帝建武中元二年）弟滇岸と隴西に寇し、太守劉盱を破りしかば諸羌皆叛きて之に應ず、光武帝乃ち張鴻に命じ諸郡の兵を領して之を擊たしめしも允吾（甘肅蘭州府皋蘭縣）に敗死せしが、翌年馬武等の出て之を擊破するや兄弟共に漢に降り、餘衆皆降散せり。後二十年を經て西紀七七年（後漢章帝建初二年）に至り、滇吾の子迷吾諸羌を率ゐて反し、金城の太守郝崇を破り隴西、漢陽に寇し臨洮を圍みしが、馬防、耿恭等の破る所となりて降る。更に十年を經て西紀八六年（後漢章帝元和三年）迷吾また弟號吾と隴西金城に寇せしも、隴西の太守張紆の破る所となりて諸羌解散し、迷吾退て河北の歸義城に居り、翌年復諸羌と金城の塞に寇し護羌校尉張紆に擊殺せられしかば、其子迷唐

燒當羌の叛服

鄧訓諸羌を服屈す

更に諸羌を將ゐて大小榆谷（甘粛蘭州府河州）に據りて叛き、種衆熾盛にして張紆制する能はざりしが、西紀八八年（後漢章帝章和二年）鄧訓の張紆に代はりて護羌校尉となるや力めて諸胡を撫養し、また諸羌種を賞賂して相招誘せしめしかば、迷唐の叔父號吾其種人を將ゐて來り降るに至る、訓因て湟中の秦胡及羌兵四千人を發し、塞を出て迷唐を寫谷（甘粛四寧府四寧縣）に掩擊して之を破る、迷唐乃ち大小榆谷を去て頗嚴谷（甘粛西寧府西寧縣）に居り其衆悉く離散せり。是に於て迷唐復故地に歸らんとせしに、西紀八九年（後漢和帝永元元年）鄧訓湟中六千人を發し、任尚をして之に將たらしめ、革船を以て河を渡り迷唐を掩擊して之を破りしかば、迷唐其餘衆を收めて西徙する三百里諸附落小種皆之に畔き、訓の威信大に行はれ遂に屯兵を罷むるに至れり。

羌寇漸く罷む

然るに鄧訓の死後聶尚代はり、文德を以て諸羌を綏服せんとして失敗し、是より後羌の叛服常無かりしが、迷唐もまた勢漸く衰へ、其死後西紀一〇一年（後漢和帝永元十三年）部衆遂に來り降り、西海及大小榆谷の左右羌寇無きに至り、しかば、翌年隃麋（陝西鳳翔府汧陽縣）の相曹鳳の上言により西海郡を置き、河邊に屯田を設け塞羌交關の路を隔離し、漸く增置し

羌寇再び起る

て三十四部の多きに上り、其功立つに亟んとして會、諸羌叛き遂に罷む。初め諸羌の降りて郡縣に散在せるもの皆吏人豪右に徭役せられ愁怨を積みしに、西紀一〇七年（後漢安帝永初元年）騎都尉王宏西して西域都護段禧を迎ふるに及んで、金城隴西漢陽の諸羌を發して西征せしめしかば皆遁れ潰え、燒當の羌豪東號の子麻奴兄弟此機に乘じ、其種人と塞を出で先零の別種滇零等と叛き、竹木を以て戈矛となし板楯を盾となして寇掠し、郡縣畏懦制する能はず、鄧隲、任尚征して利なく、尚は平襄（甘粛鞏昌府通渭縣）に大敗し羌衆また盛にして漢廷制する能はず、次で西紀一一〇年（後漢和帝永初四年）漢中の太守鄭勤、先零羌を褒中（陝西漢中府褒城縣）に擊て敗死し、翌年羌寇進んで河內に至り百姓多く南走して河を渡り、緣邊の守令皆戰守に意なく、郡縣の治所を徙して寇難を避け、百姓流離分散して或は老弱を棄捐し或は人の僕妾となり其大半を喪ふ、任尚乃ち命を受けて羌を上黨の羊頭山（陝西路安府長子縣東南）に破りて漸く之を却くるを得たり。

邊郡羌寇に苦む

時に漢陽の杜琦其弟季貢及同郡の王信等羌と謀を通じ、衆を聚めて上邽城（甘粛秦州）に據りしが、王信敗死し杜季貢奔て滇零に歸す、會、滇零死して子零昌立

任尚羌寇を平ぐ

羌寇漸く衰ふ

ち年尚ほ幼なるを以て同種狼莫其計策をなし、季貢を將軍に任じて丁奚城（甘肅寧夏府靈州）に別居せしめ遂に益州に入寇す、西紀一一五年（後安帝元初二年）班雄（班超の長子）之を討ちて大に敗れしが、武都の太守虞詡奇計を以て羌に勝ち流亡の民を招き、次で任尚、班雄に代はりて再び西征し、刺客を放ちて杜季貢、零昌を殺し大に狼莫を破るに及んで諸羌遂に瓦解し、三輔益州始めて寇警なきを得たるは任尚の功多しとなす、然るに此時鄧氏の權勢盛にして鄧太后の從弟鄧遵封ぜられて武陽侯となり、任尚之と功を爭ひ檻車徵されて、藥市せられき。西紀一二一年（後漢安帝建光元年）燒當の羌豪麻奴、湟中に寇して金城諸縣を攻め、護羌校尉馬賢に破られ弟犀苦代はりて渠帥となり數、馬賢に破られしが、西紀一四一年（後漢順帝永和六年）馬賢戰歿し、後三年を經て西紀一四四年（後漢順帝建康元年）護羌校尉趙冲また戰歿せしも、斬獲多くして羌の勢漸く衰耗せり。後燒當等八種の羌叛きて隴右に寇し、護羌校尉段熲の擊破する所となりしが、西紀一六〇年（後漢桓帝延熹三年）其餘衆燒何の大豪と張掖に入寇するや、段熲擊て之を破り追うて塞を出づる三百餘里、積雲山（頑特前頑族河西阿里克二土司東南）に至りて燒何の大帥を

段熲東西諸羌を平ぐ

後漢衰亡の一因

斬り其餘衆を降して還る、然るに翌年諸羌復叛くや段熲譏を以て獄に下り、中郎將皇甫規擊破して之を降す、後二年を經て西州の吏民段熲の寃を訴ふるもの甚だ衆く、會、湟那等の諸羌益々熾にして涼州幾んど危きに及んで段熲復護羌校尉に任ぜられ、連年西羌を擊破して之を鎮定せしが、東羌先零等の種猶ほ未だ服せざりしかば、西紀一六九年（後漢靈帝建寧二年）段熲、先零諸種を逢義山（甘肅府固原州平涼須彌山）に擊破し、次で擊て悉く東羌を平げしより羌寇殆んど息みしが、漢もまた過去十年の征費八十餘億の巨額に上り、財政爲めに困難に陷り、宦官外戚の專政と相糾纏して海内の紛亂を惹起し、次で黄巾の亂起るに及んで諸羌復蜂起せしが、漢は遂に之を制する能はざりき。

第二十一章　三國　諸葛亮の出師

魏の隆盛

魏の文帝――蜀漢の昭烈帝――昭烈帝吳を伐つ――吳の陸遜蜀軍を破る――蜀吳の同盟――蜀漢帝禪――魏の文帝吳を征す――魏の明帝――諸葛亮南蠻

を征す――諸葛亮魏を伐つ――呉の大帝――諸葛亮再び魏を伐つ――蜀呉の連盟――諸葛亮五丈原に死す――諸葛亮の政績――公孫氏遼東に據る――魏公孫淵を討滅す――魏の隆盛と明帝の治績――魏帝芳

魏の文帝

魏の曹丕已に漢室を簒ひて帝位に即き洛陽に都す、之を魏の高祖文帝となす、文帝黄初と改元し、父曹操を追尊して太祖武帝といひ、官制を改革し富國の實を謀る。然るに西紀二二一年に至り蜀中漢帝弑せられしと訛傳するや、漢中王劉備爲めに哀を擧げ謚を上りて孝愍帝と稱し、遂に群臣の勸によりて帝位に即き、成都を都となし、章武と改元し諸葛亮を丞相となす、蜀漢の昭烈帝是なり。時に呉は孫權未だ帝を稱せずと雖も已に江東に雄視し、三國の攻爭また是より起る。

蜀漢の昭烈帝

昭烈帝呉を伐つ

昭烈帝關羽の敗歿を恥ぢ讐を呉に報ぜんと欲して群臣の諫を用ゐず、即位の翌年自ら兵四万餘人を率ゐて呉を擊ち、孫權和を請ふも許さず軍を進めて秭歸（湖北宜昌府歸州）に屯す、孫權乃ち陸遜を大將軍に拜して之を拒がしめ、使を魏に遣はして降附を請ひ呉王に封ぜられて其保護を受く、昭烈帝必ず呉を服さんと欲して巫峽（四川夔州府巫山縣東）より夷陵（湖北宜昌府東湖縣）に至るまで數十營を連ねて呉軍と對持せしに、遂に陸遜の連破する所となり四十餘營悉く陷り、帝遁れて白帝城（夔州府城東）に入る、會、魏の文帝呉の約に違ふことあるを責めて兵を示すに至り、孫權恐れて蜀呉相連合して之を拒がんと欲し、使を蜀に遣はし蜀呉復相通ずるに至る。孫權乃ち黄武と改元し、江に據りて拒守せしかば、西紀二二三年（魏黄初四、漢章武三、呉黄武二）魏軍來りて江陵を圍みしも克つこと能はずして退けり。是歳昭烈帝病んで死し子禪位を繼ぎ、諸葛亮遺詔を受けて國政を決し、建興と改元し、官職法制を修正し、尚書鄧芝を呉に遣はして呉と連和の策を執り、呉を魏と絶たしめて益州を修め、專ら對魏の方法を講ぜしかば、魏の文帝怒りて西紀二二四年親ら舟師を率ゐて呉を討たんと欲し、淮水に浮び壽春を經て廣陵（江蘇揚州府江都縣）に至りしに、呉軍大艦を江に浮べて拒守し、江水また大に漲ぎりしかば渡るを得ずして引き還し翌年再び大軍を以て江に臨みしが、呉軍の守備嚴にして波濤また洶湧するを見て、望を呉に絶ち戰はずして還る。魏の文帝在位七年西紀二二六年（魏黄初七、漢建興四、呉黄武五）を以

呉の陸遜蜀軍を破る

蜀呉の同盟

蜀漢帝禪

魏の文帝呉を征す

魏の明帝

て死し、太子叡立つ是を烈祖明帝となす、司馬懿曹真、陳群等遺詔を受けて政を輔け大和と改元せり。

蜀の丞相諸葛亮鋭意國力を養ひ、中原を復するを以て任となせしが、會〻雲南の蠻夷雍闓を首領となして南邊を騷擾せしかば、自ら征討して雍闓を斬りしに、孟獲餘衆を収めて蜀軍を拒ぐ、亮乃ち孟獲を生擒し七縱七擒以て之を服し、南方の患を絶ちて西紀二二七年（魏太和元、漢建興五、吳黄武六）出師の表を帝禪に上つり、諸軍を率ゐ出て漢中に屯し魏を討たんとす、關中震駭し天水、南安（甘肅鞏昌府隴西縣）安定等皆魏に叛きて蜀に應じ、魏の明帝恐懼し張郃に命じて之を拒がしむ、亮進んで祁山（甘肅鞏昌府西和縣西北）を攻め、號令嚴明戎陳整齊なりしも、翌年に至り其先鋒馬稷節度に違ひて街亭（甘肅秦州安縣）に大敗せしかば亮已むを得ずして漢中に還り、復び上表して散關（陝西鳳翔府寶鷄縣西南）より陳倉（寶鷄縣）に出て之を圍み、糧盡くるに至りて引き還る。後二年を經て西紀二三一年（魏太和五、漢建興九、吳黄龍三）諸葛亮また初志を貫かんと欲して魏を擊ち祁山を圍む、魏の大將軍司馬懿命を受けて之を拒ぎしが（甘肅鞏昌府伏羌縣及秦州の間）に大敗し、張郃は伏弩に中て死し蜀

諸葛亮南蠻を征す

諸葛亮魏を伐つ

軍大に振ひしが、糧復盡きしかば亮遂に漢中に還る。

是より先き西紀二二九年（魏太和三、漢建興七、吳太初元）吳王孫權もまた帝と稱す、太祖大帝是なり、因て父堅を追尊して武烈帝といひ、兄策を長沙桓王といふ。初め大帝秣陵（江蘇江寧府）に城きて治所となし、改めて建業と號し後武昌に徙りしが、是に至りて都を建業に遷し、次て西紀二三一年魏軍を阜陵（安徽滁州全椒縣）に破りて蜀と相呼應す、時に魏は蜀吳の二強敵を受けて毫も屈せず愈〻強盛に赴けり。

此間諸葛亮は漢中にありて農桑を勵まし武術を練り、木牛流馬を創製して米を斜谷口（陝西漢中府褒城縣）に送り、專ら士民の休養と軍糧の充實とを謀ると三年、遂に吳と連盟して魏を討つを約し西紀二三四年（魏青龍二、漢建興十二、吳嘉禾三）十萬の兵を率ゐて斜谷口より郿（陝西鳳翔府郿縣）に出で進んで五丈原（陝西鳳翔府西南縣）に軍し、渭濱居民の間に屯して軍糧の補充策を講じ魏の司馬懿と相對持す。是に於て吳帝は約を踐で大軍を發し親ら合淝（安徽廬州合肥縣）に向ひ、陸遜を襄陽に、孫韶を廣陵に進ましめ三道より魏に入る、魏の明帝乃ち司馬懿に命じて戰を禁じ自ら出て吳軍を拒ぎ之を却く。時に司馬懿諸葛亮と相守る百餘日亮歿、

吳の大帝

諸葛亮再び魏を伐つ

蜀吳の連盟

諸葛亮五丈原に死す

職を挑むも懿出てざりしかば、亮乃ち懿に巾幗婦人の服を遺りしが遂に出てず、會〻亮病んで死し長史楊儀、姜維等軍を整へ懿の追兵を却けて南に還れり。亮嘗て兵法を推演して八陣の圖を作る、是に至りて懿其營壘を案行して其奇才を歎賞せりといふ。亮政をなすや誠心を開き公道を布き、名に循て實を責め、信賞必罰國内畏服して之を愛し、刑政峻嚴なりと雖も怨むものなし漢帝亮に諡して忠武侯といふ、亮二兄瑾誕あり、瑾は吳にありて大將軍に任ぜられ、誕は魏に仕へて鎮南將軍となれり。

諸葛亮の死後軍馬の聲收まりて中原また靜穩なりしが、會〻魏は東北に事を生ずるに至れり。漢の末董卓公孫度を以て遼東の太守となし、度官に到るや東高句麗を伐ち、西烏桓を擊ち遂に自立して平州の牧と稱す、後其子康に傳へ次で孫淵に至り屢〻吳と通じて遙に相聲援せしかば、魏の明帝之を怒り遼東を擊ちしが克たず、吳の大帝因て淵を封じて燕王となせしも、淵は吳の遠くして恃み難きを憂ひ遂に魏に歸し樂浪公となれり。既にして淵また魏に叛きて自ら燕王と稱せしかば、西紀二三八年（魏景初二、漢延熙元、吳赤烏元）明帝司馬

諸葛亮の政績

公孫氏遼東に據る

魏公孫淵を討滅す

懿を遣はして襄平（盛京奉天府遼陽州）を陷れ淵を捕へて之を斬り、悉く遼東帶方（朝鮮黃海道）樂浪（朝鮮平安道）四郡（京畿道）南境）を平定しぬ。

時に魏は明帝土木を好みて大に洛湯宮を治め、許昌（河南許州東北）に宮殿を營み銅人龍鳳を鑄て始皇漢武の徹に倣ひ、土山を芳林園に築き百官をして土石を運ばしめ、屢〻工役を起して百姓の病苦を顧みず、また奢侈を好みて內寵に耽りしが、性沈毅明敏にして學を好み經學を奬勵し律令を明修せしかば將相咸く其の大器に服し國勢次第に隆盛に向ひ、威風中原より朝鮮に波及し、優に蜀吳二國を壓するに至れり。明帝在位十三年にして西紀二三九年（魏景初三、漢延熙二、吳赤烏二）死し、太子芳立ち年八歲太尉司馬懿大將軍曹爽と共に詔を受けて共に政を輔け、次で懿太傅となりて其諸弟を將軍侍從に任じ漸く專權の基を造くるに至れり。

魏の隆盛と明帝の治績

魏帝芳

第二十二章　司馬氏の專權と蜀魏の滅亡　吳の滅亡

蜀呉の形勢

魏の形勢

司馬懿魏の實權を握る

蜀呉の形勢——魏の形勢——司馬懿魏の實權を握る——呉帝亮——司馬師廢立を行ふ——魏帝髦——司馬昭魏帝を弑す——魏の元帝——孫綝呉帝を廢す——呉の景帝——姜維頻に魏を侵す——魏蜀を伐つ——鄧艾鍾會蜀に侵入す——蜀漢の滅亡——司馬氏魏を簒ふ——魏亡ぶ——呉帝皓——晉の武帝呉を圖る——晉呉を伐つ——呉亡ぶ

諸葛亮死して蜀呉の連盟策功を成さゞりしも、呉は猶ほ魏を攻むるの念を絶たず、前後兩度入寇して敗れしが、蜀は蔣琬、涪（四川龍安府彰明縣）に屯して兵勢を養ひ、費禕大將軍となりて軍政を司どり、西紀二四四年（魏正始五、漢延熙七、呉赤烏七）魏の曹爽が大擧して漢中に攻め入るを拒ぎて之を破れり。時に陸遜呉の丞相となりしが翌年死し、蜀また蔣琬、董允の二名臣を失ひ、魏は曹爽益〻權を專らにし、徒黨を結びて覇國の兆を顯はし、太傅司馬懿は疾と稱して政に與らず、三國一時に不幸に罹りて暫らく攻爭を廢せしが、次で西紀二四九年（魏嘉平元、蜀延熙十二、呉赤烏十二）に至り、司馬懿遂に其子師、昭等と謀りて曹爽の逆謀を誣ひ、之を殺して其三族を夷し、自ら丞相となり他日司馬氏簒奪の礎を開きしが、二年の後に死し子師大將軍となる。

呉帝亮

司馬師廢立を行ふ

魏帝髦

司馬昭魏帝を弑す

是より先き呉の大帝太子和を廢して少子亮を立てしが西紀二五二年（魏嘉平四、漢延熙十五、呉太元二）大帝死し、諸葛瑾の子大將軍諸葛恪太傅となりて亮を擁立し、魏軍を東興（安徽廬州府巢縣東南）に破り、明年敗れ還りて再び兵を進めんとして讒に陷り誅殺せられ、孫峻丞相大將軍となり驕暴峻刻國人の輿望を失へり。此歳蜀の將軍費禕もまた盜に殺され、會〻魏に内亂起りて三國の形勢また振はず。時に魏の大將軍司馬師益〻威權を弄し、太常夏侯玄、志を得ずして中書令李豐と怨望す、司馬師魏帝芳が屢〻李豐を召して己を議するを疑ひ、豐を殺して玄等を族誅し、西紀二五四年（魏正元元、漢延熙十七、呉五鳳元）遂に迫て帝を廢して齊王となし、文帝の孫髦を迎立す。是に於て翌年楊州の都督毋丘儉、刺史文欽等兵を起して司馬師の罪を鳴らし之を討つ、司馬師大に之を敗り諸葛誕を楊州の都督に任ぜしが、師此歳を以て死し弟昭大將軍を繼ぎ、大都督と號し黄鉞を假るに至れり。二年の後諸葛誕もまた兵を擧げて昭を討ち呉軍の援を得しも、呉軍は敗れ還り誕遂に壽春に破れて捕斬せらる。次で司馬昭相國となりて晉公に封ぜられ日に帝權を簒ふ、是に於て魏帝髦屈辱に耐えず、殿中の宿衛

魏の元帝

官僚等を率ゐて昭を討たんとせしが賈充の刺す所となりて死し、文帝の姪璜迎へられて立つ之を元帝となす、時に西紀二六〇年（魏甘露五、蜀景耀三、呉永安三）なり。

孫綝呉帝を廢す

此時呉は丞相孫峻已に死して從弟綝政を輔けしが、權勢を恃て倨敖なりしかば帝亮の誅殺に意あるを恐れ、司馬昭の魏帝髦を廢したると同年遂に亮を廢して會稽王となし、其兄の子休を迎立して景帝となし、綝また丞相となりしが專横にして新君に禮なく、幾許ならず誅せられたり。

呉の景帝

姜維願に魏を侵す

是より先き漢の姜維其才武を負み毎に大舉して魏を擊んと欲せしも、費禕從はず專ら國を保ち民を治むることを力めしが、禕死して維國事を執り兵權を握るに及んで、西紀二五四年遂に大舉して北に向ひ、河間（甘肅河州）狄道（甘肅臨州府）臨洮（甘肅洮州府）を攻む、魏の司馬昭之を患ひ鍾會、鄧艾に命じて蜀を征して禍根を絶たしむ。是に於て鍾會鄧會共に西紀二六三年（魏景元四、蜀炎興元、呉永安六）を以て洛陽を發す、鄧艾は三萬餘人を率ゐて狄道より進み、鍾會は十餘萬人に將として斜谷（陝西鳳翔府郿縣）駱谷（陝西西安府盩厔縣）子午谷（陝西西安府鄠縣）より漢中に進む。姜維時に沓中（甘肅作路及上下勒歪二土司）にあり、廖化、張翼等

鄧艾鍾會蜀に侵入す

蜀漢の滅亡

と退きて劍閣（四川保寧府劍州東北）を保守せしに鍾會攻めて拔く能はず、鄧艾は陰平（甘肅階州文縣及四川龍安府北境）より江油（四川龍安府江油縣）に出で、其間山を鑿ち橋梁を架し險阻を亘ること數十里、書を以て蜀の將諸葛瞻を誘ふ瞻は亮の子なり使者を斬り鄧艾の軍を綿竹（四川綿州德陽縣）に拒ぎて敗死す。蜀廷震駭計の出づる所を知らず、帝禪は皇子北地王諶の極諫するを用ゐず、姜維に勅し璽綬を奉じて降を請はしむ、北地王諶遂に昭烈帝の廟に哭し妻子を殺して自殺す、既にして艾成都に至り帝禪面縛輿櫬して艾の軍門に降る、蜀漢は二世四十三年にして亡ぶ、呉は此時援軍を出して沔中に至りしも蜀の滅ぶるを聞て還る。時に鄧艾功に矜り制を專にせしかば鍾會之を嫉み、姜維と密に反を謀り艾の反狀あるを密告し、魏の艾を徵すや會遂に反せしが維と共に將士の殺す所となり、艾また監軍衛瓘の爲めに殺され、劉禪は封ぜられて安樂公となれり。

司馬氏魏を簒ふ

魏亡ぶ

此間魏は司馬昭威權益〻盛にして九錫を加へられ、爵を進めて晉王となりしが、西紀二六五年（魏咸熙二、呉甘露元）死して其子炎嗣ぎて立つや、遂に元帝に迫りて位を禪らしめ、降して陳留王となし自から皇帝の位に即く、之を晉の世祖武帝

となす、魏は五帝四十六年にして亡ぶ。

此時に當り蜀魏の二國已に滅び呉獨り江南に餘業を保つ、而して呉の景帝は西紀二六四年（魏咸熙元　呉元興元）死し、故の廢太子和の子烏程侯皓立ち酒色に沈溺し、刑罰信なく人心大に瓦解す。是に於て晉の武帝羊祜をして襄陽を鎮せしめ、其參軍王濬を益州の刺史となし、江を下りて呉を伐たしめんとす。會、故の陸遜の子陸抗呉の都督となり、羊祜と境を對して交情頗る密に、互に赤心を推せしが、西紀二七四年（晉泰始一〇　呉鳳凰三）陸抗死するに及んで羊祜上表して呉を討つべきをいひしも、杜預張華の外贊するものなし、尋て羊祜死し杜預代はる。時に呉帝淫虐日に甚しく人心瓦解してまた頼むべからず、王濬乃ち益州より上書して呉を討たんと請ひ杜預また之を贊するに及び、武帝乃ち意を決し、西紀二七九年（晉咸寧五、呉天紀三）大軍を發して六道より並び進み、杜預は江陵より王濬は巴蜀より下る、呉軍鐵鎖鐵錐を江中に設けて拒守せしが、天の限りたる大江も遂に用をなさず、翌年晉軍八萬方舟百里鼓譟して石頭城（江蘇江寧府城）四に入り將に建業を衝かんとす、是に於て呉帝恐惶面縛輿櫬して降り、歸命侯に封ぜらる、實に西紀二八〇年（晉太康元　呉天紀四）なり、呉は帝と稱する四世五十二年にして亡び晉遂に江南を幷す、漢末支那分裂せしより是に至るまで八十餘年始めて復一統せり。

呉帝皓

晉の武帝呉を圖る

晉呉を伐つ

第二十四章　海東の形勢　高句麗百濟新羅の建國

漢武征服以後海東の形勢

漢武征服以後海東の形勢—臨屯—貊人—扶餘沃沮濊貊—高句麗の始祖朱蒙—百濟の始祖温祚—高句麗漢邊を侵す—高句麗の興隆—高句麗後漢に服屬す—百濟版圖を擴張す—馬韓の滅亡—新羅の始祖朴赫居世—徐羅伐—朴氏と昔氏—雞林—高句麗の内政—高句麗の内訌—高句麗漢に入寇す—公孫氏の威海東に振ふ—高句麗と魏—毋丘儉高句麗を擊破す—新羅の興隆—金氏新羅に君臨す—三國の形勢概評

前漢の武帝古朝鮮を滅ぼして樂浪、臨屯、玄菟、眞番の四郡を置き、次で昭帝の時に至り臨屯、眞番二郡を廢して臨屯を樂浪に、眞番を玄菟に併合せしも、後玄菟郡治は貊人の犯す所となりて眞番の故地に移り、高句驪縣（滿州盛京　興京廳北）

を以て治所となせしが、前漢の衰ふる頃鴨綠江の上流沸流水附近に高句麗國興るに及んで其併呑する所となれり。是より先き朝鮮の北方即ち今の滿州吉林省の地には後の挹婁、靺鞨、女眞、滿州の祖先にして通古斯族なる肅慎あり、其南方即ち玄菟、樂浪附近に貊人ありき。貊人もまた通古斯族にして支那の北方にありしが、匈奴の强盛に赴きて東胡を逐ふや、貊人もまた東方に遷移し、其盛京省北部に據れるものは扶餘國を建て、更に朝鮮の北部に蔓延せるものは咸鏡道に入りて沃沮となり、江原道に入りて濊貊となれり。

肅慎

貊人

扶餘沃沮濊貊

前漢の末扶餘王金蛙の子朱蒙（一に鄒牟）奇材あり、其兄弟の忌む所となり禍を恐れて東南に走り、卒本扶餘（平安道成川府或はいふ鴨綠江四に至りて西紀前三七年都を沸流水上に定め、國を高句麗と號し高を以て氏となす、其地蓋し漢の玄菟郡治高句驪縣の域内にあるを以てなり。既にして四方來り附くもの頗る多く、先づ沸流水の上流に國せる沸流國王松讓を降し、次で挹婁を斥據し、若人（平安道の東境にあらざれば咸鏡道の南境ならん）北沃沮を伐て之を滅ぼし其勢强盛に赴く。初め朱蒙卒本扶餘王の女を娶りて沸流、溫祚の二王子を生みしが、後國を建つるに及んで北扶餘にありし時の子類利を立て太子となす、是に於て沸流、溫祚其容れざるを恐れ、烏干烏黎等十人と南行して別に地を求め、沸流は彌鄒忽（京畿道仁川府に移り、溫祚は慰禮城（忠淸道稷山縣）に居る、然るに沸流は彌鄒忽の土地卑濕にして安居するを得ず、溫祚は馬韓王をして其東北境の地を割かしめ國勢漸く興隆せしかば、沸流漸悲して死し其臣民皆溫祚に歸す、溫祚乃ち彌鄒忽を併せて國を百濟と號し、其系高句麗と同じきを以て扶餘を氏としぬ、時恰も西紀前一八年にして其建國高句麗より後るゝこと二十年なり。

百濟の始祖溫祚

高句麗漢邊を侵す

高句麗の興隆

高句麗は朱蒙の子瑠璃王（類利一に孺留）の時都を國内城（滿州盛京興京廳懷仁縣東）に移し、次で鮮卑を降し梁貊（平安道の南境ならん）を滅ぼし、勢威を恃んで屢漢の邊吏と戰ふ。西紀一二年王莽高句麗の兵を發して匈奴を擊たしめんとせしに、高句麗の兵皆亡げて塞を出で却て邊を侵せしかば、王莽更に嚴尤を遣はして來り擊たしめしが、瑠璃王遂に從はず却て漢の邊境を侵すと益甚しかりき。其子太武神王（一に大解朱留王）無恤に至り扶餘を擊破して其王を殺し、蓋馬（鴨綠江の西北ならん）勾茶（其地詳ならず）樂浪を取りて版圖を擴張し、國勢甚だ强盛なりしが王の末年に

高句麗侮漢に服屬す

及んで、後漢の光武帝兵を遣はし海を渡りて樂浪を伐ち、其地を取りて郡縣となし薩水（平安道清川江）以南再び漢に屬するに至れり。次で閔中王解邑朱を經て慕本王解憂（一に解愛婁）立ち、暴戾にして其臣杜魯の弑する所となり、太子翊不肖にして社稷の器にあらず、國人乃ち瑠璃王の孫宮（小名於漱）を迎へ立つ、之を太祖王（或は國祖王）となす、時に西紀五三年なり。王長じて賢明内は心を政治に留めて賢良を舉げ鰥寡を問ひ人民を恤み、外は連りに兵を出して東沃沮、藻那（其地詳ならず）朱那（其地詳ならず）等を略し、また鼎、濊貊、馬韓、鮮卑と與に漢を侵して玄菟、遼東を攻め勢頗る盛なりしが、晩年政を力めず弟遂成を信任して威福を擅にせしめ、西紀一四六年遂に位を遂成に讓りぬ、次太王是なり。此間百濟は溫祚の時樂浪、挹婁等の侵寇を避けて都を漢水の南漢山（京畿道廣州）に徙し、次で使を馬韓に遣はして疆域を定め、北は浿河（黃海道平山府猪灘）に至り南は熊川（忠清道公州）に及べる地方を占領し、更に西紀九年に至り馬韓の微弱なるに乘じ襲擊して之を滅ぼし、遂に其地を併呑しぬ。溫祚王在位四十四年にして死し、多婁王已婁王を經て西紀一二八年蓋婁王立つに至るまで、百濟の事蹟は茫漠と

百濟版圖を擴張す

馬韓の滅亡

して唯内は屢、旱魃ありて飢民高句麗に流亡し、外は樂浪靺鞨の侵寇を被ふりて戰鬪息む時なく、國步頗る艱難を極めたる外傳ふるに足るものなかりき。

所謂の始祖朴赫居世

徐羅伐

是より先き辰韓の一部高墟の邑長蘇伐公の義子朴赫居世、辰韓の六部を併せて居世干と號し、國を徐羅伐といひ金城（慶尚道慶州府）に都す、居世干は王の義なり、實に西紀前五七年にして高句麗の建國に先だつこと二十年に當る。朴赫居世英明にして民を愛撫し、王妃閼英また賢行ありて善く内を輔け、俱に六部を巡撫して農桑を勸奬し國政大に治まる、會、樂浪來り侵せしも其威に服して退き、辨韓國を以て來り降り、東沃沮は王の賢なるを聞きて遙に良馬を献ずるに至れり。西紀四年朴赫居世死し子南解立ちて次次雄或は慈充と號す、慈充は方言巫をいふ蓋し神命を奉行するものとしての敬稱ならん。次次雄死に臨んで子儒理及女婿昔脫解（一に吐解）に遺命して爾後朴昔の二姓年長を以て位を嗣がしむ、次で儒理立ちて尼師今と號す尼師今は齒理の義なり、蓋し聖智の人は齒多しといへる傳說により稱せるならん、是より後

朴氏と昔氏

實聖王に至るまで十六代の君主悉く皆尼師今と稱しぬ。儒理王意を內治に傾け、國內を巡りて窮民を賑恤し、六部の名を改めて姓を賜ひ、官制を定め四隣を歸復せしむ、而して王もまた遺命して位を昔脫解に讓り昔氏始めて大統を承く、實に西紀五七年なり。脫解既に立ちて百濟の來侵を却け、西紀六五年に至り國號を雞林と改む、雞林の稱此に起る。其子婆娑嗣立して精を勵まし治を圖りしかば國勢大に興隆し、百濟は恐れて和を請ひ悉督（江原道三陟府）押督（慶尙道山淸）伽耶（慶尙道金海府）の諸國皆服屬するに至れり。次て其子祇摩（一に祇味）を經て、西紀一三四年儒理の子逸聖立つに及んで朴氏の統復興る、而して王は心を政治に用ゐて專ら先王の遺志を行ひ國本益〻鞏固となれり。

雞林

高句麗の內政

高句麗は次大王遂成既に立ちて右輔高福章及太祖王の子莫勤を殺し、兇逆を極めて民心を失ひ、西紀一六五年遂に明臨答夫の弑する所となり、左輔菸支留群臣と議して王弟伯固の年七十七なるを迎へ立て新大王となし、左右輔を改めて國相といひ答夫を以て之に任じぬ。西紀一七九年新大王死し、子故國川王男武立ち處士乙巴素を擧げて國相となし、宗室大臣の疾む

を顧みず國政を委ねしが王は頗る英明にして民を愛し賑貸の法を設けて窮民を救へり、賑貸とは每歲三月より七月の間官穀を出して家口の多少に從ひ民に貸し冬に至りて之を還さしむるをいふ。然るに西紀一九七年王死するや王后于氏秘して喪を發せず王弟發岐を立てんとせしも發岐聽かず、乃ち其弟延優を迎へ遺詔を矯めて位を嗣がしむ山上王是なり。是に於て發岐援を遼東の太守公孫度に請ひ延優を討ちしも克たずして死し、延優遂に于氏を立て王后となし淫虐を擅にせり。

高句麗の內訌

高句麗漢に入寇す

公孫氏の威海東に振ふ

是より先き高句麗は數〻漢を侵して反服常無く、或は遼東、安平に寇して帶方の令を殺し、或は樂浪を攻めて太守の妻子を掠めしかば、西紀一六九年（後漢靈帝建寧二年）玄菟の太守耿臨討て之を破り、遂に和を請はしめて漸く侵寇を止めしが、既にして漢室の勢威全く地に墜ちて海內亂るゝや、遼東の太守公孫度頻りに遼東附近の諸郡を併せ、次て其子康に至り樂浪の南部を割きて帶方郡（黃海京畿二道）となし、其郡治を漢江の江口帶方縣に置きて勢大に海內に振ひ、高句麗、百濟、新羅の諸國皆公孫氏の威に靡くに至りしが、後幾許ならず公孫氏

高句麗と魏

は魏の滅ぼす所となり、玄菟樂浪帶方の三郡皆魏の版圖に入るに及び、高句麗復魏と衝突して遂に其兵を受くるに至れり。初め高句麗は山上王西紀二二七年を以て死し、其子東川王憂位居（初名郊彌）立ちて魏と親しみ、吳の使を斬りて首を魏に送りしが、後幾許ならず約に背きて數々魏に入寇せしかば、西紀二四六年（魏齊王芳正始七年）幽州の刺史毋丘儉諸軍を督して之を擊破し遂に丸都城を屠り、明年復之を擊て東川王を沃沮に走らせ、更に玄菟の太守王頎を遣はして之を追はしめ、沃沮を過ぎ挹婁の南界に至りて還る、東川王乃ち遁れて沃沮に奔り、魏軍の退くや歸り平壤に築きて之に都し、再び樂浪帶方を畧して國勢を恢復せり。

毋丘儉高句麗を擊破す

新羅の興隆

此間雞林は逸聖の子阿達羅西紀一八四年に死し、嗣無きを以て國人脫解の孫伐休を立て昔氏復興し、次て奈解（伐休の二子伊買の子）を經て助賁（伐休の長子骨正の長子）に至り、甘文（慶尙道聞韻縣）を擊破し骨伐（慶尙道永川郡）の主を降して悉く其地を併せ、其弟沾解は沙梁伐（慶尙道尙州）を滅ぼせしが嗣無くして死し、國人助賁の婿にして金閼智の裔孫なる金味鄒を立つ、是に至りて金氏始めて位を嗣ぐ、實に西紀二六

金氏新羅に君臨す

一年なり。

三國の形勢概評

是を要するに西紀一世紀より三世紀に至る海東の形勢は三國共に草創に屬して各、其國家內部の建設に忙はしく、唯高句麗の漢魏と衝突せるに止まり、隨て東洋史上の活動を見る能はざりしが、兩晉南北朝の際に至りては三國の勢共に隆盛に赴き、互に相衝突して遂に支那及日本と關係を生じ、海東の形勢全く一變するに至れり。

第二十五章　西晉の盛衰　八王の亂

晉武の初政と宗室の分封

晉武の初政と宗室の分封——武帝の晚年——楊駿の專權——惠帝——賈后楊氏を倒す——賈后の淫虐——趙王倫賈后を殺す——八王の亂興る——趙王倫の誅滅——齊王冏捕殺せらる——長沙王乂と河間王顒及齊都王穎——東海王越齊都王穎を伐つ——八王の亂始めて平ぐ——清談流行の源因——竹林の七賢——晉室傾倒の源因

初め晉の武帝位に洛陽に即くや、曹魏の衰亡に鑒み大に宗室を分封して帝室孤立の弊を除きしも、是より諸王の威望漸く重く、爲めに晉室傾倒の基

武帝の晩年

楊駿の弄權

を開きし、が即位の初は江南に尙ほ吳國ありしを以て鋭意治を謀り、諫官を置き律令を撰び纖緯の學を禁じ、親ら籍田に耕す等頗る見るべきものあり、吳を滅ぼすに及んで意驕り氣充ち、また政事を顧みず、奢侈を好み聲色に耽り、國內婦女の嫁娶を禁じて良家の美女五千餘を撰んで入て侍せしめ、また吳の妓姬五千人を容れ、自ら羊車に乘りて其行く所を恣にし至れば便ち宴寢す、故に宮人競うて竹葉を以て戶に挿み鹽汁を地に灑ぎて帝の車を引くに至る、是れ羊の竹葉を嗜み鹽を喜ぶを以てなり。加之皇后の父楊駿專ら事を用ゐて弟珧、濟等と專橫を極め勢內外を傾く、時人之を三楊と稱して忌避し、舊臣多く疎退せられしかば山濤數、規諷する所ありしも、帝知て之を改むること能はず、また州郡の兵を撤して武備遂に虛し。時に太子の舅賈充もまた荀勗馮紞と共に姦を事とし、文學才識ありて名望一時を壓せる張華を譖して幽州に出し、德望才識ある齊王攸を劾して靑州に貶謫しぬ。此のごとく時勢日に非なるに際し、帝は荒淫病をなして政治を知らず、楊駿益〻權を弄して諸王を忌み、宣帝の子汝南王亮を豫州に、皇子南陽王柬を關中に、楚

惠帝

賈后楊氏を倒す

賈后の淫虐

趙王倫賈后を殺す

王瑋を荊州に、淮南王允を揚江二州の軍事都督として外に出し、また皇子乂を長沙王に、穎を成都王に、晏を吳王に、熾を豫章王に、演を代王に、遹を廣陵王となして、京師を退けぬ。已にして武帝病革まりて西紀二八九年（晉武帝太熙元年）太に死するや、楊駿太尉となり楊后と詔を矯めて汝南王亮を國に就かしめ大に權柄を振はんとす、然るに太子立ちて惠帝となるに及んで皇后賈氏險惡にして妬忌なり、楊氏の權勢を嫉みて誣ふるに謀反を以てし、楊駿を殺し楊太后を廢して庶人となし、汝南王亮を徵して太宰となし、太保衞瓘と共に政に參せしむ。亮衆論に媚び、楊駿を誅せしものの功を賞する千八十一人に及び、頗る權勢を弄す。是に於て楚王瑋賈后に譖して亮及衞瓘を殺せしに賈后は瑋の專權を恐れてまた之を殺し、賈模、張華、裴頠を任用して樞機を掌らしめ、廢太后楊氏を弑し太子遹を廢して之を殺し、淫虐日に甚しく朝野之を恨む。

會、征西大將軍趙王倫、京師にあり、機を見て其臣孫秀と謀り詔を矯めて兵を發し、宮中に闖入して賈后を廢し、司空張華、僕射裴頠と共に之を殺して遂

八王の亂興る

趙王倫の誅滅

齊王冏捕殺せらる

長沙王乂と河間王顒及齊都王穎

に其三族を夷し、自ら都督中外諸軍事相國となり、文武官數千人を封じ廢太子遹の位號を復す。淮南王允、倫の異志あるを疑ひ兵を起して討ちしも敗死し、倫は遂に九錫を加へ帝に迫て位を奪ひ帝を金墉城に遷し皇太孫臧を殺す、時に西紀三〇一年（晉惠帝永寧元年）なり。是より先き齊王冏は賈后の廢殺に力ありしも、賞望に協はず常に怏々たりしが、是に至りて成都王穎及河間王顒等と兵を起して倫を討つ、倫遂に敗れて誅に伏し帝迎へられて京師に還りしが、冏功によりて大司馬となり政を輔け、甲士數十萬を率ゐて洛陽に入るに及び威權頗る盛なり、尋で太子太師となり驕奢擅權中外望を失ふ。時に河間王顒太尉となりて鎮に還りしが、長沙王乂に檄して帝を奉じて兵を擧げしめ、冏を捕へて之を殺し、鄴都に就きて一々指揮を成都王穎に仰ぐ、穎また功を恃みて驕奢自ら帝位を望み、顒は穎を擁立して己れ相たらんと欲するの意あり、乂が內にあるを惡みて共に謀り、西紀三〇二年（晉惠帝永寧二年）兵を起して反す、乂乃ち帝を奉じて穎等を拒ぎ洛陽の東建春門に擊破せしが、顒の將張方の襲ふ所となりて敗れ、雍州の刺史劉沈に詔して救を求めしに、東

東海王越齊都王穎を伐つ

八王の亂始めて平ぐ

海王越事の成らざるを察し、却て和平を謀り張方に命じて乂を殺さしめしかば、穎京師に入りて丞相となり一旦鄴都に歸りしが、尋で立て皇太弟となり、顒は太宰となり內亂暫く收まる、時に西紀三〇四年（晉惠帝永興元年）なり。既にして穎僭侈甚しく專ら嬖幸に委任せしかば、東海王越之を憂へ帝を奉じて穎を討ちしが、却て蕩陰（河南彰德府蕩陰縣）に敗れて國に奔り、帝迎へられて鄴都に入る。是に於て穎は東安王繇を忌殺し琅邪王睿を追ひしが、幽州の都督王浚及幷州刺史東嬴公騰兵を起して鮮卑、烏桓と共に穎を討つに及んで、穎大敗して帝を奉じて京師に還り鄴都は大に暴掠を被ふれり。時に顒は其將張方をして帝及穎を長安に迎へしめ、穎を廢して豫章王熾を皇太弟となし政權を弄せしが、東海王越また起りて范陽王虓と顒を討じ、帝を長安に迎へて洛陽に歸り、自ら太傅となり范陽王虓を司空となして政を執り鄴都に鎮す。尋て穎及顒皆殺さるゝに及んで紛亂始めて平らぐ、時に西紀三〇四年なり、亂起りてより是に至るまで十六年諸王の事に與るもの前後八人、故に之を八王の亂といふ、是に於て晉の藩屏遂に空し。惠帝在位十七年西紀三〇六

年晉惠帝光熙元年毒に中て死し、太弟爀位に即く之を孝懐帝となす。

清談流行の源因

此時に當りて清談の風盛に流行して士大夫皆之に傾くに至る、蓋し漢末外戚、宦官の專權より經術衰微に傾き、魏に及んで文章詞賦浮華を尚ぶに至りし反動と、世の爭亂に乘じて身を立て功を成すに容易なる時代にありて、俗世の秩序貴賤を蔑視するの氣風盛なるに至りし影響と、更に佛教東流して人世觀に別天地を開けるとによりて、益〻黄老無爲の道を欣慕し、高踏勇退山林に呼號し、酔裸放談昏睡放縱を悦ぶに至りしなり。

竹林の七賢

嵇康、阮籍、阮咸、山濤、向秀、王戎、劉伶の徒は竹林の七賢と稱して聲名最も高く、何晏、王衍、王澄、樂廣、畢卓等また清談を善くせり。嵇康は文辭を善くして老莊の學に通ぜしが、王戎は惠帝の朝に立ちて匡救する所なく時と浮沈し貪吝なり、畢卓のごときは身吏部郎となりて夜比舍の甕間に忍び、盜飲して捕へられ任放を衒ふに至り、樂廣之を聞きて名教中自ら樂地あり、何んぞ必しも乃ち爾ると笑へりといふ、以て其弊害の一斑を察すべし。此のごとく晉の宗室は互に爭亂を事とし、士大夫は清談に耽りて國家の秩序の紊亂せるも殆んど之を顧みるものなく、加ふるに惠帝は昏愚にして之を匡正することを知らず、中國爲めに動搖せるの時に當り、漢魏以來中國に雜居せる匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の五胡は此機に乘じて內地に跋扈し、遂に晉室南渡の止むを得ざるに至れり。

第二十六章　南匈奴鮮卑氐諸族の興起　西晉の滅亡

南匈奴の內訌—單于於扶羅—曹操匈奴を五部に分つ—單于姓を劉氏と稱す—劉淵—劉淵漢王と稱す—劉聰と劉曜—羯人石勒—氐—李氏興る—楊氏仇池に據る—李特李流成都を攻む—李雄國を成と號す—鮮卑諸部の勃興—慕容部の興起—宇文部興る—慕容廆鮮卑大單于と稱す—拓跋部の興起—宋頭部强盛に赴く—晉宋頭部の勢力を殺ぐ—宋頭部衰ふ—拓跋氏漸く盛なり—晉懐帝—劉淵帝と稱す—劉聰の簒立—劉琨拓跋氏と漠を圖る—石勒晉に逼まる—洛陽陷る—石勒襄國に據る—懐帝害に遭ふ—愍帝—長安陷り愍帝害に遭ふ—四晉亡ぶ—琅琊王睿晉統を紹ぐ

南匈奴の内訌

南匈奴は單于車兒の孫呼徵に至り西紀一七九年（後漢靈帝光和二年）漢の中郎將張修に殺され、右賢王羌渠立ちて單于となりしが、西紀一八八年（後漢靈帝中平五年）匈奴の右部醯落十餘萬人反して單于を攻殺せしかば、子右賢王於扶羅立ちしに國人其父を殺せるもの遂に畔きて共に須卜骨都侯を立て單于となす。是

單于於扶羅

に於て於扶羅漢廷に詣りて自ら之を訟へんとし、會〻靈帝死して四方大に亂れたるに乘じ、數百騎を率ゐて白波の賊と河内諸郡に寇せしも、鈔掠利なく兵却つて挫傷し遂に河東に止まる、此間南庭は須卜骨都侯死して嗣なく遂に其位を虛うするに至れり。西紀一九五年（後漢獻帝興平二年）於扶羅死して弟呼厨泉立ちて平陽（山西省平陽府）に居り、右賢王去卑を遣はして漢に入衞せしめ、次で西紀二一六年に至り呼厨泉親ら入朝するや、魏王曹操之を鄴に留め去卑をして國を監せしめ、また其衆の内地にありて必らず寇をなすを慮り分ちて左、右、中、南、北の五部となし、各〻其貴人を立て帥となし漢人を選び司馬となして之を監督せしが、幾許ならず帥を改めて都尉としぬ。

曹操匈奴を五部に分つ

單于姓を劉氏と稱す

是に於て匈奴は山西の北部に雜居して部族益〻滋漫し、且つ其先漢室の姻

劉淵

親たるを以て姓劉氏を冒せり。時に單于於扶羅の子左賢王劉豹左部の帥となり、太原（山西太原府）の茲氏（山西太原府）に居りて部屬最も彊く、其子淵幼にして儁異博く經史に通じ、長じて容貌魁偉膂力人に過ぎ、また弓馬に長ず、嘗て任子となりて洛陽にありしが父の死するに及んで代りて左部の帥となり、既にして北部都尉に任ぜられ、財を輕んじ施を好み豪傑を引延せしかば、五部及幽、冀の名士等往いて歸するもの多く、成都王穎の鄴に鎮するや招かれ赴きて五部の軍事を督し、次で兵を發して穎を助けんと欲し、左國城（山西汾州府永寧州）に至りしに、匈奴の大衆に推戴せられて大單于となり胡晉來り歸するもの頗る多く、遂に國を立て漢と號し自ら漢王と稱し、劉禪を追謚して孝懷皇帝といひ、漢の三祖（高祖世祖昭烈）五宗（太宗世宗顯宗中宗烈宗）を祀る、時正に西紀三〇四年なり。

劉淵漢王と稱す

劉淵と劉曜

淵の子劉聰驍勇絶倫にして經史に涉り文を善くし强弓を彎く、弱冠京師に遊びて名士と交はり民望あり、族子曜早く孤にして、淵に養はれ膽略ありて文事を善くす、是に至りて皆淵を助けて北方に雄視し頻りに大原、西河に入寇しぬ。會〻上黨武鄉の羯人に石勒あり、羯は匈奴の一部にして石勒は父祖

羯人石勒

以來其小帥たりしが、饑亂に遇うて掠賣せられ、後免れて群盜をなし勇力騎射を善くし、遂に來りて淵に投じ輔漢將軍に任ぜられて淵を助く、而して此時東萊の人王彌もまた淵に加はり、漢の勢頗る強盛なり。

氐

初め氐は岷山より巴蜀に散居せしが、漢末巴西宕渠の氐酋李氏漢中に移り、曹操の漢中に克つに及んで李氏五百餘家を將ゐて之に歸し、將軍に拜せられ、李氏興る

略陽（甘肅秦州東北）に遷り巴氐と號す、其孫李特に至りて弟庠、流と共に皆材武ありて騎射を善くし、任俠を喜び州黨多く之に附く。是より先き仇池山（甘肅階州成縣四）の氏、楊駒の孫千萬、魏に內附して百頃王に封ぜられ、其孫飛龍に至りて寖〻彊盛に赴き徒て略陽に居り、其甥令狐茂搜を以て子となす。西紀二九六年（晉惠帝元康六年）秦雍の氐羌悉く反き其帥齊萬年帝號を僭して涇陽を圍むや、令狐茂搜亂を避けて部落を帥ゐ還て仇池を保ち、自ら輔國將軍右賢王と號す、此後楊氏遂に仇池に據る。會〻關中饑ゑ略陽天水等六郡の民流移して漢川に入る、李特兄弟之を賑救して衆心を得勢漸く盛なり、既にして齊萬年敗死せしも趙王倫帝と稱して晉室亂るゝや、李特遂に廣漢（四川成都府漢州及潼川府）に據り、

李特李流成都を攻む

楊氏仇池に據る

西紀三〇一年（晉惠帝永寧元年）進んで成都を攻めて益州の刺史羅尚を破り入て之に據りしが、西紀三〇三年（晉惠帝永安二年）羅尚の破る所となりて死し、弟流代はりて其衆を領し、流の死後、特の第三子雄代はりて益州の牧と稱し、攻めて羅尚を走らし遂に成都に入り、西紀三〇四年（晉惠帝永興元年）自ら成都王と稱して法七章を約し、專ら太尉李離、太宰李國に咨事せしが、西紀三〇六年（晉惠帝光熙元年）に至り帝と稱して國を成と號せり。

李雄國を成と號す

鮮卑諸部の勃興

鮮卑は檀石槐の後大に衰へて振はざりしが魏晉の際、段、宇文、柘跋、慕容、禿髮、乞伏等の諸部其中より興り、東は遼東より西は河西に至る北邊の地方に繁殖し、慕容、柘跋最も強大なりき。初め鮮卑の莫護跋、魏の時始めて塞外より入て遼西の棘城（直隸承德府界內）の北に居り慕容部と號し、其孫涉歸に至りて遼東の北に遷り世〻中國に附き、數〻征討に從ひ功あり大單子に拜せられしが、西紀二八一年（晉武帝太康二年）遂に晉に叛きて昌黎（盛京奉天府熱河塔子溝界にあり）に寇す、後涉歸死して其弟刪簒立せしも國人刪を殺して涉歸の子廆を迎へ立つ。是より先き遼東鮮卑の別部の大人普回出獵して玉璽を得、璽文に皇帝璽とあるによりて

宇文部興る

天授となし宇文部と號し遂に以て氏となす、其俗天を宇といひ君を文といふを以てなり。慕容渉歸嘗て宇文部と隙あり、廆に至り晋に請うて宇文部を討たんとせしも許されざるを怒り、西紀二八九年（晋武帝太康十年）遼西に入寇せしが、幾許ならず降りて鮮卑都督となる。廆また遼西鮮卑の別部段氏と合はず、遂に晋に請うて徒河（盛京錦州府錦縣）の青山に遷り後更に大棘城（盛京錦州府義州）に徙り部衆を誘附して恩威并び行はれ勢大に振ひしかば、遂に西紀三〇七年（晋懐帝永嘉元年）に至り晋室の大亂に乘じ自立して鮮卑の大單于と稱しぬ。

慕容廆鮮卑大單于と稱す

拓跋部の興起

拓跋部は鮮卑の索頭部より出づ、其先は黄帝の子昌意の裔と稱す、初め索頭部は世々北荒に居て南夏と交はらず、可汗毛の時に至て始めて強大となり三十六國九十九大姓を統ぶ、可汗は君主の尊號なり。後五世にして可汗推寅に至り南大澤に遷り、また七世にして可汗鄰に至り、其兄弟七人及族人乙旃氏車惃氏に部衆を分統せしめて十族となし、鄰の子詰汾可汗の時南遷して匈奴の故地に居り、其子力微可汗の立つや復徙て定襄の盛樂（山西鶴南化城）に居り部衆浸〻盛にして諸部を畏服す、後魏の始祖神元帝是なり。西紀二六一年（魏元帝景元二年）力微其子沙漠汗を遣はして魏に入貢し洛陽に質とせしが、晋の魏に代はるや一たび歸りて復入貢せしに幽州の刺史衛瓘上表して留めて遣らず、陰に金帛を以て諸部の大人に賂遺し沙漠汗の國に歸るに及んで之を殺さしめしかば、力微憂を以て病を發し西紀二七七年（晋武帝咸寧三年）死し、子悉禄立ちしも諸部離散して其國遂に衰ふ。其後悉禄の弟綽、沙漠汗の子弗を經て弗の叔父禄官に至り、西紀二九五年（晋惠帝元康五年）其國を分ちて三部となし、一は上谷の北濡源（濡水即ち今の潢河）の西に居りて禄官自ら之を統べ、一は代郡參合陂（山西大同府陽高縣東北邊墻外）の北に居り兄の子猗盧をして之を統べしめ、一は定襄の盛樂故城に居り猗㐫の弟猗盧をして之を統べしむ。時に代人衛操從子雄及同郡の箕澹と往て拓跋氏に依り、猗㐫、猗盧に說きて晋人を招納せしむ、猗㐫乃ち任ずるに國事を以てし、次で十餘國を降附し漠を度り北巡して西方の諸部三十餘國を降附し、勢漸く盛にして拓跋氏と號す、拓跋は土君の義なり。

晋索頭部の勢力を殺ぐ

索頭部衰ふ

拓跋氏漸く盛なり

晋懐帝

晋は孝懐帝讓を受けて西紀三〇七年（晋懐帝永嘉元年）位に即き、太傅東海王越を

出して許昌に鎮せしめ、親ら大政を總覽し、南陽王模を秦雍等州軍務の都督に、瑯琊王睿を安東將軍都督揚州諸軍事となして建業に鎮せしめ、王衍を司徒となし、其の弟王澄を荆州都督に、王敦を曹州刺史に任じて頗る治政に勞する所ありしも、國運已に傾きて恢復の望全く絶え遂に南渡の已むを得ざるに至れり。西紀三〇八年（晉懐帝永嘉二年）漢主劉淵皇帝と稱して蒲子（山西溫縣州蒲縣）に都し大赦改元して人心を收め、翌年更に平陽（山西平陽府）に遷り、劉聰、劉曜、石勒、王彌等を遣はして屢々晉の内郡に入寇す。然かるに西紀三一〇年（晉懐帝永嘉四年）漢帝劉淵死し、太子和位を襲ぎしも性猜忌にして讒を信じ、劉聰の威名を嫉みて之を殺さんと欲す、聰乃ち和を弑して北海王乂の勸によりて代はり立ち、淵に謚して光文帝といひ廟を高祖と號す。是より先き西紀二七一年（晉武帝泰始七年）南匈奴の左賢王劉猛叛きて塞を出で、翌年并州に入寇せしも左部將の殺す所となり、劉虎代はつて其衆を領し新興（山西忻州）に居り、鐵弗氏と號し白部鮮卑と漢に附く、會、益州の刺史劉琨之を討たんと謀り兵を拓跋猗盧に請ふ、猗盧乃ち其弟弗の子鬱律をして之を助けしめ遂に劉虎及白部を破りて

劉淵帝と稱す

劉聰の簒立

大單于代公となり、次て部落萬餘家を帥ゐて雲中より雁門に入り陘北（山西代州句注山北）の地を得て勢益〻盛なり、是に於て劉琨使を遣はして太傅越に說き共に兵を出して劉聰石勒を討たんと請ひしも越許さず、反つて使を發し羽檄を以て四方の兵を徵し入援せしめしも卒に至るものなく、劉琨もまた猗盧の兵を謝して國に返へせり。既にして漢の并州刺史石勒大舉して襄陽を攻む、太傅越自ら兵を率ゐて之を拒ぎしも、越の專權を惡むもの多く、兗州の刺史苟晞檄を諸州に移して越の罪を鳴らし密詔を受けて之を謀るに至り、爲めに能く石勒に當ること能はず、西紀三一一年（晉懐帝永嘉五年）三月越憂憤疾を得て死するや縣王に追貶せられ、苟晞代はりて大將軍となり青、徐、兗、豫、荆、揚諸軍事を都督しぬ。會、石勒連りに晉軍を破りて苦縣（河南鹿邑縣）に至り、晉の將士十萬餘人を射殺し、太尉王衍等を執へて之を殺し、また越の柩を劈き尸を焚きて天下を亂るの罪を責め、晉の宗室四十八王を擒にす。是に於て苟晞大に驚き都を河南の倉垣（開封府祥符縣）に徙さんことを請ひしが、洛陽窮困人相食み盜掠絶えず車輿の行幸に資するなく、逡巡の間、漢將呼延晏兵二万七千を

劉琨拓跋氏と漢を圍る

石勒晉に迫まる

洛陽陷る

率ゐて來り寇し、劉曜、王彌、石勒また來り會し直に洛陽を陷る、懐帝長安に走らんとし執へられて平陽に送られ、士民三萬餘人悉く屠られ、諸陵は發かれ宮廟は燒かる。然るに劉曜、王彌隙を生じて各、洛陽を引去り、苟晞は豫章王端を奉じ行臺を蒙城（安徽亳州府蒙城縣）に建て、苟藩は秦王業を奉じて許昌に遷る。已にして石勒蒙城を陷れ、端及苟晞を執へしが、馮翊の太守索綝、劉曜の軍を黄邱（陝西四安府涇陽縣）に破りて秦王業を雍城（河南許州雍城縣）に迎へ、琅琊王睿もまた將軍紀瞻を遣して石勒を討ち却けしかば、石勒兵を引て襄國（直隸順德府沙台縣）に據り、冀州の牧と號して、幽、并を圖り、從子石虎をして鄴に據らしむ。時に賈疋等は長安を掃蕩し秦王業を迎へ入れて皇太子となし、行臺を建て宗廟社稷を營み漸く晉室の傾運を支へしが、會、漢王劉聰懐帝を平陽に殺せしかば太子業位に長安に即く、是を孝愍帝となす、時に三一三年（晉愍帝建興元年）なり。帝は建興と改元し琅琊王睿を左丞相となし、南陽王保を右丞相となし、また梁芳を司徒に、麴允、索綝を僕射となし軍國の事を委ねて僅に恢復を計る已にして劉曜長安に入寇して前後麴允、索綝の擊破する所となりしが、西紀三一六年（晉愍帝建興二年）に至り大舉して復長安に逼るに及び、麴允、索綝力守せしも食盡きて如何ともする能はず、愍帝遂に羊車肉袒して漢軍に降り懐安侯に封ぜられしが後害に遭ひ、允は自殺し綝は斬られ西晉遂に亡ぶ、武帝より四世五十二年なり。時に琅琊王睿建康にあり、長安陷ると聞き位に即きて遙に晉統を紹ぐ中宗元皇帝是なり、其江北の夷狄に沒して僅に江東を保ちしを以て史家は之を東晉と稱す。

石勒襄國に據る

懐帝害に遭ふ

愍帝

長安陷り愍帝害に遭ふ

西晉亡ぶ

琅琊王睿晉統を紹ぐ

漢の分裂

第二十七章　江北の形勢　兩趙の興亡

慕容拓跋李成の盛衰

漢の分裂——劉曜帝と稱す——石勒劉曜と絶つ——前後趙の對抗——張氏興る——劉曜張茂を降す——石虎江南を侵す——兩趙の衝突——前趙亡ぶ——蒲洪姚弋仲興る——石勒漢の舊土を併す——石勒の治績——石虎趙を簒ふ——趙衰ふ——慕容氏の形勢——慕容皝——拓跋氏の形勢——鬱律——什翼犍祖業を恢復す——拓跋氏の版圖——成の內訌——李雄國號を漢と改む

漢主劉聰已に西晉を滅ぼして悉く河北の地を據有して勢甚だ強盛なり

しも、讒を信じて太弟乂を殺し子粲を太子とせしより、此に紛亂の基を開きぬ。西紀三一八年（晉元帝大興元年）劉聰死して太子粲立ち遊宴を事として政事を顧みず、太后の父靳準之を弑して自ら漢天王と稱し、劉氏の男女少長となく悉く之を斬殺するや、石勒兵五万を率ゐ準を討じて襄陵（山西平陽府襄陵縣）に據り河北大に亂る。時に劉曜長安にありて之を聞き、赤壁（河の名山西蒲州河津縣にあり）に至り自立して帝位に即き、石勒を大司馬として九錫を加へ趙公となす、石勒乃ち準を攻めて之を斬り、羌羯十餘万落の降附を得て勢盛なり、尋で平陽を陷れて準の餘族を降し、長史王修を遣はして誼を劉曜に報ぜしに、曜讒を信じて修を殺し石勒の誼報を喜ばざりしかば、石勒大に怒り是より互に隙を生ずるに至れり。西紀三一九年（晉元帝大興二年）劉曜都を長安に遷して宗廟社稷を立て大學を興し國號を改めて趙と稱せしかば、石勒また王位に即きて國を趙と號し、農業を勸め禮樂を起し軍政を改め石虎を驃騎將軍となして諸軍事を督せしめ以て劉曜に對抗しぬ。是に於て江北分裂して二國となり、洛陽を界として劉曜は關中に據り石勒は河北を保ち、各〻國號を趙と名づけたるを以て史家は劉曜を前趙、石勒を後趙と稱して之を區別せり。石勒は性明敏にして法を用ゐる嚴峻なり、即位の初め九品を選定し、公卿及州郡に命じて歳ごとに秀才、孝廉、賢良直言、武勇の士各〻一人を擧げしめ以て政を輔け、九流を定め孝秀、試經の制を立て、また律令を制定し胡を號して國人となし其漫に中國の士民を陵侮するを禁じ、外は連りに兵を出して山東を圖り、また常に前趙の疊隙を覗ふ。

劉曜帝と稱す

石勒劉曜と絶つ

前後趙の對抗

是より先き涼州の刺史張軌晉室の多難なるに乘じて陰に河西を保據するの志あり、州境の盜賊と鮮卑の侵寇とを擊破して威西土に著はれしも、常に使を晉室に絶たず西平公に封ぜられ、其子寔、茂相次ぎて州衆を領し勢頗る盛大なりしが、西紀三二三年（晉明帝大寧元年）趙主劉曜隴上より西涼州を擊つに及んで、張茂力屈して使を遣はし藩を稱せしかば曜乃ち茂を太師に拜し涼王に封ぜり、翌年茂死して世子駿（寔の嗣ぎ、また涼州の牧涼王となり此に前涼の基を掬めぬ。此時に當り後趙の石虎は幽、冀、并州を陷れて幽州の刺史段匹磾を殺し、次で厲、江南を侵し遂に壽春（安徽鳳陽府壽州）を攻めて歴陽の内史蘇

張氏興る

劉曜張茂を降す

石虎江南を侵す

兩趙の衝突

峻の擊破する所となりしが、西紀三二八年（晉成帝成和三年）に至り石虎更に西前趙の河東を擊ち蒲坂を攻むるに及んで、兩趙の間始めて戰を開くに至れり。劉曜乃ち兵を出して石虎を破り遂に石生を金墉に攻め襄國震駭せしが、石勒自ら洛陽を救はんと欲し、程遐等の諫むるを叱して內外に戒嚴の命を下し、石堪を滎陽に石虎を石門に據らしめ、自ら步騎四萬を統べ河を渡りて成皐に至り、曜の備なきに乘じて之を衝き、大に洛陽に戰て前趙の軍十餘萬を破り、曜が酒に醉うて馬より墜ちたるを捕へて之を殺し、翌年關中を平げて長安を取り、尋で石虎に命じて上邽を拔かしめ、趙の太子熙を捕殺して前趙を滅ぼし、更に兵を秦隴に進む。

前趙亡ぶ

蒲洪姚弋仲興る

初め略陽臨渭の氐酋蒲洪驍勇にして權略に富み、群氐を畏服せしめて自ら略陽公と稱し、南安赤亭（甘肅鞏昌府隴西縣）の羌酋姚弋仲もまた扶風公と稱し、皆晉室の動亂に乘じて懷帝の世に崛起せしが、是に至りて共に石虎に降りしかば秦隴悉く平ぎて漢の舊土皆石氏に歸し、劉氏は劉淵以後五主二十一年にして全滅せり。

石勒漢の舊土を併す

石勒乃ち西紀三三〇年（晉成帝成和五年）を以て大趙天王と稱し妃劉氏を立て皇后となし、世子弘を太子となし、子宏を大單于となし、石虎を太尉に拜し中山王に封ぜしが、石虎は私に其賞の薄きを怨み遂に後趙亡滅の因を孕みぬ。

石勒の治績

石勒尋で皇帝と稱し、自ら材を後漢光武に比し、磊々落々日月の皎然たるを慕ひ字を解せずと雖も人をして書を讀ましめて其意を了し得失を論ぜりといふ。西紀三三一年（晉成帝成和六年）石勒命じて賢良方正を擧げ明堂辟雍靈臺を起して力を政教に盡くし、西紀三三三年（晉成帝成和八年）使を發して好を東晉に修めしに成帝命じて其幣を焚く、而かも趙は國治まり民服して境域頗る無事なりしが、此歲石勒病んで死し太子弘嗣ぎて立ち、石虎丞相となりて權を弄するを以て位を讓らんとせしに、石虎遂に弘を廢して之を弑し、自ら居攝天王と稱し都を鄴に遷す。

石虎趙を簒ふ

初め石勒印度の僧佛圖澄（Buddhocbinge）を敬信して佛事を盛興し、また軍國の事を詢りしが、石虎もまた之に謹事して襄國に大武殿を、鄴に東西宮を築きて魏の明帝の作りし金人銅駝を移し、豪奢を極めて收斂を事とし、連りに兵役を起して百姓の疾苦を顧みず、尋で大趙天王と稱し遂に慕容氏を攻めて虛歲なく、遂に國勢を消耗するに至れり。

趙衰ふ

慕容氏の形勢

是より先き慕容氏は慕容廆士民の心を得て歸服するもの多く、平州の刺史崔毖之を嫉み陰に高句麗、段氏、宇文氏に說きて共に廆を攻めしめしに、廆大に之を破りて遂に遼東を取り、西紀三二〇年（晉元帝大興三年）使を遣はして建康に至りしかば元帝封じて平州の牧遼東公となせしが、廆は石勒と同年に死し子皝嗣で立ちて燕王と稱し雄才大略あり、先づ趙に使聘して藩と稱し、西紀三三八年（晉成帝咸康四年）趙の援軍を得て段氏を破り令支（直隸永平府遷安縣）を取りしが、趙主石虎が辭を設けて來り討つに及び大に之を棘城に破り、西紀三四〇年（晉成帝咸康六年）再び趙軍を擊破し、長驅して蠕蠕塞（龍城の西）より高陽（直隸保定府高陽縣）に至り威を示して還り、西紀三四二年（晉成帝咸康八年）都を龍城（內蒙古熱河東北）に遷して宗廟宮闕を建て、尋で兵を二道に分ちて高句麗を伐ち、其都城丸都を屠りて故國原王釗を虜にし、二年の後更に宇文氏を襲て其都城（遼西棗川）を陷れ、其主逸頭歸を殺して遂に宇文氏を滅ぼし、また盛京の東北に進みて扶餘族を攻め伏し慕容氏の名大に揚がれり。

慕容皝

拓跋氏の形勢

此間拓跋氏は猗盧已に幷州の刺史劉琨と兄弟の約を結んで勢頗る強く、次で劉琨の爲めに其子六修と漢の劉曜を晉陽に擊破せし功を以て、晉の愍帝に封せられて代王となり代、常山二郡を領せしが、西紀三一六年六修の爲めに弑せられ、猗㐫の子普根六修を斬りて國內大に亂れ、其部落殆んど劉琨に歸し琨の勢復振ひしが、幾許ならずして石勒に破られて薊に奔れり。時に代は普根死して猗盧の姪鬱律嗣ぎ、匈奴の右部を擊ちて劉虎を走らし遂に其部落を降し、更に西は烏孫の故地を取り東は勿吉（烏古塔）以西を併せて士馬精銳北方に雄視せり。然るに鬱律の死後賀傉、紇那を經て翳槐に至り內難相踵ぎ部落離散せしが、鬱律の少子什翼犍立つに及んで再び祖業を恢復しぬ。什翼犍初め趙の石虎に質たりしが、西紀三三八年翳槐死に臨んで諸大人に命じて之を迎へ立つ、什翼犍雄勇智畧あり能く舊業を修復し始めて百官を置きて衆務を分掌せしめ、號令明白にして、政事淸簡百姓之に安んず。是に於て什翼犍婚を燕に求めて慕容皝の妹を娶り、勢威更に振ひて東は濊貉より西は破落那（Forghana）（今のコーカンド（Kokhand）の地）に及び、南は陰山より北は沙漠を盡して率ね皆其版圖に入り、衆數十萬人を擁して北方の一大强國となれ

什翼犍祖業を恢復す

拓跋氏の版圖

成の内訌

李雄國號を漢と改む

り。

初め成主李雄常に其兄蕩の奇材ありて早世せるを悼み、且つ蕩の子班の仁孝にして學を好むを愛し群臣の諫に聽かず、諸子を措て班を太子とせしが、西紀三三四年（晉成帝咸和九年）雄死して班立つや、雄の子越其弟期と班を殯宮に弑して期を立つ、是より紀綱漸く紊れ雄の業始めて衰ふ。既にして期驕虐日に甚しく誅殺する所多きを以て大臣皆自ら安ぜず、會、期其叔父壽の威名を忌み出して涪に屯せしめしに、壽其免れざるを懼れ遂に成都を襲うて期を幽死せしめ、自立して帝と稱し國號を改めて漢といふ、時に西紀三三八年なり。既にして壽もまた驕奢に耽りて大に宮室を修め器玩を弄び、士民賦役に疲れ怨嗟道に滿ちて亂を思ふもの衆し。

第二十八章　東晉の初政　王敦蘇峻の亂

東晉——元帝——祖逖北伐を企圖す——王氏顯要に列す——王敦の專横——元帝王敦に備ふ——王敦反す——官軍敗る——明帝——王敦再び反す——成帝——庾亮蘇峻を激す——蘇峻反す——陶侃溫嶠と蘇峻を討つ——蘇峻の亂平ぐ

東晉

元帝

祖逖北伐を企圖す

始め琅邪王睿揚州の諸軍事を督して建業にあり、王導を謀主となし事々に諮謀して卞壼、庾亮、刁協等百餘人の賢良を擧げて掾屬となし、江東の民心を得しかば桓彝、周顗等の名士また亂を避けて來り仕ふるに至れり。既にして睿左丞相となり晉室の聲援をなせしも、兵事に意なくして愍帝が征伐の命令に應ぜず、また洛陽の人祖逖の來りて北伐を勸むるも、逖を豫州の刺史となし僅に兵千人を給せるのみ。後長安陷り愍帝害に遭ふに及んで漸く師を示して北征の風を粧ひしが遂に出でず、群臣の勸によりて帝位に即く、中宗元皇帝是なり。元帝既に位に即きて大興と改元し、宗廟社稷を立て故の王衍の子にして王導の從兄たる王敦を大將軍となし、王導を揚州の刺史となして內政に參せしめ、刁協を僕射に、周顗を吏部尚書に、賀循を太常となし以て中興の業を捌む、時に西紀三一八年なり。

此歲祖逖譙城（河南歸德府夏邑縣北）を取りて雍丘（河南開封府杞縣）に屯し、新附を撫恤し農桑を勸課して頻りに北伐の準備をなせしが、會、東晉には王敦の內亂を惹起し、延いて蘇峻の反を生じ、遂に祖逖の志を空うせしむるに至れり。王敦もと

王氏顯要に列す

名家の胄を以て元帝の微時より仕へ、帝の位に即くや王導と共に心を盡して政を執り、帝もまた心を推して之に任ぜしが、王敦は屢征討を總べ王導は機務に與れるを以て王氏の一族悉く顯要に列し、時人王と馬と天下を共にすといへり。

王敦の專横

既にして王敦鎮東大將軍となり江、揚、荆、湘、交、廣六州の諸軍事を督するに及んで勢益盛なり、時に梁州の刺史周訪は士衆を撫納して令名ありしが、敦の異謀あるを知りて之に備ふ、祖逖また內難を預知し激憤病を發して西紀三二一年（晉元帝大興四年）死し、帝もまた戴淵を征西將軍となして合肥（安徽廬州府合肥縣）に鎮せしめ、劉隗を鎮北將軍となして淮陰を鎮せしめ、名を胡を討つに藉りて皆王敦に備ふ。

元帝王敦に備ふ

王敦反す

然るに周訪祖逖相次で死するや王敦の反形益〻現はる、帝乃ち刁協、劉隗を引き腹心となして王氏を抑損し、敦の參軍錢鳳、沈充等また頻りに敦を勸誘せしかば、西紀三二二年（晉元帝永昌元年）敦遂に兵を武昌に擧げ、名を劉隗、刁協を誅するに藉り進んで石頭城（江蘇江寧府）に至る。帝大に驚き戴淵、劉隗をして入り衞らしめ、劉隗、刁協等盡く王氏を殺さんと請ひしも許さず、王導に命じて前鋒大都督となし刁協、戴淵をして出て戰はしめしが皆大に敗る。是に於て敦敢て朝せず兵を放て劫掠せしかば、帝百官を石頭城に遣りて敦に見えしめ、大赦して敦を丞相都督中外諸軍事江州牧となす。

官軍敗る

既にして敦、戴淵を殺して武昌に歸りしが、帝は敦の專横を憂へ遂に病を爲して死し太子紹立つ、之を肅宗明帝となす、時に西紀三二二年なり。

明帝

明帝幼にして聰明長ずるに及んで仁孝、賓を好み士を禮し庾亮、溫嶠等と布衣の交をなす、王敦の石頭にあるや其勇略を忌みて之を廢せんとせしが、嶠等の衆論動かすべからざるありて敦の議を沮みしかば、漸く廢せられざるを得たり。敦遂に位を簒はんと欲し、帝に諷して己を召さしめ、姑孰（安徽太平府當塗縣南）に徙り鎮し、王導を以て司徒となし、自ら揚州牧を領し更に兄含をして江西の軍事を督せしめ、宗族を强めて帝室を孤立せしめんと謀る。是に於て帝は西紀三二四年（晉明帝太寧二年）司徒王導に大都督揚州刺史を加へ諸軍を督して敦を討たしむ、時に敦疾篤し征討の詔を聞て大に怒り、兄王含、錢鳳、鄧岳、周撫等に命じ衆を帥ゐて京師に向はしむ、帝乃ち軍を率ゐて親征し之を越城（江蘇江寧府）寶門外（越臺）に破る。

王敦再び反す

然るに幾許ならずして敦死し餘黨悉く平定せ

成帝

庾亮蘇峻を激す

蘇峻反す

陶侃温嶠と蘇峻を討つ

しが、帝もまた在位僅に三年にして西紀三二五年（晉明帝太寧三年）死し、太子衍立つ之を成帝となす。

成帝即位の初め王導、庾亮、卞壼と遺詔を受けて帝を輔導せしが導は性寛和にして衆心を得、亮は法に任して物を裁し頗る人望を失へり。時に歴陽の内史蘇峻王敦を討て功あり、威望大に著はるゝに及んで漸く朝廷を輕んじ、竊に禍心を藏し亡命を招納せしかば庾亮之を覺り、温嶠を以て江州軍事を都督せしめ王舒を以て會稽内史となし竊に之に備へ、更に建請して峻を徵し大司農となして禍亂を未萌に拒がんとせしに、峻遂に命を奉ぜずして祖逖の弟祖約と結び、西紀三二七年（晉成帝咸和二年）兵を擧げて反し姑孰を陷れ晉廷震駭す。庾亮乃ち諸軍を督して之を討ちしも却て敗られ、尚書令卞壼等また戰ひて敗死するに及んで庾亮等尋陽（江西九江府德化縣）に奔り、峻の兵は臺城（江蘇江寧府上元縣北）に至り闕に亂入して府藏を掠奪し、峻自ら尚書の事を錄し、祖約を太尉となし、王導の德望あるを以て本官に居らしめ、遂に帝を石頭城に遷す。時に陶侃征西大將軍となりて武昌にあり、温嶠等と義兵を起して峻を討ち

蘇峻の亂平ぐ

しが、峻の勢益〻盛にして宣城（安徽寧國府宣城縣）を陷れ内史桓彝を殺す、既にして、侃、嶠等進んで峻を石頭城に攻め、其醉に乘じ出て戰へるを斬り餘衆を擊破して之を平ぐ。是より先き祖約壽春にありて後趙の攻むる所となりて其衆潰え歴陽に奔りしが、峻敗るゝに及んで歴陽また晉軍の拔く所となり後趙に奔り石勒に誅せらる。是に於て陶侃は太尉となり温嶠は驃騎將軍開府儀同三司となり、庾亮は出でゝ豫州の刺史となりて亂全く終を告ぐ、實に西紀三二八年（晉成帝咸和三年）なり。

第二十九章　桓温の北伐　趙燕秦の興亡

王導晉室を輔翼す——康帝——庾亮趙を伐たんと謀る——穆帝——桓温成漢を伐つ——成漢亡ぶ——趙の内訌——冉閔石氏を滅ぶ——張重華涼王と稱す——蒲洪自立す——姚弋仲蒲洪と關中を爭ふ——符健秦帝と稱す——慕容儁趙を擊つ——後趙亡ぶ——魏亡ぶ——桓温殷浩を斥く——桓温秦を伐つ——桓温姚襄を破る——符堅秦を簒ふ——燕秦晉に備ふ——成帝哀帝帝奕——桓温燕を伐て枋頭に敗る——秦燕を圍る——符堅燕を伐つ——燕亡ぶ——王猛秦の政を執る

王導晉室を輔翼す

晉は蘇峻の亂平ぎてより兵戈漸く收まり江南少康を得、加之丞相王導は簡素寡欲三世に輔相として衣帛を重ねず、倉に儲穀なく、晉室を輔翼すること多かりしが、西紀三三九年（晉成帝咸康五年）病んで死し、翌年庾亮また死するに及んで中原恢復の策終に成らず、況んや陶侃、溫嶠の名將もまた既に死して晉廷寂寞たり。

康帝

然るに西紀三四二年（晉成帝咸康八年）成帝死し二子嶧褓にあるを以て弟琅邪王岳立ちて康帝となるや、復名士の輩出を見る。庾亮の弟に翼あり、亮の死後其兵を領せしが、慷慨にして功名を喜び瑯琊の內史桓溫と交を結び、北趙を亡ぼし蜀を取り中國を恢復するを以て自ら任ず、桓溫は彝の子なり。

庾亮趙を伐たんと謀る

是より先き庾亮もまた上表して趙を伐たんことを請ひ其方策を上りしも許されざりしかば、翼は遂に使を燕主慕容皝及涼主張駿に遣はして同盟を結び、大舉して目的を遂せんとす。康帝乃ち翼を都督征討將軍となして襄陽に鎮せしめ、桓溫を前鋒都督となし、庾冰を荆江等七州の軍事都督となし、何充を揚州刺史となして政を輔けしむ。是に於て翼は夏口に進み冰は後援をなせしも帝薨て死し、西紀三四五年（晉穆帝永和元年）太子聃嗣で立ち穆帝となり

穆帝

桓溫成漢を伐つ

しが、繼嗣の爭より翼は何充と隙あり、猶豫の間翼は、西紀三四六年（晉穆帝永和二年）に病死せしかば事忽ち頓挫を來せり。然るに桓溫は英略人に過ぎ文武の才幹ありしかば、何充の爲めに薦められて都督荆梁等の州軍事となるや、將佐の諫を聽かず兵を率ゐて西成漢を討つ。漢は李壽既に死して太子勢立ち淫虐にして國事を顧みず、民心離畔せしかば、桓溫長驅して漢兵を笮橋（四川成都府西南）に破り、進で成都に入り其城內を燒き遂に李勢を降す、時に西紀三四七年（晉穆帝永和三年）なり、成漢は李特成都に據りしより是に至るまで六主四十六年にして亡ぶ。

成漢亡ぶ

桓溫乃ち勢を藉して建康に送り、漢の司空譙獻之等を引て參佐となし、賢を舉げ善を旌せしかば蜀人大に悅ぶ。桓溫成都に留まること三十日振旅して江陵に歸り、晉廷勢を封じて歸義侯となす、是より溫の勢益〻盛にして遂に北伐を企つるに至りぬ。

趙の內亂

時に趙主石虎暴虐にして士民の望を失ひ、次で太子宣を廢して少子世を立て、西紀三四九年（晉穆帝永和五年）遂に皇帝と稱せしが、其翌年に至りて死し、世立ちて其兄遵の爲めに弒せられ、遵自立して冉閔を都督中外諸軍事となし、內

冉閔石氏を滅ぶ

張重華涼王と稱す

蒲洪自立す

亂また起る。晉は此機に乘じて征討都督楮裒をして兵を率ゐて北伐せしめしが未だ克たず、已にして遼は冉閔の驍勇を嫉みて之を殺さんとし却て冉閔の爲めに弑せられ、其弟閔擁立せられしも、西紀三五〇年（晉穆帝永和六年）冉閔遂に鑒を弑し、虎の孫二十八人を殺して石氏の族を夷し、自ら皇帝の位に即き國號を大魏と稱せり。

是より先き西紀三四五年涼主張駿姑臧（甘肅涼州府）に據りて大都督大將軍假涼王と稱し、百官車服旌旗を置きて王者に擬し、其境内を三營二十二郡に分ち勢隆盛なりしが、翌年死して子張重華嗣ぎ、晉は之に涼州刺史西平公を授けしも、西紀三四九年に至り自立して王と稱す。また氐酋蒲洪は曩に後趙に降りて石勒、石虎に臣事し、功を以て雍州刺史雍秦諸州の軍事都督となり關中を鎮せしが、石閔其人傑なるを見て石遵に勸め、洪の職を褫はしめたるを怒りて、枋頭（河南衛輝府淇縣）に歸り使を遣はして晉に降りしが、既にして秦雍の流民相帥ゐて西歸し、路枋頭に由り共に洪を推して主となす。時に姚弋仲もまた蒲洪と共に劉曜石勒石虎に歷仕して西羌大都督となり潤頭（直隸冀州東强縣）に居り、後匈奴、羯、鮮卑、氐、巴、蠻の六夷の大都督に拜せられ威名また大に揚りしが、是に至りて蒲洪姚弋仲共に西關中に據らんとするの志あり、西紀三五〇年弋仲先づ發し、其子襄を遣はして洪を擊つ、洪迎へ擊て之を破り、自ら大都督大將軍大單于三秦王と稱し、讖文によりて姓を苻と改め雷弱兒、梁楞、魚遵、段陵等を將相となす。會、苻洪故の趙の將麻秋の爲めに鴆殺せられ、其子苻健麻秋を斬り洪の遺命によりて衆を領し、一旦長安に入て晉と修和せしが、西紀三五一年（晉穆帝永和七年）遂に自立して秦天王大單于の位に即き、國號を大秦と稱し翌年更に皇帝と稱す、前秦是なり。

姚弋仲蒲洪と關中を爭ふ

苻健秦帝と稱す

慕容儁趙を擊つ

此間燕は慕容皝西紀三八四年に死して子儁嗣立し、遺命によりて陽士秋之を助け國政を執る、西紀三五〇年儁其弟翰（後垂と改む）を前鋒都督となして、大舉趙を襲うて薊城を拔て之に都し衆く中州の士女を降せり。時に趙は内亂に加ふるに分裂を生じ、故の石虎の子祇また襄國に自立して帝と稱し、六夷を服從し姚弋仲其右丞相となり、苻健を以て鎮南氐將軍となす。然るに西紀三五一年趙主石祇燕主儁の援軍を得て姚弋仲の子襄と兵を合し、魏主

後趙亡ぶ

冉閔を破て鄴に走らせしも、既にして其臣劉顯の弑する所となりて後趙亡び、冉閔復勢を得るに至れり。是に於て姚弋仲晋に歸降して車騎大將軍六夷大都督に拜せられしが、西紀三五二年死し其子襄秦に破られて晋に奔り譙城（安徽亳州府）の主となる。既にして慕容儁江北を一統せんと欲し慕容恪等を遣はして魏を伐たしめ、冉閔を常山（直隸正定府）に捕へ龍城に送て之を斬り、更に慕容評を遣はして鄴を取る、魏は建國より僅に三年にして亡ぶ、次て儁帝位に即き、鄴に都して百官を置き元璽と改元す、實に西紀三五二年なり。

魏亡ぶ

桓温殷浩を斥く

是より先き晋には桓温成漢を亡ぼして征西大將軍となり、臨賀郡公に封ぜられて威名大に振ひ、在廷皆之を懼る、會稽王昱之を憂ひ殷浩の夙に盛名あるを以て延いて心服となし、共に政權に參與せしめ由て温に抗せんとせり。會趙大に亂るや、昱は浩を以て揚豫等の諸州を都督せしめ、北方を覗はしめしが、浩は却て姚襄の强盛を忌みて之を攻め、大に敗れて譙城を保す、姚襄乃ち使を遣はして燕王慕容儁に降れり。時に浩北伐連年功なく桓温も と浩と隙ありしかば、罪を論じ浩を廢して庶人となし温遂に中外の權柄を

桓温秦を伐つ

握るに至れり。西紀三五四年（晋穆帝永和十年）桓温北伐の途に上り、步騎四萬を率ゐて水陸並び進む、秦主苻健乃ち太子萇等を遣はし五萬人を帥ゐて藍田（陝西安府藍田縣）に禦ぐ、桓温擊て之を敗り進んで灞水の上に至りしに、三輔の郡縣悉く來附し庶民官軍を覩るを悅ぶ。時に北海の奇士王猛温に說くに軍の不利を以てせしも温用ゐずして、秦の丞相苻雄等と白鹿原（灞水の上にあり）に戰て大敗し、加ふるに秦人野を清めしを以て晋軍食を得ず飢困して歸りぬ。然るに桓温は北伐の心尙ほ衰へず、西紀三五四年（晋穆帝永和十年）征討大都督諸軍事となり、姚襄を伐て之を伊水に破り、洛陽に入りて諸陵を修め戍を置て還る。

桓温姚襄を破る

是に於て姚襄走て襄陵を保ち、遂に黃洛（陝西西安府同官縣）に據りて羌胡秦民を服從し竊に關中を圖りしが、秦の東海王苻堅の爲めに擊破せられて敗死し、弟姚萇其衆を率ゐて秦に降れり。

苻堅秦を襲ふ

秦は西紀三五五年（晋穆帝永和十一年）苻健死して太子生嗣立し、殘虐にして中外心を離せしが、苻雄の子東海王堅之を弑し自立して大秦天王と稱す、時に西紀三五七年（晋穆帝升平元年）なり。堅乃ち王猛の才略あるを聞き之を任用して尙書

左丞となし、異才を擧げ、農業を課し、困窮を恤み、百神を禮し、學校を立て毎月一回親しく大學に臨み、四科を立て士を採任し、才能なきものは宗室外戚と雖も用ゐず、心を傾けて治を圖りしかば、府庫充實して寇賊屏息し秦民悅服せり。

燕秦晉に備ふ

燕は慕容儁西紀三六〇年（晉穆帝升平四年）死して太子暐立ち、慕容恪、慕容垂等を用ゐて強兵の策を講じ、西紀三六三年（晉哀帝興寧元年）より許昌、汝南、陳郡及河南の諸郡を陷れて洛陽に逼まり、西紀三六五年（晉哀帝興寧三年）遂に之を陷る。二年の後慕容恪死に臨んで燕主暐に勸め、弟垂を用ゐて秦晉の覬覦に當らしめしに、後幾許ならず桓溫果して燕を伐つ。是より先き晉は穆帝西紀三六一年（晉穆帝升平五年）を以て死し、成帝の子瑯邪王丕立ちて哀帝となりしが、在位僅に三年にして死し、西紀三六六年（晉帝奕太和元年）大弟奕位に即きしも、西紀三六九年（晉帝奕太和四年）に至りて桓溫遂に燕を伐たんと請ひ、自ら步騎五万を率ゐて姑孰を發し、舳艫數百里河に浮で北に向ふ。時に燕の將王厲、鄧遐等連りに敗れ、桓溫進んで枋頭に至る、燕主暐大に恐れ和龍（即ち龍城）に奔らんとせしが、慕容垂の諫

成帝哀帝帝奕

により垂をして之を拒がしめ、使を秦に遣はして救を請ひ賂ふに虎牢以西の地を以てせしに、秦主苻堅援兵を送りしかば共に擊て大に桓溫の軍を破る。桓溫敗れ歸り罪を其將袁眞に歸し廢して庶人となせしに、眞服さず溫の罪狀を表し遂に壽春に據り叛て燕に降る。會、慕容垂襄邑より鄴に還りて威名大に振ひ、遂に太傅慕容評及太后可足渾氏の忌む處となりて將に殺されんとするを知り、奔て秦に投ず。秦主苻堅もと燕を圖るの志あり、而かも恪と垂とを恐れて未だ發せざりしに、恪既に死して今や垂の至るを以て大に喜び、垂を冠軍將軍に任じ、以て燕の虛に乘ぜんとす。時に燕は前約に背き辭を設けて虎牢以西を秦に割かず、秦主苻堅大に怒り西紀三六九年末、王猛及將軍梁成、鄧羌等に命じ步騎三萬を帥ゐて燕を伐たしめ洛陽を取る。翌年に至り王猛將軍楊安等十將と步騎六萬とを帥ゐて再び燕を伐つや、燕王暐慕容評をして三十萬の精兵を率ゐ秦軍を拒がしめしも、評は王猛を懼れて敢て進まず、猛は進て晉陽に入り、評の軍を潞川（山西潞安府潞城縣にあり）に破り遂に長驅して鄴を圍む、猛號令嚴明軍に私犯なく法簡に政寛なりしかば燕

桓溫燕を伐つて枋頭に敗る

秦燕を圖る

苻堅燕を伐つ

燕亡ぶ

王猛秦の政を執る

民其業に安ず。已にして秦主苻堅親ら精鋭十萬を帥ゐて鄴に赴き、燕主暐が龍城に奔らんとするを捕へて還る、時に評は遁れて高句麗に奔りしが高句麗之を捕へて秦に送れり。燕は慕容廆より四主八十六年にして亡ぶ、實に西紀三七〇年（晉帝奕太和五年）なり。是に於て秦主苻堅王猛をして關東の軍事を督して鄴に鎮せしめ、燕政の民に便ならざるものを變更し、農桑を勸課し窮困を賑恤し節行を旌顯せり。次て苻堅王猛を以て丞相となし、都督中外諸軍事を加へ文武兩ながら興り巨細並び關せしめ、堅は端拱爲すなく猛に委ねて疑はず、而して猛性剛明清肅賞刑必ず當る、故を以て秦國大に治まり富强敵なきに至りしが、西紀三七五年（晉孝武帝寧康三年）猛疾に寢し死に臨んで堅を戒め、己の死後晉を圖るなく、鮮卑西羌は漸く之を除き、よりて社稷を安んぜんことを以てす、鮮卑は慕容氏をいひ西羌は姚氏をいふなり、然るに猛の死後幾許ならず堅遂に猛の言を用ゐず、南征して滅亡を取るに至れり。

桓温不臣の志を著ふ

簡文帝

第三十章　晉秦の衝突と江北の分裂　魏二秦三燕四涼の興亡

桓温不臣の志を著ふ—簡文帝—孝武帝—秦の極盛—前涼亡ぶ—秦代を伐つ—代の分裂—呂光四域を伐つ—秦の版圖—謝安晉の政を執る—謝玄と謝石—苻堅南伐す—淝水の戰—秦の版圖瓦解す—乞伏氏興る—丁零—後燕—後秦—西燕—苻堅弑せらる—四燕の內訌—拓跋珪興る—後魏—呂光涼州に據る—後涼—前秦の末路—西秦—魏河南を併す—丁零亡ぶ—西燕亡ぶ—魏後燕を破る—後燕亂る—魏の道武帝—南燕—南涼—北涼—西涼—後秦の隆盛—乞伏乾歸後秦に降る—後涼亡ぶ—姚興佛教を尊信す—赫連勃勃興る—夏—後秦衰ふ

晉の桓温は枋頭の一敗より威名頓に墜ち、西紀三七一年（晉簡文帝太和六年）遂きに燕に降りし袁眞の子瑾を壽春に擊ち、秦の援軍を幷せて之を破りしが遂に枋頭の恥を雪ぐ能はず、而かも其才略を恃みて不臣の志を著へ男子芳を百世に流す能はずんば臭を萬年に遺すべしといひ、此歳冬太后褚氏に迫り帝を廢して海西公となし、會稽王昱を迎立す、簡文帝是なり。是に於て溫の威

孝武帝

勢内外に震ひ、帝が心を典籍に留め濟世の大略なきを利として、大に自己の羽翼を張りしが、帝在位僅に二年にして西紀三七二年（晉簡文帝咸安二年）死し、太子昌明立ちて孝武帝となるや、其目的を早めんと欲し、帝に迫て九錫を求めしも、幸に謝安、王坦之のあるありて、故らに其事を緩ふせしに、溫遂に疾を得て西紀三七三年（晉孝武帝寧康元年）死し、晉室幸に事無きを得たり。

秦の極盛

是より先き秦主苻堅は王猛を失ひ慟哭して天吾をして天下を平一せしむるを欲せざるか、何ぞ吾景略を奪ふの速なるやと嘆ぜしが、其雄大の機略は衰へず、晉の西鄙を擊て梁益二州を取り、勢益盛にして、内は親ら訟を聽き、儒教を崇び、老莊圖讖の學を禁じて人心を統一し、外は大に兵を練りて大業を開かんとす。此時に當り前涼の張重華已に死して其子玄靚立ち藩を秦に稱せしが、叔父天錫之を弑して自立し酒色に荒みて民心離畔す、苻堅乃ち之を征して姑臧を衝き天錫を降して悉く前涼の地を併す、實に西紀三七六年（晉孝武帝太元元年）なり、前涼は張軌より是に至るまで九主六十九年にして亡ぶ。

前涼亡ぶ

秦代を伐つ

會、代の拓跋什翼犍匈奴の劉虎の後劉衛辰が叛服常なきを怒りて之を擊ち、衛辰援を秦に求む、苻堅乃ち兵を遣して代を擊つ。是に於て什翼犍南部の大人劉庫仁をして拒がしめしに大敗し、什翼犍は病で自ら將たること能はず、遂に庶長子寔君の弑する所となり、秦兵雲中に亂入して國中の部衆潰散す、苻堅乃ち國内を二部に分ち、河東を劉庫仁に、河西を劉衛辰に屬せしめ、什翼犍の孫珪を庫仁に託し養はしむ。苻堅已に前涼を取り燕を亡ぼし代を平らげ其勢威に乘じて頻りに南伐し、襄陽を取り魏興（陝西興安府）安康縣）肝胎（安徽泗州肝胎縣）を陷れ管城（湖北安陸府鍾祥縣）敖水北）を拔き、更に將軍呂光に命じて車師鄯善を嚮導となして西域を伐たしめ、焉耆諸國を降し、龜茲を破り版圖を西方に廣めしむ。此時に當り秦は江北を一統して其領域晉に數倍し、東は高句麗、新羅より、西は于寘、龜茲に至るまで秦に朝貢するもの六十二國、苻堅意驕り氣充ち、遂に王猛の遺言を忘れ、南晉を伐ちて天下を統一せんとす。

代の分裂

呂光西域を伐つ

秦の版圖

謝安晉の政を執る

時に晉は謝安衛將軍となりて桓冲と共に政を輔け、西紀三八三年（晉孝武帝太元八年）五月冲は襄陽を攻めて之を復し秦に敵するの意を示せしかば、秦主苻堅は吾衆の鞭を投ずるも大江の流水を斷つべしと揚言して意を南伐に決す。

謝玄と謝石

是より先き謝安の兄の子謝玄は劉牢之を參軍となし撰ばれて廣陵にあり、北府の兵と稱して頗る秦兵の恐るゝ所となる、是に於て玄は前鋒都督となり、叔父なる征討大都督謝石と共に秦軍を拒ぐ、苻堅の將に發せんとするや群臣皆諫めしが、慕容垂、姚萇等固より異望あり務めて親征を勸めしかば、苻堅遂に此歳八月を以て卒六十餘萬、騎二十七萬を率ゐて長安を發し水陸齊しく進む。

苻堅南伐す

淝水の戰

晉軍僅に八萬之を淝水（安徽鳳陽府壽州東）に扼す、苻堅晉兵の部伍嚴整なるを望見して恐るゝ色あり、晉兵の流を亂りて半濟るを待ちて之を掩擊せんとして兵を退けしが、軍後に秦軍の敗を呼ぶものあり、兵退きてまた進まず遂に大に潰散す、玄等機に乘じて追擊大に之を敗る、苻堅流矢に中り慕容垂の軍に擁せられて漸く長安に還れり。

秦の版圖瓦解す

乞伏氏興る

秦軍已に敗れて叛者續々として起り秦の版圖遂に瓦解す。隴西の乞伏國仁先づ叛きて叔父步頹と隴右に據る、乞伏氏はもと鮮卑の一部にして世〻隴西に居り乞伏可汗と號す、初め國仁の父司繁秦に降りて南單于となり勇士川（甘肅蘭州府金縣）に鎮し、其死後國仁嗣ぎて秦の前將軍となり晉に入寇せしが、

丁零

秦軍敗るゝに及んで遂に叛く。會〻丁零の翟斌兵を起して洛陽を攻む、丁零初め燕に從ひ中山に居り燕亡びて秦に降る、苻堅之を新安に徙し斌を衛軍中郎に任ぜしが、是に至りて遂に叛く、時に慕容垂淝水の敗後名を鎮撫に藉りて鄴にあり、秦乃ち垂に命じて斌を討たしめしに垂遂に叛き、洛陽を救ひて斌の衆を合せ自ら燕王と稱す、後燕是なり。

後燕

是に於て故の燕主暐の弟慕容冲は平陽（山西平陽府）に興り、其兄慕容泓は華陰（陝西同州府華陰縣）に興り、姚萇もまた兵を起して北地に屯し、自ら秦王と稱し羌胡十餘萬を降す、後秦是なり。

後秦

旣にして泓は殺され、冲は秦兵を破りて西紀三八五年（晉孝武帝太元十年）阿房城（陝西安西府咸陽縣）に據りて帝と稱す、之を西燕となす。

西燕

此歳五月西燕の慕容冲長安を攻む、秦主苻堅敗れて五將山（一に武將山と云ふ陝西鳳翔府岐山縣東北にあり）に出奔し、後秦の姚萇の爲めに捕へられ新平（陝西汧州）に縊殺せらる、秦の長樂公丕乃ち晉陽に即位す。時に後燕の慕容垂は中山（直隸定州）に都し、三八六年（晉孝武帝太元十一年）を以て帝と稱し、公卿百官を置き宗廟社稷を建て民心を收めしが、西燕の慕容冲は長安にありて其將韓延の殺す所となり、段隨推されて王となりしも慕容永（故の燕の從弟）に弑せ

苻堅弑せらる

四燕の内訌

拓跋珪興る

られ、宜都王子歆立ちて鮮卑の男女四十萬口を率ゐ長安を去て東せしが、また弑せられて冲の子陋立ち、次て泓の子忠立つに及んで燕熙城（山西絳州聞喜縣）に居りしも、また弑せられ永立ちて河東王となり藩を後燕に稱せり。

是より先き河東の劉庫仁に倚りたる拓跋珪は劉庫仁死して其子顯の迫害を避け、賀蘭部に奔りて其の舅賀訥に依りしが、是に至り諸部の大人に推され、西紀三八六年を以て牛川（山西朔平府右玉縣北邊藩外）に代王の位に即き、更に國號を

後魏

魏と稱し後魏の帝祚を開きぬ。時に姚萇は長安の空虛に乘じて之を取り始めて皇帝と稱して百官を置き、乞伏國仁もまた已に單于と稱して國内に十二郡を置き勇士城（甘肅蘭州府金縣）を築て之に都し、秦の封を受けて范川王となる。初め秦の將軍呂光は龜茲を討ち其饒樂なるを見て之に留まり居らんとせしが、西僧鳩摩羅什(Kumâradjîva)の言を用ゐ、西紀三八五年東歸して姑

呂光涼州に據る

臧（甘肅涼州府武威縣）に據り、涼州を定めて三河王と稱せしが、翌年秦主苻堅の凶問を得るや軍を擧げて縞素し、遂に自ら涼州牧酒泉公と稱す、後涼是なり。曩に慕容永の東歸するや秦主苻丕の爲めに晉陽に妨げられしが、却て秦兵を襲

後涼

前秦の末路

陵に破り、長子（山西潞安府）に據りて帝と稱し、苻丕は東垣（河南河南府新安縣）に奔り、洛陽を襲はんとして晉の將軍憑該の爲めに擊殺せられしかば、丕の族子苻登位に南安（甘肅鞏昌府隴西縣）に即き、堅の神主を奉じて屢〻後秦と戰ひて克つに及んで、關西の豪傑來り附くもの多く勢復張りしか、後姚萇死して子興立つや後秦また強く、西紀三九四年（晉孝武帝太元十九年）苻登遂に姚興と戰て馬毛山南に敗死し、秦の太子崇は湟中（甘肅西寧府）に奔る。時に乞伏國仁既に死し弟乾歸河南王と號して金城にあり、秦主苻崇及隴西王楊定を擊殺して悉く隴西の地を有ち自ら秦王と稱す、之を西秦となす、前秦は苻健より六主四十四年にして亡ぶ、實に西紀三九四年なり。初め秦主苻堅仇池を伐て楊氏を降せしが、楊定に至り秦の亂に乘じて隴右に據り、自ら仇池公と號し藩を晉に稱し、後また天水略陽を取り自ら隴西王と稱せしが、是に至りて乞伏乾歸の殺す所となるや、定の叔父の子盛仇池を守り、自ら秦州刺史仇池公と稱し使を遣はして藩を晉に稱せり。

西秦

仇池

魏河南を併す

此間魏主拓跋珪は高車（古の赤狄の一種）諸部を服し、柔然（東胡の苗裔）を伐ちて其部衆

を雲中に徙し、次で劉衛辰及子直力鞮を其居城悅跋城（即ち代來城鄂爾多に斯左翼の界にあり）に攻む、衛辰父子出走して直力鞮は獲られ衛辰は其下の殺す所となる、珪乃ち悉く河南諸部を降して勢始めて盛なり。

丁零亡ぶ

是より先き丁零の翟斌の死するや、其從子翟遼奔て黎陽（河南衛輝府濬縣）の太守滕恬之に依り、遂に恬之を執へて其郡に據る、既にして遼後燕に降り尋で復叛きて自ら魏天王と稱して滑臺（河南衛輝府滑縣）に屯せしが、遼死して子翟釗立つに及んで、西紀三九二年（晉孝武帝太元十七年）後燕主慕容垂之を擊破して悉く其衆及統ぶる所の七郡七萬餘戶を獲しかば、釗遁れて西燕に奔りしが、歲餘にして反を謀り慕容永の殺す所となれり。後幾許ならず慕容垂西燕を擊ち、西紀三九四年（晉孝武太元十九年）長子を陷れて慕容永を殺し、其統ぶる所の八郡七萬餘戶を獲たり、西燕は慕容泓より六主十一年にして亡ぶ。是に於て魏と後燕とは東北に並び國して相敵視せしかば、翌年に至り慕容垂は餘勢を驅りて魏を併呑せんと欲し、太子寶をして衆八萬を督し五原より魏を伐たしむ、魏主拓拔珪乃ち精銳二万餘騎を率ゐて燕軍を參合陂に破る、垂大に怒り西紀三

西燕亡ぶ

魏後燕を破る

後燕亂る

九六年（晉孝武帝太元二十一年）親ら魏を伐ちて平城に克ちしが、尋で病死し太子寶位に即くや、珪は參軍張恂の勸に聞き步騎四十餘萬を帥ゐ大舉して後燕を伐ち、幷州を取り常山を拔き、西紀三九七年（晉安帝隆安元年）進んで中山を圍み、寶は龍城に出奔して明年其臣蘭汗の爲に弑せらる。是より先き後燕主寶の族子開封公詳中山に帝と稱せしが、趙王慕容麟之を襲殺して自立す、然るに魏主珪の進んで之を攻むるや麟大に敗れて鄴に奔り、叔父慕容德を勸めて南滑臺に徙り燕王と稱せしめしが、後反を謀りて殺さる。時に魏主珪は燕の璽綬圖書府庫珍寶を收めて還り、西紀三九八年（晉安帝隆安二年）都を平城に遷して宮室を營み、宗廟を建て社稷を立つ、尋で皇帝と稱し士民に皆束髮して帽を加へしめ、遠祖二十七人を追尊して皇帝となし、制度を改め禮樂を設け、尙書三十六曹を分ち、五經博士を置き、國子大學生を增し、郡縣に命じて書籍を求めて平城に送らしむる等後魏建國の基此に成る、道武帝是なり。

魏道武帝

南燕

是に慕容寶の弑せらるゝや太子長樂王盛蘭汗を殺し帝と稱せしが、西紀四〇一年（晉安帝隆安五年）其臣段璣の爲めに弑せられ、叔父熙璣を殺し自立して天王と稱す、會〻慕容

南涼

北涼

四涼

德もまた廣固を取り西紀四〇〇年（晉安帝隆安四年）遂に帝と稱す、南燕是なり。

此時に當て江北亂れて麻のごとく、興起して帝王と稱するもの頗る多し、三河王呂光は西紀三九六年涼天王と稱し、國を大涼と號して百官を置き、其臣禿髮烏孤また自立して王と稱す。初め禿髮烏孤雄勇大志あり、呂光使を遣はして鮮卑大都統に拜せしが、後西の方乙弗、折掘二部を擊て之を降すや、都を廉川（甘肅西寧府碾伯縣）に徙して西平王と稱し、涼の金城を攻めて之に克ち、尋て嶺南五部を取り更に武威王と稱して治を樂都（西寧府碾伯縣）に徙す、南涼是なり。既にして涼の沮渠蒙遜もまた叛き、京兆の人段業を推して涼州牧建康公となし衆を以て之に歸す、之を北涼となす、蒙遜は匈奴沮渠王の後なり。然るに段業沮渠蒙遜の勇畧を憚て之を殺さんとするや、蒙遜遂に業を殺して自ら張掖公と稱し、張掖に據りてまた北涼と號す、實に西紀四〇一年なり。是より先き隴西成紀の人李暠文學を好みて令名あり、段業暠を敦煌の太守に任ぜしが、西紀四〇〇年遂に衆の推す所となりて敦煌に據り涼公と稱し、東は涼興（甘肅安西府酒泉縣）を伐ち、幷に玉門關以西の諸城を擊ちて皆之を降す、西涼是

なり。かくて淝水の戰後是に至るまで十七年支那は晉、魏、秦、兩燕、四涼の九國に分裂せり。

後秦の隆盛

此時に當り後秦の勢益〻盛にして、姚興は前秦の偉業を繼がんと欲し、孤貧を存問し、賢俊を擧拔し、法令を簡省し、獄訟を精察する等力を內治に盡して人心を收め、西紀四〇〇年大擧して先づ西秦を伐つ、乞伏乾歸敗れて南涼に奔り尋て後秦に降る、姚興乃ち乾歸を義歸侯となし明年復苑川に歸り鎭せしむ。是より先き後涼は西紀三九九年（晉安帝隆安三年）呂光死して太子紹立ちしが、庶兄纂之を弑して代り、光の從子超また纂を弑して其兄隆を立つ、然るに隆多く豪望を殺して威名を立てんとし內外爲めに囂然たり、姚興乃ち兵を進めて姑臧を圍み、隆を降して涼州刺史となす、後涼は光より四世十九年にして亡ぶ、時に西紀四〇一年なり。是に於て後秦の勢は江北を一統せんとするの觀あり、南涼の禿髮烏孤の子傉檀を始めとして、北涼の沮渠蒙遜、西涼の李暠に至るまで、悉く入貢して後秦の歡心を求むるに至る、而して姚興は西僧鳩摩羅什を以て國師となして之に師事し、命じて逑りに經論を飜譯せ

乞伏乾歸後秦に降る

後涼亡ぶ

姚興佛教を尊信す

赫連勃勃興る

しめ、また法顯等を印度に遣はして梵經を求め、遂に佛教を以て人心を統一せんと謀れり。會、朔方の鎮將赫連勃勃後秦に叛き自立して朔方に據る、初め匈奴の劉衛辰の敗死するや、其少子勃勃亡げて鮮卑の別部薛干部に奔り、次で河西の鮮卑沒奕干に依る、勃勃魁岸美風儀性辯慧、後秦主興見て之を奇とし與に大事を論じ寵遇勳舊に踰え、配するに雜虜二萬落を以てし朔方に鎮せしめしに、西紀四〇七年（晉安帝義熙三年）に至り遂に叛きて柔然が秦に献ずる馬を掠取し、沒奕干を襲殺して其衆を幷せ、自ら夏后氏の苗裔といひて大夏天王と稱し、更に姓劉氏を改て赫連氏となし、薛干等三部を降し、十年ならずして嶺北河東を盡く我有となさんと揚言して嶺北諸城を侵掠し、次で南涼主傉檀が婚を肯ぜざるを名として南涼を擊破するに至り、勃勃の勢威益盛にして後秦の運命遂に衰運に傾く。

夏

後秦衰ふ

然るに後秦主興は南涼が勃勃に破られて內訌起れるを機とし、西紀四〇八年（晉安帝義熙四年）步騎三万を遣はして姑臧を圍みて敗れ、同時に三万騎を遣はし勃勃を討ちてまた河曲に敗れ、嶺北悉く勃勃の奪ふ所となり、加之乞伏乾歸は叛服常なく連りに沒奕干諸部を攻略し、後秦の國威益衰ふ、既にして西紀四一六年（晉安帝義熙十二年）姚興死し、子泓位に即くに及んで晉の劉裕の爲めに滅ぼさるゝに至れり。

第三十一章　東晉の末路　南燕後燕

後秦の滅亡

肥水戰後晉の形勢

肥水戰後晉の形勢—安帝—會稽王父子晉の政を專にす—孫恩亂を作す—劉裕興る—桓玄反を謀る—桓玄反す—桓玄帝位を簒ふ—劉裕桓玄を討つ—桓玄の亂平ぐ—劉裕外征を圖る—南燕亂る—劉裕南燕を伐つ—南燕亡ぶ—後燕亂る—後燕亡ぶ—北燕—盧循亂を作す—劉裕威名益々盛なり—劉裕後秦を伐つ—後秦亡ぶ—赫連勃勃關中を奪ふ—恭帝—劉裕晉を簒ふ—東晉亡ぶ

晉は淝水の一戰に國威を揚げ江北の分裂に反して社稷を安んずることを得たりしが、幾許ならずして謝安謝玄の名士は前後死亡し、孝武帝は少康に安んじて酒を嗜み流連を事とし、尙書令會稽王道子權を專らにして內嬖多く事を用ゐ晉室復亂れんとす、而して帝は在位二十四年にして西紀三九

安帝

六年（晉孝武帝太元二十一年）に至り愛姫張貴人の爲めに弑せられ、太子德宗立ちて安帝となり、大傅會稽王道子政を輔けしも道子飲宴に耽りて內政を顧みざるを以て、其世子元顯を以て道子に代はり揚州刺史となし、尙書の事を錄せしめしに、元顯多く親黨を樹立して生殺意に任じ民心の動搖を來せり。妖賊孫恩此機に乘じ西紀三九九年海島より起りて會稽を攻め、自ら征東將軍と號し、其黨を長生人といひ道子及元顯を誅するを以て名となす、會稽、吳郡、吳興、義興、臨海、元嘉、東陽、新安等の八郡響應し、晉廷大に震ひ徐州刺史謝琰及劉牢之に命じて之を討たしむ。牢之乃ち兵を率ゐて恩を彭城に破りしに、恩脫して海島に遁れ明年復寇せしが、牢之の破る所となりて復海に入る。會、劉裕字は德輿、京口（江蘇鎭江府）に僑居して勇健大志あり、履を賣るを業とし里閭の賤む所たりしが、劉牢之の參軍に選ばれて孫恩を討ち大功を建て始めて起る。時に故の桓溫の子桓玄才を負みて雄豪自ら任じ、南郡公より義興（江蘇常州府宜興縣）の太守となり、父は九州の伯たり子は五湖の長たりと怨言を發し官を棄て國に歸り、更に江州の刺史より都督荆江八州軍事となりしが、益〻禍心を

會稽王父子晉の政を專にす

孫恩亂を作す

劉裕興る

桓玄反を謀る

蓄へ其兄偉を江州刺史となして夏口を鎭せしめ、司馬刁暢をして八郡を督して襄陽を、馮駿をして盈口を戍らしめ、孫恩の亂後民心動搖するを期として兵を擧げんとす。是に於て帝は西紀四〇二年（晉安帝元興元年）元顯を征討大都督となし黃鉞を加へ、劉牢之を先鋒となして玄を征伐せしむ、桓玄乃ち東方饑饉運糧がざるを以て江路商旅を斷絕し釁に乘じて起らんとせしが、報を得て驚き兵を率ゐて姑熟に進み、元顯を擊て之を斬り劉牢之を降して京師に入り、自ら丞相となりて百揆を總べ內外を都督し宗族を顯職に任じ、道子を安成郡に徙し、翌年更に相國となり楚王に封じて九錫を加へられ、尋で皇帝と稱して九井山（太平府當塗縣）に即位し、永始と改元し安帝を尋陽に徙して平固王と爲す。益州刺史毛璩先づ檄を傳へ玄を討じて白帝に屯し、西紀四〇四年（晉安帝元興三年）には劉裕兵を京口に起し、弟道規及諸葛長民等と共に玄の弟桓謙を覆舟山に破り、建康に入りて石頭城に屯し玄の宗族を誅し、宮に入りて圖籍器物を收め、府庫を閉封し推されて都督八州徐州刺史となり、綱紀を正し內外を謹肅す。桓玄遂に安帝を挾んで東奔せしが劉裕の將何無忌は

桓玄反す

桓玄帝位を篡ふ

劉裕桓玄を討つ

桓玄の亂平ぐ

之を桑落洲（江西九江府德化縣東北）に、劉毅は之を峰爍洲（湖北武昌府武昌縣）に擊破せしかば、玄は帝を挾んで江陵に入りしに、甯州督護馮遷、玄を斬て大衍に梟し、次て西紀四〇五年（晉安帝義熙元年）に至り劉毅は桓謙を討て後秦に走らし、悉く餘黨を平定せしかば帝建康に還り、百官を復職することを得たり。是より劉裕の威名漸く高く遂に晉延を左右するに至り、使を後秦に遣はして和親を求め南鄉（河南淅川縣）等十二郡を得、東陽太守殷仲文の禍心を藏するを察して之を殺し、西紀四〇八年（晉安帝義熙四年）自ら揚州刺史錄尚書事となり、翌年遂に大功を立て志を遂せんと欲し、上表して北伐を請ひ南燕を伐つ。時に南燕主慕容德已に死して兄の子超位にあり、所親公孫五樓を信任して猜虐日に甚しく大に民心を失ひしが、嘗て兵を遣はして晉の宿豫（江蘇徐洲府宿遷縣）を攻掠せしことあり、今や晉軍の來寇するを聞き、五樓等をして步騎五万を率ゐて臨朐（山東西州府臨朐縣）に拒ぐ、劉裕は舟師を師ゐ淮西を經て大峴山を過ぎ、自ら步騎四万に將として大に南燕の軍を破り、超が地を割き和を請ふを許さず、西紀四一〇年（晉安帝義熙六年）進んで廣固を拔き、南燕主超を捕へ建康に送りて之を斬る、南燕は慕容德

劉裕外征を圖る

南燕亂る

劉裕南燕を伐つ

南燕亡ぶ

後燕亂る

より三主十一年にして亡ぶ。此間後燕は西紀四〇七年慕容熙の故將馮跋亂を作し、熙の養子にして高句麗の支屬たる高雲を擁して熙を殺し雲を立てしが、西紀四〇九年に至り跋復雲を殺して自立せり、之を北燕となす、後燕は慕容垂より五主二十五年にして亡ぶ。

後燕亡ぶ

北燕

盧循亂を作す

是より先き孫恩復海島より出て臨海に寇し、郡兵の爲めに破られ遂に海に赴きて死し、其妹夫盧循代はりて主となる、會、桓玄東土を撫安するの志あり、循を以て永嘉（浙江溫州府）の守とせしも其寇暴遂に已まず、次て循徐道覆の勸に從ひ、劉裕の北伐の虛に乘じ番禺（廣東廣州府）より起りて京邑に迫るや、江荆都督何無忌は戰死し、豫州都督劉毅は桑落洲に敗績し江南また亂る。劉裕乃ち還りて數〻賊を擊破して循を交州に奔らせしが、循遂に交州刺史杜慧度の破る所となりて死し亂全く平ぐ、時に西紀四一一年（晉安帝義熙七年）なり。是に於て劉裕の威名益〻盛となり、事を以て劉毅及豫州刺史諸葛長民を徐き、譙王文思を廢して庶人となし、また益州刺史朱齡石をして襲に益州參軍譙縱が其刺史毛璩を殺して自ら成都王と稱し、次て後秦に降りて藩を稱せるを伐て

劉裕威名益盛なり

劉裕後秦を伐つ

走死せしめ、次で自ら師を帥ゐて荆州を討て都督司馬休之を後秦に走らし、功を以て劍履殿に上り入朝趨らず贊拜名いはざるに至る、西紀四一六年（晉安帝義熙十二年）には都督二十二州軍事となり、更に中外大都督となり、遂に其希望を充たさんと欲して後秦征伐の途に上りぬ。

此歳後晉主姚興死して太子泓立ち國勢大に衰ふ、劉裕乃ち諸軍を督して建康を發して彭城に至り、將軍王鎮惡、檀道濟等後秦の境に入り向ふ所敵なく諸屯風靡す。檀道濟は長驅して洛陽を取り、王鎮惡は潼關を破り翌年進んで長安に入り後秦主姚泓を降す、劉裕繼て長安に入りて秦の珍器を收め金帛を分ち、泓を建康に送て之を斬る、後秦は姚萇長安に據れるより三主三十四年にして亡ぶ、實に西紀四一七年（晉安帝義熙十三年）なり。

後秦亡ぶ

赫連勃勃關中を奪ふ

是より先き夏主赫連勃々は都城を朔方、黑水の南に築きて統萬城（陝西榆林府懷遠縣）と名け國勢益〻興隆す、會〻劉裕が後秦を伐つを聞きて勃勃大に喜び、裕必ず關中を取るも久しく留まる能はず、若し子弟諸將を以て之を守らば吾之を取らんこと芥を拾ふがごときのみといひて進んで安定に據り、馬に秣ひ士を養ひ、劉裕が使を遣はし兄弟たらんことを約せるを容れて機を覗ふ。

劉裕もと長安に留て西北を經略せんと欲す、而かも諸將多く歸を思うて留まるを冀はず、劉裕遂に意を決して東に還り子義眞を留めて關中を守らしむ、赫連勃勃此機に乘じ兵を遣はして長安を攻め、明年之を陷れて義眞を走らし、遂に皇帝と稱して統萬に還れり。

恭帝

劉裕晉を篡ふ

劉裕已に建康に還りて相國宋公九錫の命を受け、西紀四一八年（晉安帝義熙十四年）に至り安帝を弑して帝の弟琅邪王德文を立つ、恭帝是なり。既にして劉裕爵を進め王となりて殊禮を加へられ、太妃を太后、世子を太子と稱するに至り、西紀四二〇年（晉恭帝元熙二年）遂に恭帝に迫て禪を受け、皇帝の位に建康に即く、宋の高祖武皇帝是なり、晉室南渡より是に至るまで十一主一百四年、西晉を合せて十五主一百五十六年にして亡ぶ。

東晉亡ぶ

第三十二章　江北の一統と夏西秦北燕南西北三涼の滅亡　吐谷渾と柔然

魏の形勢——明元帝——大武帝——宋武帝少帝及文帝——魏江北を一統せんとす——西秦の内訌——南涼亡ぶ——赫連定平涼に據る——四秦亡ぶ——夏亡ぶ——吐谷渾——北燕亡ぶ——北涼亡ぶ——柔然——車鹿會——社崙——大檀——太武帝連りに柔然を破る——柔然衰ふ——蠕蠕——魏の勢威西城に振ふ——五胡十六國の種別亡び

魏の形勢

明元帝

魏は道武帝晩年方士の説に惑うて僊人博士を置き、仙坊を立て百藥を養煉せしめ頻りに長生の方を求めて已まず、遂に藥を服して躁怒常なく屢〻人を手刃するに至りしが、西紀四〇九年帝賀夫人を譴責して之を殺さんとし、却て其子清河王紹の爲めに弑せられしかば、長子齊王嗣紹を誅して位に即く、之を明元帝となす。帝は博士祭酒崔浩を用ゐて政治を改良し、躬ら籍田

太武帝

宋武帝少帝及文帝

魏江北を一統せんとす

四秦の内訌

南涼亡ぶ

を耕し農桑を勸課し文學を興し、劉裕の北伐するや後秦を助けて晉に抗し、更に宋を攻めて青兗河南の諸郡を取りしが、四二三年（宋少帝景平元年）死し、太子燾即位す太武帝是なり。此間宋は西紀四二二年（宋武帝永初三年）武帝死し、太子義符立ちて少帝となり、淫虐を事とし喪に居て禮なく遊嬉度なかりしかば、司空徐羨之等廢して之を弑し、其弟宜都王義隆を迎へ入れて位に即かしむ、之を文帝となす。時に北方には南涼及西涼已に亡びて魏の外國を保つもの夏、北涼、北燕、西秦の四國あり、今や魏の太武帝父祖の餘威と雄才大略とを以て、是等の諸國を討平して江北を一統せんと欲し連りに兵を諸國に加ふ。

是より先き西秦の乞伏乾歸は後秦より逃れて范川に歸り復王と稱せしが、西紀四一二年（晉安帝義熙八年）國仁の子公府に弑せられ、世子熾磐討て公府を殺して自立し都を抱罕（甘肅隴州府河州）に遷す、既にして南涼主禿髮僊檀の唾契汗乙弗等の叛を討て敗るゝや、熾磐其虚に乘じて樂都を圍み、西紀四一四年（晉安帝義熙十年）遂に之を陷れ僊檀を捕へて之を酖殺せり、南涼は禿髮烏孤より三主十八年にして亡ぶ。西涼は西紀四一七年（晉安帝義熙十三年）其主李暠死して世子歆立

沮渠蒙遜西涼を圖る

ち、長史宗繇遺命によりて之を輔佐せしに、北涼主蒙遜李歆を誘ひ擊て西涼を滅ぼさんと謀り、西紀四二〇年（宋武帝永初元年）先づ兵を引て西秦の浩亹（甘肅四寧府碾伯縣）を攻め、既に至るや師を潛めて還り川嚴（甘肅甘州府張掖縣西南）に屯す、歆其虛に乘じて張掖を襲はんと欲し、宋繇等の諫を聽かず兵に將として東に出づ、蒙遜乃ち邀へ擊て歆を殺し酒泉に入り遂に西涼を滅ぼす、李暠敦煌に據れるより歆に至るまで二主二十二年なり、時に歆の子重耳江左に奔りしが後魏に歸す、之を唐の祖となす。

西涼亡ぶ

太武帝夏を伐つ

夏は赫連勃勃西紀四二五年（宋文帝元嘉二年）に死し、子昌立ちしも、兄弟相圖り國人安んぜざるを聞き、魏の太武帝西紀四二六年（宋文帝元嘉三年）大舉して夏を伐ち、統萬を圍み之を陷れずして還り、別に兵を遣はし勝に乘じ長驅して蒲坂、長安を取り、明年再び平城を發して黑水の東北拔鄰山に至り、輜重を捨て輕騎を以て道を倍し進んで統萬を攻め、夏主昌を擊破して之を上邽に追ひ、城に入り牛馬數十萬府庫珍寶軍旗器物を收め、尋で昌を禽にして歸りしかば、昌の弟平原王定平涼（甘肅平涼府）に奔りて位に即き、餘衆を集めて長安を恢復し、次

赫連定平涼に據る

で西紀四三一年（宋文帝元嘉八年）に至り西秦を伐て南安を攻め、其主乞伏暮末（熾磐の子）を降し歸て之を殺せり、西秦は乞伏國仁より四主四十七年にして亡ぶ。然るに夏主定魏と戰ひ敗れて安定隴西及長安を失ふに及んで大に畏れ、川を濟て北涼主蒙遜を擊ち其地を奪はんとせしに、吐谷渾王慕璝騎三萬を遣はして其半濟るに乘じ、邀へ擊て定を執へ歸り之を魏に送る、魏主遂に定を殺す、夏は赫連勃勃より三主二十六年にして亡ぶ。吐谷渾は前燕の慕容廆の庶兄なり、西に徙りて洮水の西なる白蘭山（甘肅西寧府の微外青海の西南）に據る、後樹落の時に至りて自ら單于と稱し、西秦の故地を保ちしが、其弟阿柴を經て弟慕璝に及び遂に夏を滅ぼし勢威大に揚る。

西秦亡ぶ

夏亡ぶ

吐谷渾

時に北燕は西紀四三〇年其主馮跋死し、弟弘其太子翼を殺して自立し海を魏に稱せしが、遂に西紀四三六年（宋文帝元嘉十三年）に至り魏の攻むる所となりて高句麗に奔り、居ること二年使を宋に遣はして迎を求めしかば、高麗人之を殺せり、北燕は馮跋より二主二十八年にして亡ぶ。此歲太武帝は是より先き赫連定の西遷後上邽を據有して自ら太秦王と稱せる楊難當を降し、次て

北燕亡ぶ

北涼亡ぶ

西紀四三九年（宋文帝元嘉十六年）に至り北涼を伐て姑臧を陷れ、蒙孫の子沮渠牧健を降す、北涼は段業より沮渠氏を通じて三主四十三年にして亡ぶ。是に至りて太武帝悉く北方の諸國を滅ぼして江北を一統し、次て吐谷渾を逐うて河湟を定め、更に北に向て柔然を征す。

柔然

柔然は東胡の苗裔にして其先を木骨閭といひ、因て以て氏とせしが、木骨閭死し子車鹿會雄健始めて部衆を有ち、自ら柔然と號し世代に屬せしが、秦の代を滅ぼすに及んで劉衞辰に附く、後魏の道武帝の即位するや高車諸部皆服せしも獨り柔然のみ下らざりしかば、帝兵を引て之を擊ち追うて大磧に及び、大に之を破りて悉く其部衆を雲中に徙せしが、後社崙の時に及んで柔然の勢復興隆し、遂に後秦を援けて大に道武帝の破る所となり、遠く遁れて高車（漢代丁零の地甘肅廸化州鎮西府の境内）の地を奪ひて之に居り、諸部を併呑し士馬繁盛東は朝鮮の境より西は焉耆に至る版圖を有ち、自ら豆代可汗と稱し、軍隊を組織して頗る勢を振ふに至れり。後其從第大檀立ちて紇升蓋可汗となるや、屢〻魏の邊境を犯せるを以て太武帝は西紀四二九年（宋文帝元嘉六年）崔浩の言を

社崙

大檀

大檀

太武帝連りに柔然を破る

用ゐて平城より栗水（漠北稽落山附近）に至り、大に柔然の兵を破りしがば、紇升蓋可汗は憤悒して死し、子吳提立ちて敕連可汗と稱す。西紀四四三年（宋文帝元嘉二十年）太武帝復輕騎を以て柔然を擊て敕連可汗を走らし、更に西紀四四九年（宋文帝元嘉二十六年）に至り其子處羅可汗（吐賀眞）を擊ちて其輜重を收めしかば柔然遂に衰弱して敢て魏を覘はざるに至れり。柔然また蠕蠕と稱す、是れ其無知にして虫に類するを以て太武帝の名くる所なり。是に於て魏の威名は廣く東西に響き、烏孫、疏勒、龜茲、悅般（烏孫の西北龜茲の北）渴槃陀（葱嶺の東）鄯善、焉耆、車師、粟特（亟海の北）等の九國入貢し、侍郎黃琬等が西方に使し、烏孫に至りて撫慰するや破落那、者舌（破落那の西北）の二國を始め從て入貢するもの前後十六國、是より每歲朝貢絕えず、而して故の西涼主李暠の孫李寶もまた魏の封を受け、敦煌公となりて貢を納れ、次て高句麗もまた風を望んで來朝するに至れり。

柔然衰ふ

蠕蠕

魏の勢威四城に振ふ

五胡十六國の種別

西晉八王の亂後塞外諸族の內地に入りて國を建つるもの五種族あり、漢の劉氏及夏の赫連氏、北涼の沮渠氏は匈奴、其別族なる後趙の石氏は羯にして共に土耳古種に屬し、前後西三燕の慕容氏、西秦の乞伏氏、南涼の禿髮氏は

鮮卑にして共に通古斯種に屬し、前秦の苻氏後涼の呂氏、成漢の李氏は氐にして後秦の姚氏の羌と共に圖伯特種に屬し、漢族なる前涼の張氏、西涼の李氏、北燕の馮氏と共にすべて十六國、其他冉魏西燕の二國もまた起りしと雖も、其年祚甚だ短きが故に列國の中に數へず、之を五胡十六國と稱す、今左に其種族並に興亡年代を示さん。

十六國興亡表

十六國興亡表

國名	始祖	代數	都城	興亡年代	種族	滅ぼしたる國
前趙	劉淵	四	平陽、長安	三一〇―三二九	匈奴	後趙
後趙	石勒	七	襄國	三一一―三五一	羯	前燕
前成	李雄	五	成都	三一三―三四七	氐	東晉
前燕	慕容皝	三	鄴	三三三―三七〇	鮮卑	前秦
前涼	張重華	九	姑臧	三三三―三七六	漢	同
前秦	苻健	六	長安	三三五―三九四	氐	西秦
後秦	姚萇	三	長安	三八四―四一七	羌	東晉
西秦	乞伏國仁	四	苑川	三八三―四一五	鮮卑	大夏
後燕	慕容垂	五	中山	三八三―四〇八	同	北燕
南燕	慕容德	二	滑臺	三九一―四〇八	同	東晉
北燕	馮跋	二	龍城	四〇四―四〇九	漢	後魏
後涼	呂光	四	姑臧	三八三―四〇六	氐	後秦
南涼	禿髮烏孤	三	西平	三九一―四一七	鮮卑	西秦
北涼	沮渠蒙遜（段業）	三	張掖	四〇四―四〇九	匈奴	後魏
西涼	李暠	二	敦煌	四〇四―四一〇	漢	北涼
大夏	赫連勃々	三	統萬	四〇四―四一七	匈奴	吐谷渾

第三十三章　宋魏の對立　宋の滅亡

南北朝の對立——宋の文帝の治——魏の太武帝の治——崔浩魏の政を輔く——太武帝佛徒を迫害す——魏の崔浩誅せらる——太武帝宋を侵す——南北和成る——太武帝の晩年——魏の文成帝——宋の孝武帝——廢帝——明帝——宋室の孤立——後廢帝——順帝——蕭道成宋を簒ふ

南北朝の對立

西晉の末より支那は戎狄の跳梁すること百數十年にして、內亂漸く平ぎ南北兩朝に二分せり、南を宋といひ北を魏と稱す、而して北は南の海隅に僻在するを以て島夷といひ、南は北の辮髮を垂るゝを以て索虜と稱す。

宋の文帝の治

宋は文帝位にありて高祖劉裕の餘業を嗣ぎ、內治に心を用ゐ、四學を立て孔子の廟を修め、郊廟の樂を備へ、四銖錢を鑄、渾天儀を造り、新曆を行ひ、また親ら籍田を耕し、酒禁を設け、擅に佛像を鑄るを禁じ、西紀四四六年（宋文帝元嘉二十三年、魏太武帝太平眞君七年）には南、林邑（安南の南部）を討ちて之に克つ。魏は太武帝諸國を朝貢せしめて國威揚ると共に名士崔浩に親任して事を決す、崔浩夙夜心を治世に碎き、命

魏の太武帝の治

崔浩魏の政を輔く

を受けて律令を更定し五歲四歲の刑を除き、一年の刑を增し、官爵を以て刑を除き、若し婦人刑に當りて孕めるものは產後百日の後決せしめ、闕左に鼓を懸け打て寃を訴へしむ。帝は更に民官貪多きを以て守令法に從はざるを告察せしめ、田禁を除き、崔浩、高允に命じて國史を修せしめ、私に沙門、巫覡を養ふを禁じ、太子晃をして百機を總べ、崔浩等をして政を輔けしめ、王公卿大夫の子は皆大學に入り、百工商賈の子は父兄の業を習ひ、私に學校を立つるを禁じ、中書に命じ經義を以て疑獄を決せしめ、魯郡に巡幸し太牢を以て孔子を祭る等其內治に盡す所尠少ならず。然れども帝が道敎を信じて寒食散を服し、寇謙之を親任して崔浩が排佛說を聽き、甞て長安に至れる時佛徒が兵器を擁するを見て悉く境內の僧侶を誅し、經像を焚毀し、太子晃の佛を好みて諫むるを用ゐず、胡神に事へ泥人、銅人を造るものは誅すべしと詔して佛徒を迫害し、三武一宗の難（太武帝、北周の武帝、唐の武宗、後周の世宗）の端を啓けるは惜むべし。

太武帝佛徒を迫害す

此のごとく南北兩帝互に國力培養に盡精せるの際なるを以て、孰れも天下統一を望まざるなく、覺は先づ南より開くに至れり。西紀四三〇年（宋文帝元

南北覺を開く

文帝河南を取る

嘉七年、魏太武帝神鹿三年　宋の文帝は河南恢復の志に驅られて、將軍劉彦之に命じ甲卒五萬を率ゐて北伐せしめ、長沙王義欣を監軍として彭城に聲援をなさしめ、遂に魏軍を河北に退けて河南を取りしが、魏軍の來て滑臺を取るに及び宋軍利あらずして南に還り、暫く北向の念を絶つ。然るに西紀四四六年宋文帝元嘉二十三年、魏太武帝太平眞君七年に至り、太武帝が魏を滅ぼすものは吳なりといへる民間の訛言を信じて、盧水の胡蓋吳の叛を伐つや、宋は蓋吳の聲援をなして兵を境上に屯せしかば、また二國の戰端開け、魏軍進んで宋を侵し境上騷動す。既にして魏軍蓋吳を討て之を平げ、西紀四五〇年宋文帝元嘉二十七年、魏太武帝太平眞君十一年太武帝親ら步騎十萬に將として南伐し、潁川の大守を走らし、懸瓠城河南汝寧府を圍み、宋の援軍至るに及んで兵を引きて北に還れり。

魏軍宋を侵す

魏の崔浩誅せらる

初め魏の司空崔浩博學にして智略あり、明元帝の時より既に謀臣となり、太武帝甚だ之を寵任し、嘗て浩を屬國の渠帥に指示して、此人纖弱にして弓を彎く能はざるも胸中に懷く所は兵甲より過ぎたり、朕の武功は皆此人の敎うる所なりといふに至りしが、後浩に命じて國史を修めしむるや、浩魏の先世の事を書する皆實を詳にし、且つ其屬僚の勸に從ひ其文を石に刊し、之を衢路に立て以て直筆を彰にせしに、魏人恐悲して浩が國惡を暴揚するを責め、之を帝に譖せしかば帝大に怒りて浩を族誅す、時に西紀四五〇年宋文帝元嘉二十七年、魏太武帝太平眞君十一年なり。

太武帝宋を侵す

此歲宋の文帝、沉慶之の諫を用ゐず、王玄謨を將として北伐し碻磝城山東昌府茌平縣西南を取り進んで滑臺を圍みしも、太武帝親征するに及び宋軍敗れて南走す、是より兩軍攻伐間斷なし。既にして宋の雍州參軍柳元景、魏師を陝河南陝州に破りて潼關に據るや、魏の永昌王仁は懸孤城に克ち、宋軍を尉武河南北舞州に破りて、壽陽に迫り、太武帝は彭城を攻めて克たざりしも、兵を引き南下して過ぐる所を殘滅し、宋の城邑皆風を望んで奔潰するに至り、魏軍は盱眙を攻めて克たず、瓜步山名江蘇江寧府六鄉縣に進んで江を渡ると聲言せしかば、宋は內外戒嚴し、兵を分て津要を守り、艦を列すること采石安徽太平府采石より暨陽江蘇常州府江陰縣に至る百餘里、文帝石頭城に上りて憂色ありしが、幾許もなく戰を交へずして和成り、西紀四五一年宋文帝元嘉二十八年、魏太武帝太平眞君十二年魏軍北に還れり。

南北和成る

太武帝の晩年

是より後南北時に鋒を交ふることありしが、宋魏兩室に齊しく内訌を生じ、宋室は遂に滅亡を招くに至りぬ。魏は太武帝北歸の後大に功臣を賞し、更に律令を改むる等治績大に見るべきものありしが、西紀四五一年太子晃は中常侍宗愛の險暴にして不法多きを惡み、積鬱病をなして死し、太武帝が追悼已まざるや、宗愛は誅を懼れて西紀四五二年（宋文帝元嘉二十九年、魏文成帝興安元年）帝を弑して南安王餘（太武の庶子）を擁立し其酣飲を好み畋獵に耽り、己の權を奪はんとするを怒り、復之を弑せしかば、太武帝の孫濬（晃の子）の大統を繼ぎて宗愛を誅せり、之を文成帝となす。帝内は佛教を信じて寺院の建立を聽るし、また民の出家を許し、元始曆を用ゐ、酒禁を設け、候官を置き、外は吐谷渾を征し、專ら中外の民心を收むることに留意せしかば、境内頗る平安なりき。西紀四六五年（宋明帝泰始元年、魏文成帝和平六年）帝死し太子弘立つ、是れ即ち有名なる献文帝なり。

魏の文成帝

宋は文帝其太子邵が過失多きを以て之を廢せんと欲せしに、西紀四五三年（宋文帝元嘉三十年、魏文成帝興安二年）邵遂に帝を弑して自立す。是に於て邵の弟武陵王駿兵を擧げて邵を誅し、國人に擁立せられて孝武帝となる。孝武帝既に立ちて

宋の孝武帝

廢帝

明帝

直言を求め、雕文塗飾、貪戚の競利を禁じ、明堂を立て、士族の雜婚を禁じたるなど其内政頗る見るべきものありしも、性險戾にして宗族の偃盛を忌み、また臣下の權勢を得るを惡み、其弟南平王鑠を始めとして、中書令王僧達、揚州刺史顔竣、盧陵内史因朗、廣陵太守沈懷之等を誅殺し、竟陵王誕、南郡王義宣等は反を誣ひて殺す等殘忍酷薄を極め、更に晩年に至りて財利を貪り、終日酣飲して、西紀四六四年（宋孝武帝大明八年、魏文成帝和平五年）に死し、太子子業立つ。然るに子業また傲慢狂暴を極めて底止する所を知らず、太后の病篤きを聞きて省せず、太宰江夏王義恭、尚書令柳元景、僕射顔師伯、寧朔將軍何邁、太尉沈慶之等を殺し、群臣を捶罵すること奴隷のごとく、其弟新安王子鸞が孝武帝に寵ありしを惡みて之を殺し、其諸父湘東王彧を殿内に幽囚し、歐捶陵曳復人理なく、諸妃主を前庭に列し左右に命じて之を辱かしめ、從はざるものを虐殺するに至り、義陽王昶は出て魏に奔り、晉安王子勛は兵を尋陽に擧げて反するに至り、群下其誅求に堪へず、遂に謀りて子業を弑し湘東王彧を立つ、是を明帝となす、時に西紀四六五年（宋明帝泰始元年、魏文成帝和平六年）なり。

宗室の孤立

是に於て子勛は位に尋陽江（江西九江府）に即きて明帝に敵し、雍、郢、荆州、會稽郡悉く子勛に應じて尋陽に朝貢するもの多し、明帝乃ち建安王休仁を遣はして之を討たしめ子勛を殺し、また武帝の子安陵王子綏等十三人を誅す、武帝の二十八子全く此に盡く。明帝政を親らし、田租を除き、政治稍見るに足るものありしも、また骨肉阻害の弊を免れず、其兄廬江王偉、其弟晉平王休祐及建安王休仁、巴陵王休若を殺し、蕭道成を任用して宗室を弱め、以て他日の衰亡を招きぬ。明帝もまた魏と釁を開き、西紀四六七年（宋明帝泰始三年、魏獻文帝皇興元年）には、魏の將慕容白曜に青州を襲はれ、更に下邳を奪はる。此間宋の豫州刺史劉勔が魏軍を擊退せしことあるも、青州は遂に魏に沒して、攻伐功を奏せず、西紀四七二年（宋明帝泰豫元年、魏孝文帝延興二年）明帝死し、太子昱立つ後廢帝是なり。帝新に立て年僅に十歳、袁粲等政を執り節儉を崇び、奢僞の弊を矯めんとせしが、阮佃夫等の小人事を用ゐて禁ずる能はず、西紀四七四年（宋後廢帝元徽二年、魏孝文帝延興四年）桂陽王休範兵を擧げて建康を攻めしも、幸にして右衛將軍蕭道成の之を平ぐるあり、尋で建平王景素もまた京口に反せしが克たずして死し、江南一時少康を

後廢帝

蕭道成宋を簒ふ

順帝

得たり。然るに蕭道成深沈にして大志あり、益〻其勢力を扶植するに力めしが、帝は驕恣最も甚しく、床室遺傳の病を發して殺伐を嗜み、一日人を斬らずんば慘然として樂まざるに至り、左右皆恐懼せしかば、蕭道成遂に西紀四七七年（宋順帝昇明元年、魏孝文帝太和元年）帝を弑し其弟安成王準を立つ、是を順帝となす。是に於て荆襄都督沈收之、中書令袁粲、尚書令劉秉等兵を擧げて蕭道成を滅ぼさんと欲し、却て道成の爲めに亡ぼされ、道成自ら大尉となり南徐等十六州の軍事を都督し、二年の後自ら相國と爲り、齊公に封じ九錫を加へ、爵を進めて王となり、遂に皇帝と稱し、順帝を發して汝陰王と爲し遂に之を弑しぬ。宋は高祖劉裕より順帝に至るまで八主五十九年にして亡び、南朝遂に齊に歸す、實に西紀四七九年（齊高帝建元元年、魏孝文帝太和三年）なり。

第三十四章　魏の隆盛　齊の興亡

魏の獻文帝――孝文帝――馮太后制を稱す――孝文帝の治績――都を洛陽に遷す――言語風俗の改革――魏の衰兆――齊の高帝――武帝――廢帝鬱林王――廢帝海陵王――明帝――魏齊を伐つ――廢帝東昏侯――齊室亂る――蕭衍齊を簒ふ

魏の獻文帝

魏の獻文帝は、希世の英主なり、十二歳にして位に即き、十四歳にして政を親らし、政治に勤め、賞罰嚴明、清節を拔き貪汚を黜け、三等の輸租法を立て、民を贍給し、また宋を伐ちて版圖を擴め、柔然を征して國威を擧げしが、其聰睿剛毅なるに似ず頗る黄老浮圖の學を好み、夙に遺世の心あり、在位五年十八歳にして西紀四七一年（宋孝武帝泰始七年、魏孝文帝延興元年）位を太子宏に讓り、自ら太上皇帝と稱す。宏立て孝文帝となり、年僅に五歳なりしかば、上皇は北苑に鹿野浮圖を建て禪僧と共に居りて政を聽き、農事を勸め盜賊を除き、河南六州の賦法を制し、明房の誅を罷むる等猶ほ畫策する所ありしに、太后馮氏の寵幸せる李奕を誅せし爲め、太后の怨を受けて西紀四七六年（宋後廢帝元徽四年、魏孝文帝承明元年）鴆

孝文帝

殺せらるゝに至れり。太后乃ち大赦改元して朝に臨み制を稱し、性また聰察政事に通曉し、猜忍權數多かりしが、孝文帝年僅に十歳、加ふるに至孝の性として事大小となく皆其成を仰げり。かくて太后は內幸盛に行はれしも、候官を罷めて吏民の業を安んじ、高允に命じて律令を議定せしめ、始めて祿を班ち、織緯巫卜を嚴禁し、學館を建て諸王を敎へ、均田の詔を下して諸男夫十五以上には露田（不種樹の地）四十畝、婦人には二十畝、奴婢には牛一頭を授け、三長を置き、戶籍を定め、五等の公服を制し、樂章を制し、群臣に詔して事を言はしめ、或は柔然を擊て之を破り、屢〻宋齊と兵を交へ、契丹を內附せしむる等の事業を遂げ、西紀四九〇年（齊武帝永明八年、魏孝文帝太和十四年）を以て死し、孝文帝は翌年より始めて政を聽く。帝喪に居り哀毀禮に過ぐ、性また恭儉讀書を好み、政事に精勤して日夕倦まず、律令の不完を更定して親ら獄を決し、尤も祭典を重んじて復古に力め、祖宗を明堂に祭り、堯舜禹周公孔子の祀を修め、老を養ひ、績を考えて百官を黜陟し、民田を均くし、戶籍を制し、籍田に親耕して太平の治を致せり。帝また平城の僻遠にして風俗の陋なるを厭ひて、西紀四九三年（齊武帝永

馮太后制を稱す

孝文帝の治績

都を洛陽に遷す

明帝太和十一年、魏孝文十八年　都を洛陽に遷し、國子太學四門小學を建て、遺書法度量を求め、禮樂を制し、五銖錢を鑄、北方の胡語を禁じて正音に從はしめ、違ふ者は官を免じ、胡服を禁じ、自ら姓を改めて元と稱し、諸氏の族姓を定め、諸臣に力めて中國の名族と婚し前妻を妾媵となさしめ、主もに中國の儒臣を親任しぬ。

冒陋風俗の改革

是を以て帝は文學を愛し華風を慕ひ、文治を三代の隆に比するを得しも、人々皆舊土を慕ひて中國の風を喜ばず、太子恂の如きは私に胡服を着けて故都に遷らんとして廢せられ、新興公丕も舊服を用ゐて不平なりし爲めに死を賜へり。帝親ら齊を征して國威を輝し、吐谷渾及び鄧至羌を入朝せしめ、高車を伐て之を降せし等外交上の偉績見るべきものありしも、國民已に太平に馴れて武事を怠り、華侈に流れ、國勢の衰運已に此に兆せり。

魏の衰兆

齊の高帝

齊は蕭道成已に位に即きて高帝となり、群臣の直言を求め、民籍を檢定し、病囚診治の法を制し、國學を起して學生二百人を置き、また魏と對抗して戰を交へしが、在位僅に四年にして西紀四八二年齊高帝建元四年、魏孝文帝太和六年に死し、太子頤立つ之を武帝となす。帝は首として郡縣の官田秩遷を復し、國學を建

武帝

て釋奠の禮を行ひ、獄官に詔し舊注を詳正して律書を作らしめ、太子家令沈約に命じて宋書を撰せしめ、治平の實を擧げしが、西紀四九三年宋武帝永明十一年、魏孝文帝太和十七年在位十一年にして死し、太孫昭業位に即く、之を廢帝鬱林王となす。

廢帝鬱林王

然るに帝好んで群小を近づけ、微服して市里に遊び、諸鄙戲をなし、狂縱日に甚しかりしかば、尚書令蕭鸞之を弑して其弟新安王昭文を擁立す、廢帝海陵王是なり。然るに鸞固より不臣の志あり、是に至りて其兄始安王遙を南郡太守となして謀を通じ、勉めて親黨を樹立し、自ら爵を進めて王となり、權勢益、盛にして中外を傾け、鄱陽王鏘、桂陽王鑠、衡陽王鈞等を殺し、西紀四九四年齊明帝建武元年、魏孝文帝太和十八年遂に昭文を廢して自立す、之を明帝となす。明帝は高帝の兄の子なり、位に即くや高帝武帝の子孫を殺滅して遺類なからしめき。

廢帝海陵王

明帝

時に魏の孝文帝は南朝簒弑の事を聞きて、西紀四九五年齊明帝建武二年、魏孝文帝太和十九年入寇し、鐘離安徽鳳陽府壽州鳳陽縣壽陽等を攻め、翌年更に入寇して南陽河南南陽府を拔き、新野河南南陽府新野縣を下し、樊城湖北襄陽府を攻め義陽湖北襄陽府を圍み、齋軍屢、敗れしが齊室幸に無事なるを得たり。既にして明帝は西紀四九八年齊明帝永

魏齊を伐つ

廢帝東昏侯

齊室亂る

蕭衍齊を簒ふ

泰元年、魏孝文帝太和二十二年死し、太子寶卷立ちて廢帝となるや、魏の孝文帝は高車の叛けるを機とし、喪を討たずと稱して北に還り、討て高車を降しぬ。齊は廢帝また昏淫にして遊嬉度なく、蕭遙光、蕭坦之、徐孝嗣、劉瑄、江祏及祏の弟祀の六人を寵用して六貴と稱し政また亂れしが、祏等兄弟は廢立の謀露はれて誅に伏し、遙光もまた兵を擧げ事成らずして死し、光嗣、坦之また相繼ぎて殺され、太尉陳顯達は尋陽に起り建康を襲ひて敗死し、豫州刺史裴叔業は壽陽を以て魏に降り、將軍崔慧景は江夏王寶元を奉じ建康に迫りて敗死し、齊の疏族にして尚書令なる蕭懿もまた讒を以て殃死するに至り、齊帝全く人心を失ふ。是に於て蕭懿の弟雍州刺史蕭衍兵を襄陽に起し、南康王寶融もまた江陵に起り、相連和して寶融は和帝と稱し衍を以て諸軍を都督せしめ、次で進んで郢城を下し、尋陽を破り遂に建康を圍む。王珍國等廢帝を弑して衍を迎ふ、衍乃ち廢帝を追廢して東昏侯となし、城に入りて人民を鎮撫し、自ら相國となり梁公に封ぜられて九錫を加へ、更に爵を進めて王となりしが、時に和帝は姑孰にあり詔して帝位を讓りしかば、衍遂に大統を繼ぎ國を梁と號す、之を高祖武帝となす、齊は蕭道成より七主二十三年にして亡ぶ、實に西紀五〇二年齊和帝中興二年、魏宣武帝景明三年なり。

第三十五章　魏の分裂　梁の紛亂

魏の宣武帝

魏の宣武帝―魏梁を伐つ―孝明帝―胡太后制を稱す―武人の跋扈―胡太后の淫縱―孝莊帝―爾朱榮魏の政權を握る―魏の內訌―爾朱氏の亂―節閔帝―高歡爾朱氏の亂を平ぐ―孝武帝―高歡孝武帝を逐ふ―魏東西に分る―西魏の宇文泰文帝を擁立す―東魏の孝靜帝―東西魏の對立―東魏と梁―東魏の侯景梁に降る―梁の武帝の治績―武帝の崇佛―梁東魏を討て敗る―侯景反す―簡文帝―梁の紛亂―北齊東魏に代はる―北齊の文宣帝―侯景誅せらる―梁の元帝―西魏の恭帝―梁の元帝西魏に降る―後梁興る―梁の敬帝―陳霸先梁を簒ふ―宇文覺西魏を簒ふ―魏亡ぶ

魏は孝文帝西紀四九九年宋廢帝永元元年、魏孝文帝太和二十三年を以て死し、太子恪立ちて宣武帝となる、梁の武帝の即位を距る三年前なり。宣武帝尤も佛教を好み、親ら佛書を講じ永明間居寺を作り、大に佛教を奬勵せしかば、僧徒の西域より來るもの三千餘人、佛閣の數一萬三千餘に及び、曩に太武帝に迫害せられ